

地底の仏師

へか帝

幻想郷の地底に怨嗟の鬼ぶち込む自己満足のやつです

※ p i x i v に マ ル チ 投稿

目次

地底の仏師	1
嫌われ者代表	17
それから	31
戻りの道	47
封じられた妖怪	61
空から女の子が	75
別れたり出会ったり	91
地獄鴉	107
神さま仏さま	123
異変のあと	137
天狗	151

秘伝

バックドア

地底の花

救いの担い手

さくら

地底の仏師

強めの幻覚

修羅になり損ない、積もり重なった怨嗟の果てにみすばらしい鬼へと身をやつした男がいた。

衰えることを知らぬ業火に身を苛まれ続けた男は、だが一人の忍びによって葬られた。苦悶の中にあつてなお死を享受できなかった男は、鬼になり果てた末によりやく逝けたのだ。

だが、因果の輪はなお巡る。男は忘れ去られた者たちの集う楽園の更に地底。忌み嫌われた妖怪ばかりが集う旧地獄にて目が覚めた。

ここがどこであるのか、珍妙な装いの少女らは何者か。どれもこれも、さして興味はない。

けれど、鎮まりきった怨嗟の炎を傍らに、鬼はふと思う。

今ならあるいは、己にも穏やかな顔の仏さまが彫れるだろうか。



いつとも知れぬ内に、この地底に鬼がひとつ増えた。

それは、見越すほどの巨軀に真紅に燃え盛るたてがみをそなえた鬼だ。左腕は半ばから切り落とされ、左目はえぐり取られている。

地底の旧都は、地上の人間に見切りをつけた鬼たちの楽園。忌み嫌われた妖怪が集い、独自の社会を形成している極めて特異な空間であり、稀ではあるものの新参者が地底に現われることもある。

そうした場合は、旧都に居を構え少しずつ地底の社会になじんでいくものだが、その鬼は珍しいことに旧都には足を運ばず、地上と地底を繋ぐ唯一の通路である縦穴に住み着いた。

いや、住み着いたという表現では語弊がある。

鬼より鬼らしいその風貌のその鬼は、昼夜を問わず、縦穴の断崖を相手に鬼らしからぬ行為に耽っている。

とどのつまり——仏を彫っているというのだ、鬼が。

今や縦穴の厳めしい壁面には、その断崖に背中を預けるように巨大な仏像が無数に削り出されていた。それはこうした芸術に明るくない者でさえも感じ入るものがある、大層なものだった。

これについて同じく縦穴を住まいとするとある土蜘蛛がいるのだが、彼女に言わせれば『退屈な岩壁よりよっぽど映えるからオッケー』とのこと。それから、その巨軀と隻腕が嘘のような身のこなしで断崖を飛び回るのが見えて面白いとも。地底の妖怪は底抜けに前向きである。

ただ、土蜘蛛が言うに人語を介さず奇行に走る低能な妖怪というわけでもないようで、会話を試みれば一言二言ばかりのひどく偏屈な返事が返って来るらしい。

そんな話題の尽きぬ鬼だが、実は稀に旧地獄街に姿を現すときがある。

それは、旧都の入り口の大橋の番をしている橋姫が手慰みに篠笛を吹いたとき。誰の言葉にも耳を貸さずに、仏を彫ることに全霊を注ぐ鬼が、笛の調べが聴こえ

たときだけは橋のたもとにあぐらをかいて座りじつと橋姫の篠笛の演奏に聴き入る。やがて演奏が終われば、また仏を彫りに戻る。

橋姫も最初はすわ何事かと警戒したもののだが、口を利かずにただ演奏を聴いて、満足したら帰るだけだとわかってからはそれもなくなった。燃え盛るような図体と厳めしい顔は恐怖を煽るが、所詮鬼など旧地獄ではごくありふれた存在。益もなければ害もないのだからと気にしなくなった。

むしろ、このごろは聴衆のいなかった篠笛の演奏を聴く者が現れたということ、一層演奏に力が入ったとさえ言える。

そして、ある時。

また笛の音に誘われた鬼が大橋へ足を運んだ。

いつも赤い大鬼が一匹。けれど、今回は一人先客がいた。

それは額に深紅の一角を備えた金髪の女だった。

「おお、本当に来た！」

「別に嘘なんてつきやしないわよ。ましてや鬼を相手に。軽口ばっか叩いて妬ましいわね」

大声を上げた女と、橋の欄干に背中を預けたままそれを迷惑そうに答える橋姫。わずかばかりの会話であつたが、その気安さから二人が長い付き合ひであることが窺えた。

けれども、鬼の興味はそこにはない

「……笛は、もう吹かんのか」

「まあね。こいつに頼まれたから吹いただけだし」

「そうか。……邪魔したようじゃな」

一角の女が赤鬼を見つけたのをきっかけに、橋姫は演奏を止めてしまった。

笛の音が聞けぬなら、長居する理由はない。鬼に橋姫に演奏を乞うつもりもなかった。

「待ちなつて！ パルスィに頼んだのは私があんたに会いたかつたからさ。なにせ、聞きたいことが山ほどある」

興味を失つて踵を返そうとする大鬼を一角の女が慌てて引き留める。

大きく目立つ角もそうだが、尋常ならざる存在感の女だった。まるで靈峰がひとつ人の形をして佇んでいるような、荒唐無稽な威圧感を感じる。恐らくは、彼女も

鬼なのだろう。

パルスィというのは、どうやら篠笛を吹いていた緑眼の橋姫のことで間違いなさそうだ。

「儂は、仏を彫らにゃあならん。他をあたりな」

「それだよ。お前さん、仏を彫ってるんだって？」

赤鬼が、傷だらけの骸の様な貌をしかめた。

「鬼が仏を彫っちゃあ、ならんのか」

「まさか！ そんな決まりはここにはないよ。私も一目拝んでみたが、ありや大したもんだ」

旧地獄街道のように人妖が集う場所であれば、規則があつて当然。住まいを同じとする土蜘蛛からクレームは飛んできていないものの、あの縦穴に手を加える行為が彼らのコミュニティに違反してる可能性もあった。仏師も周囲と無用な軋轢を生むのは本意ではないので、それを聞いて少なからず安堵した。

「なら放っておきな。儂もお前さんらに迷惑をかけるつもりもない」

「別にあんたが仏を彫るのを邪魔しようってんじゃないさ。ヤマメともうまくやつ

てみるみたいだしね。なあ、あんた名前は」

「名か。名乗る名など、元より持ち合わせておらなんだ」

「冗談はよしてくれよ、あんたほどの大仰な鬼に呼び名一つないなんて筈があるかい」

女の言葉に、赤鬼は目を細める。とうの昔に捨てたとはいえ、己は忍び。人に語れる名なぞ持ちうるはずもなし。誰に名乗ることもなく、人が付けた浮き名ばかりが揺蕩うばかり。そうして歴史にその名が紡がれることもなく、人知れず影に溶けるように消えていくのがさだめ。

忍びとして生きるとは、そういうことだ。

——けれど、その記憶。あるいは同じ時代が生きた人間が汲むこともあるのか。
「そう、じゃな。最期には——仏師と。ただそう呼ばれておった」

彼の脳裏には、己の事を仏師と呼び慕うあの無愛想な忍びの姿がよぎっていた。力を求める男に、捨てられずにいた亡き恩人の忘れ形見を託してやったのが始まりだった。忍びを捨てど、道玄の掛けた時間と手間を思えばどうしても手放せなかった義手だった。それを死蔵するよりかは余程ましかと託して以来、狼は己を仏

師殿と呼び慕い、幾度と牙の研ぎ方を乞いに來たものだ。いや、かの男に託したものはそれだけではない。とうに捨てたはずの、己の忍びとしての研鑽の記録。誰一人継ぐものがないとわかってなお紡がずにいられなかった、道玄と共に苦心して拓いた義手忍技の在り様。あの男は、己がどうすることもできずに抱え込んでいた未練の一切合切の悉くを昇華させたのだ。己の磨いた技は、心は、あの忍びの中に息づいている。

その果てに狼は——己の業に終止符を打った。打ってくれた。因果とは、かくあれかし。

「やっぱりあんた、人間に討たれたんだね。顔を見ればわかるよ」

それは、二言目には妬ましいと続ける橋姫よりもよほど妬ましそうな声だった。羨望の眼差しだった。

鬼はみんなそうだ。人に見切りをつけたと言いつつも、心のどこかで人間に期待をしている。地上を捨てた今もそれは変わらない。

「私の名乗りがまだだったね。私は星熊勇儀。鬼の四天王……って肩書にもう意味

はないか。ま、ただの力自慢だよ」

四天王というのがどれほどの地位を示すかはわからずとも、彼女が有象無象の一匹ではないことはわかった。それから、彼女がそうした地位に頓着しない気質であることも。きつと、かつての彼女は何物にも捉われない振る舞いで周囲の者を振り回したことだろう。

仏師も少しずつ、自分のいる場所がどのような場所か把握できていた。

ここでは、恐るべき化生たちが人の姿をして、人のように生活している。

縦穴の土蜘蛛にしてもそうだ。疫病を司る恐ろしいあやかしでありながら、同時に快活な少女でもあった。彼女には裸一貫で仏を彫る姿は流石に目に余ると言われ、有り合わせのボロ布で編んだ腰巻を用意してもらった恩がある。同じ空間を住まいとする以上、良好な関係を築けているのは幸いであった。ちなみに今度、しっかりとした衣服を用意してくれるらしい。仏師は不要だと言ったが、それでも好きでやっている事だからと聞く耳を持たない姿は記憶に新しい。

「……ちと、喋りすぎだな。儂は戻る」

「待て待て、ここまで来て逃すわけじゃないじゃないか。心配しなくても『茶』の一つく

らい振舞うさ」

「……茶か」

一角の女が一升瓶を取り出し、これ見よがしに揺らしてちゃぷちゃぷと音を立てた。

茶と聞いては仏師も足を止めざるを得ない。思えば、茶とは随分とご無沙汰だった。

まさか酒を目当てにこのなりで乞食をするほど落ちぶれたつもりもないが、向こうから酒、いや茶を振舞ってくれるというのであれば是非もない。

「ちょっと、私の橋で酒盛り始めるつもり？　ほんと妬ましい図々しさね」

「いいじゃないか、どうせこの橋に往来なんてあつてないようなもんだらう。そら、あたしの盃を使いな」

携えたえんじ色の盃に一升瓶が丸々に注がれ、無造作に差し出された。橋に腰を落ち着け、盃を受け取る。常人をして余りある大杯は、巨体の仏師にとって程よい大きさだった。

「この香り……知らぬ茶だが、上物じゃな。それに、茶器も随分と品の良い」

「その杯は鬼の名器さ。比喻抜きで注いだものの位を一つ上げる奇跡の一品。丁重に扱っておくれよ」

大きすぎる盃も、鬼の為に拵えられたものとすれば頷ける。それに、注いだものの位を上げるというのも聞き捨てならない。昔、道玄に酒の湧きだす薬水瓢箪は用意できないかと軽口を叩いたものだが、鬼の伝手を辿れば見つかるだろうか。

「あら、珍しい。貴女がその杯を人に貸すなんて」

「それだけ興味があるってことさね。きつと面白い話が聞けると思ってたね」

二人の会話を余所に、仏師が盃に注がれた酒を飲み干し、喉の焼かれる感覚を堪能しながら深く息を吐く。

「こりゃあ、良い。染みる……。」

「いい飲みっぷりだ、気持ちがいいねえ！」

あとを追うように勇儀もどこからともなく取り出した大ぶりの瓢箪を呷り、浴びるように酒を飲んだ。この鬼、いったい幾つ酒を持ち歩いているのか。

「私はあるたの話肴に酒を飲みに来たんだ。なあ、なぜ仏を彫る？ 随分手に

馴染んでるみたいじゃないか」

「……あの縦穴の仏様は、古い記憶にある仏様を模倣した手慣らしに過ぎん。本来は由緒のある技法かもしれないが、儼にその心得はない」

仏師が今縦穴の岩壁に彫っているのは、師を失くしたのちはぐれ忍びとして修行を積んだ地『落ち谷』の谷あいにある無数の仏像だった。今の仏師には、それまでのように仏像を彫るのは困難を極めた。なにせ、鬼と化した体はなにもかも勝手が違うからだ。故に、手慣らしである。

面長に杏仁型の瞳、対称性のある表情など、特徴的な様式の仏像はおそらくは鉄砲砦を構える落ち谷衆の信仰対象だろうか。落ち谷衆といえば古くは葦名に攻め入った淤加美の一族の末裔とも聞く。辿り続ければルートも垣間見えようが、真相など仏師には知る由もない。

「へえ、どこか余所でああいう仏像を目にすることがあったの。妬ましいわね、そうそうお目に掛かれるようなものでもないと思うけど」

むっつりと押し黙っていたパルスィがここぞとばかりに口を挟んできた。酒盛り文句を垂れてはいたものの、それはそれとして仏師の身の上話には興味津々らしい。

「随分と奇妙な表情の仏像だったねえ。泣いてるんだか笑ってるんだか……」

「……ふん」

仏師の返事は煮え切らないものだった。

それもそのはず、本来の落ち谷の菩薩像はアルカイック・スマイルと呼ばれる穏やかな微笑みを湛えた顔をしている。しかし仏師の彫った菩薩像は阿修羅もかくやという、如何様にも見て取れる複雑な表情をしていた。それは、荒れ狂う憤怒を抑えつけるようにも、深い悲しみを表しているでもある。

仏の顔には、彫った者の心が映る。怒り貌ばかり彫っていた頃よりかはよっぽどマシであろうが、これはどうしたことだろうか。その意味は、彫った仏師にも測りかねていた。

「お前さんもいつか仏を彫ってみるといい。そこで見えてくるものもあるじやろうて」

「私があ？ 無理無理、碎いちまうよ」

「そんなことしたら、地上から天狗がすっ飛んできて新聞の一面を飾るでしょうね」
「……天狗か」

仏師は天狗とは縁深かった。

天狗と言えば、葦名を陰で支える寄鷹の衆を思い出す。寄鷹衆は葦名城の屋根上を駆ける天狗面の忍び衆だ。重い大手手裏剣を得物としており、その重さから生まれる回転の勢いによって瞬時に間合いを詰めたり、一息に大きく飛び去って距離を離したりと縦横無尽の機動を為す技術を持っていた。一部においては、仏師も忍び義手を用いて同じことができるかと踏んでその忍び技を盗んだ経験もある。

また、それとは別に『葦名为天狗』と呼ばれる存在もまたいた。

外から葦名に潜み入る忍びを圧倒的な力によって斬り伏せることで主に忍びたちから畏れられる剣豪である。熟達した忍びが束になってもまるで歯が立たぬことから、顔を合わせれば最後、もはや首が繋がっていることはないと言われる。

だが、二人の言う天狗とはまことの天狗の事を言うのだろう。神通力を持ち、山伏の装いをした妖怪だ。確かに鬼と土蜘蛛がいて天狗がいけないというのもおかしい話である。

「天狗が今更地底に顔を出すとは思えないけどねぇ。おっと、そもそも約定があった」

「……約定があるのか。地の底と、地上の間に」

「ん、そうか、仏師は知らないか。あんたももう地底の住民だ、知っとなないとま
ずいね」

勇儀が語るに、地底の約定とはこうである。

本来地獄の一部だったこの地底世界は、閻魔による地獄のスリム化という名目のもと地獄から切り離された世界である。そうした旧地獄の廃墟に人間から離れられる新天地を探していた彼女ら鬼が目をつけて、廃れた繁華街を利用し社会を築いた。それに脅威を感じた地上の妖怪が、地底の妖怪の地下都市を認める代わりに地底の怨霊の管理を担う事。そしてその見返りとして、地上の妖怪の不可侵を約束した——というものである。

特に、地底の怨霊の管理は灼熱地獄跡にある屋敷の住人が行っているそうだ。

「あんたも地底の世話になってるんだし、いずれ地霊殿のさとり妖怪に顔くらいは見せに行きな。地底の主みたいなものだからさ」

「当人は頑なに否定してるけどね」

管理された土地で住まいを借りるというなら、やはりそのあたりの筋は通すべき

か。仏だけを彫っていたものだが、ままならないものだ。

話の続きが読みたくばあー

感想を書くがよろしかろうー

あっちじゃー

感想欄は、あっちじゃー

嫌われ者代表

ひねくれさとりんがかわいいというだけの話

勇儀との雑談をそこそこに、仏師は地霊殿へと足を運んでいた。特段急ぐ必要はないとのことだが、こういう代表者への挨拶というものは早ければ早いほど良いと相場が決まっている。

何かあってから代表者に話が行った時に「その話私聞いてないけど？」となりその後の関係に支障が生じることがままある。仏師もかつては雇われの立場。こうした上とのトラブルには細心の注意を払う癖があった。

勇儀からは地底以外にも、この幻想郷という土地についても話を聞いていた。

外の世界から忘れ去られたもの、居場所を失くしたものが流れ着く、外と隔絶された秘境。今まで目にした妖怪たちは、外の世界からこの幻想郷へと移り住んできたり、自然と導かれてやってきたという。

仏師がここにやってきたのも、そうした巡り合わせの一部なのだろう。

紫檀色の調度品に腰かける、眼前の妖怪はどうだろう。

名を古明地さとり。紫檀色の調度品で囲まれたこの地霊殿の主だ。くすんだ桃色の髪に、淡いパステルカラーの衣服を身に纏っている。

「儂は――」

「ああ、初めましてですね。さて、なんてお呼びしましょうか。仏師、隻狸、狸々、飛び猿……ずいぶんと呼び名をお持ちのようですけど。あ、驚いてますね。そうです、私心が読めるんですよ。でも本当の名前で呼ばれた試しは無いみたいです。私が呼んであげましょうか？

なんて、嘘です。それは私にも見えませんでした。よほど昔か、あるいはそもそも記憶に無いのか。どちらにせよ寂しい話ですね」

仏師は閉口する。今羅列した名のほとんどが、まだこの地底で誰も知らないはずの古い通り名だった。まことの名前にしてもそうだ。さとり妖怪は心を読む妖怪。であれば、己の心を読み、記憶を辿ってその名を拾い上げたのだろう。

誰も知らぬ過ぎ去りし記憶を懐かしめるのは、その時を生きた本人だけに許され

る特権。よもや、それを侵す者があるとは。さとり妖怪は、あらゆる者からすべからく嫌われるという。

さとりという人物について尋ねたとき、勇儀とパルスィはそれぞれ『度し難いひねくれ者』『満場一致の嫌われ者』と評した。その意味が、ほんの少し言葉を交わしただけで仏師にも理解できた。このやり取りを言葉と交わしたと形容して良いものかは悩ましいが。

「まあ、とんでもない。これも立派な会話ですよ。少なくともさとり妖怪にとってね。あなたにとって会話と呼べるかどうか？ それはどうでもいいです。

で、何でしたっけ。ああ、縦穴に。どうぞご自由に。神でも仏でも好きなだけに彫って頂いて構いませんよ。殺風景ですからね、あそこ。そういえば土蜘蛛は健気に蜘蛛の巣でデコレーションしていたみたいですけど、あれ無駄ですよ。風が強烈に吹き抜けるから作ったそばから壊れるんですよ。めげずにいちいち作り直してよろうですが」

「……」

「ああ、なるほど。どうやらあなたは見た目にそぐわず律儀な性格のようで。珍し

いんですよ、あなたのような方は。あ。自己紹介が遅れましたね、私は古明地さとりと申します。もう知ってました？ じゃあ聞かないでください。まあ私が勝手に心を読んで喋ってるんですが」

どうやら、さとりはずっとこの調子で話を続けるつもりらしい。仏師がなにか告げる前に考えていることに対する返事が飛んでくる。喋らないというより、喋らせてもらえないといった方が正しい。

読心は仏師をじっと見つめる大きなアクセサリーのような第三の目に秘密があるのだろう。言葉を放つ前に次々と話が進んでいくのは手間が省けるとはいえ、奇妙な感覚だった。

「心を読まれるのは不快？ それはそうでしょう。でもどうか大目に見てください。わかってやめられないのがさとり妖怪ですので。めんどくさい妖怪だと思って頂いて構いませんよ。おや、私がめんどくさい妖怪？ ダメですよ、そんな心にもないようなことを考えては。誰にそんなことを吹き込まれたんですか。私がぶちのめしてやりますよ。連れてきてください」

「……」

「あ、鏡はなしの方向でお願いします。さとり妖怪が第三の目で自分を見ると面白いことになっちゃうんですよ。面白そうですね？ 試そうとしないでください。

ええ？ まさか。別におちよくってるつもりはありませんよ。こういう性分なだけですよ。ちなみに鏡で自分を見ても何も起きませんよ。当たり前じゃないですか。常識ないんですか？ あ、他意はありませんよ。おちよくってるだけです」

——仏師とて、それなりに数奇な人生を歩んできたつもりはあったが、流石にこういう手合いは初めてだった。正直、心を読まれているというのを度外視しても頭が痛くなるような相手だった。

「それにしても心を読まれるのにはあまり嫌悪感がないんですね。むしろ楽……ですか？ まあ寡黙なあなたにとってはそうかもしれないですね。それにして随分数奇な生き方をしてきたようです。今度じっくり覗き見せてもらいます。嫌なら言うてくださいね。無視しますけど」

心を読むとまではいかないまでも、言葉少ななままに通じることのできる縁には恵まれていたので、こういう会話には多少の慣れもあった。流石にこれほど過剰ではなかったが。

己の記憶を覗かれるというのも嫌らしいものだが、仏師にとってそれは逃げ出すほどのことではない。これは自分の過去の記憶に一つ折り合いを付けられたのもあるだろう。

未練らしい未練は、狼が断ち切ってくれた。覗き見られるのはいけ好かないが、過去はもう仏師にとって恥ずべき記憶ではない。

「こう見えて私、あなたのこと結構気に入ってるんですよ。ちなみに嫌われ者の私に気に入られて喜ぶ人はまだ見たことはありません。あなたはどうか？ 別に興味ありませんが」

一方的にまくしたてられるだけの時間が続く。何がどうかみ合ったかのかは分からないが、どうにもこのじつとりとした視線のさと妖怪に仏師は気に入られてしまったらしい。慣れがあるとはいっても、この居心地の悪さはあまり経験したいものではなかった。そもそも彼女は地底の嫌われ者だというのが、心を読む能力以上にそれを行使する彼女の性格に原因がある気がしてならない。

「今度遊びに行きますね。だってあなたの彫ったという仏にも興味がありますから。私、出不精だからきつと地底のみんなは驚きますよ。私が外に出ると皆は引き

こもっちゃうんですよ。嫌われ者って大変ですよ。皆さとり妖怪なんて地霊殿から出てこなければいいって思ってるみたいです。出掛け甲斐がありますよね」

そちらから訪ねてくるというのであれば、仏師の方から来るなどとは言えるはずもない。荒れ寺で仏を彫っていたときと同じ、来るものも去るものも拒まない態度を貫くつもりだ。嫌われたものの集う地底の妖怪からさえも嫌われるさとり妖怪であつても、それは例外ではない。例外ではないが、ちょっと気が重くなるのは仕方のない事だった。

「え？ 歓迎してくださいよ。ただでさえ地底の主なんて厄介な役職背負ってるんですから、こんなとき位いいじゃないですか。でも別に何かしてるわけじゃないんですけどね。怨霊の管理はペットに一任してるので」

ペットというのは、地霊殿のあちこちで見かけた動物のことで間違いなさそう。それに加えて、獣の翼や耳、尻尾を備えた人影も目にした。獣の妖怪といったところか。そういう存在もいるのだから、怨霊の管理とやらも不可能ではないのだろう。

「なら何が厄介かって？ 気色悪い幻想郷の管理人と顔を付き合わせなくちゃなら

ないんです。これを厄介と言わずしてなんと言うんですか」

これは根拠のない予測であるが、恐らくその幻想郷の管理人とやらもさとりに対してほぼ同じ感情を抱いているに違いない。

「聞いてくださいよ、あの大妖怪顔を突き合せて大事な話をしようってときにこともあろうか心を覆い隠してテーブルに着くんですよ。さとり妖怪を相手にひどいですよね。きっと人の心がわからないんです」

できるなら誰だってそうすると思う。仏師とてさとりを前に心を隠す心得があったなら、きつと使わずにはいられなかっただろう。まして幻想郷の管理人とやらであれば、秘匿するべき思考が無数にあったに違いない。

仏師としてはむしろこの性格のねじ曲がったさとり妖怪に訳の分からないいちゃもんをつけられていることに同情せざるを得なかった。

「ちょっと、なんで私じゃなくて会ったこともない妖怪に同情してるんですか」

少なくとも幻想郷の管理人というのがこのさとり妖怪よりかはマシに違いないと考えているからである。ハッキリ言って、これより上がいるとは想像もしたくなかった。

「まさか。私の方がよっぽどマシですよ。なにせ向こうは呼んでもいないのにあちらから飛び出してきますからね。引きこもっている私のなんと有情なことか。やっぱり嫌われてる自覚がないやつはダメですね。私を見習うべきです。それにほら、私ってばこんなに円滑にコミュニケーションができるんですよ。なにせ私、人の心がわかるので。」

ところで上と言えば地上ですよ。地上に興味がありますか？　そうですか。やめておいた方がいいですよ。鬼には居場所のない所です。たとえ静かに仏を彫っているだけでもつつかれますから。それに、あなたは面白すぎる。すぐに厄介な人たちの興味を買ってしまうでしょうね」

心の中でしっかりと地上に興味はないと答えたはずだったが、お構いなしに話が進んでいく。それに厄介な人の興味なら現在進行形で強引に買い付けられている真っ最中だ。

地上がどんな場所であるか多少の興味はある。だがそれは、地底を離れて移り住もうと考えるほどではない。約定の事もある。

むしろ、仏を彫るのに没頭できる今の環境が最良であるとさえ考えている。しか

しこの幻想郷という土地に対して仏師は知らなさすぎる現状、話してくれるというのであればそれはそれでありがたい。可能な限り知識は集めておきたいというのも、情報を尊ぶ元忍びとしての名残だった。

「地上と言えども一つ。少し前に人と妖怪が争うときに、新しいルールが作られました。あえて能力に制限を課したうえで行う決闘の形式ですね。要は幻想郷の平和を妖怪の過分な力で脅かさないようする枠といったところでしょうか。まあ、所詮は私の様な女子供のごっこ遊びですよ。血生臭い争いはもううんざりってことですな。」

そうそう、地底って妖怪の行き来は禁じられてるんですけど、人間はその限りではないんですよ。きな臭すぎますよね。だからあの胡散臭い大妖怪は嫌なんですよ」

忘れられた妖怪たちの楽園たる幻想郷では、同時に妖怪が存在するために人間の存在が必要不可欠であるという。決闘失くして、妖怪はその力を保てない。しかし、尋常な決闘では人間は一方的に虐げられるのが道理。そのジレンマを解消するための先のルールということらしい。

なるほど、よく考えられている。とどのつまり、『殺し合い』を『遊び』に変える会心の一手であるわけだ。

小さな箱庭にあって人間と妖怪の共存を実現せんと考え抜かれた代物。彼女の言う胡散臭い大妖怪とやらは、相当の切れ者であるらしい。

もっとも、一介の鬼である己には特に縁のない相手だろう。仏師はそう考えた。「ところで私妹がいるんですよ。見かけたら仲良くしてあげてくださいね」

このさとり妖怪の妹。人となりは全く分からないが、問題児の香りしかない上にこちらの思惑など関係なく強引に仲良くなりに来ることが容易に想像できる。叶うことならば、妹とやらには縁のないまま仏を彫ることに没頭したいものだ。

さて、為すべきことは為した。知りたいことも知れた。

予想外の事があるとすれば、さとり妖怪が輪にかけて厄介なことくらいだろうか。事前に覚悟しておけとは言い含められていたものの、やはり聞くのと見るのでは大きな差がある。それを今回痛いほど実感させられた。まだ一言も口を利いていないというのに、酒を飲み交わしながら一晩語り明かしたような疲れを感じている。

「あら、もう行ってしまいませんか？ 残念ですね、私としてはもう少しお話した

いと思つていたんですけど。あ、別れの挨拶とかそういうの要りませんよ。心読めるので」

「……ああ、これから世話になる」

「——だからそういうの、いらななんですって」

背後から聞こえる人の話を聞けだの、これだから心が読めないやつはどうだのというぶつくさとした傍若無人な文句を垂れる声を背に、地霊殿を後にする。

さとりは過去に類を見ないほどのひねくれ者ではあったが、そう悪い人物ではない。仏師はそう判断した。

故にこそ、不躰に己の過去に踏み入るような真似をされても仏師は氣を立てることをしなかったし、さとりもまた仏師のそうした深く座して受け入れる態度に信を置いた。

少なくとも、地底の代表という立場の愚痴を冗談交じりに零せる程度には。

地底にあつてほぼ全ての妖怪から疎まれるさとりは、もはやどこにも居場所のない妖怪である。地底の代表という役職が彼女を護る最後の一线で、最後のよすがだ。常に針の筵に座り続ける彼女だが——ともすれば、殺しを極めた鬼にこそ安息を

見出すだろうか。

若き読者は死闘の日々を重ね

ただひたすらに読み耽った

如何に伝えようか、如何に書くべきか

そう考えるうち、気づけば感想は飛んでいた

感想には、真空波が伴う

それから

11点お姉ちゃんが好評なようで何よりです。

それにしてもまさかこんなにたくさんの方に読んでもらえるとは思ってなかったよ
ね

「いやあ惜しい、惜しいねえ！」

「なにがよ」

仏師の去った大橋。パルスィは酒が入って声の大きくなった勇儀に辟易しつつも、会話に付き合っていた。

「何がって仏師のことに決まってるだろう！ いやあ、ありゃ大層な鬼だ！ 是非あいつと喧嘩をしたいと思ってね！」

「だったらすればいいじゃない」

パルスィはにべもなく言う。そもそも勇儀が自重とか我慢とかができる気質であるものか。これと決めたら順序も周囲の迷惑も全部すっ飛ばして即行動だ。

そして後始末はだいたいパルスィがやらされる。いくら断ろうが泣きつかれて始末に負えないので、もはや諦めの境地だった。

やるならとっととやれ。

だが、勇儀の反応は想像と違っていた。てっきり「それもそうだ！」と得心してすぐさま仏師の後を追うものかと思っていたのだが、勇儀は力なく笑うばかりだった。

「いんや。ありや受けてくれやしないだろうさ。なにせ、あいつはもう満足してる。心の満たされる死合いに望んで、見事打ち破られたのさ。ほんと妬ましいよまったく」

「ちょっと。嫉妬は私の十八番なんだけど」

「これが妬まれずにいられるかい！くそう、いいなあ！私も人間に殺されたい！」
「だったらまた地上にでも出て毒でも盛られてくれればいいじゃないの」

鬼退治と言えば騙しうちが華。身分を偽り群に紛れ毒を盛って寝首を搔く。それこそが鬼退治の正道である。だいたい、まともな手段で矮小な人間が鬼に勝れるはずもない。

「毒を盛られて喜ぶ鬼がどこにいるんだい。私は強い人間に正面からねじ伏せられないの」

「いや、無茶でしょ。貴女自分が誰かわかつてるの?」

「なんだよ、ただの妖怪一匹じゃないか」

残念ながらこの星熊勇儀、古くは天下に轟く鬼の四天王、語られる怪力乱神。腕を振るえば山に風穴が空き、一步脚を踏みしめれば大地が裂ける鬼の首魁である。

「相手になる人間が可哀そうになるわ」

「少なくとも仏師は望む戦いをできたんだ。見ただろう、あの腕と顔の傷! よほどの手練れと刃を重ねたに違いない!」

「いや、わかんないけど。痛ましくてそんな見てられないし」

そんな熱っぽく語られてもパルスィにはドン引きすることしかできない。鬼という妖怪の価値観には他の妖怪も困惑を隠せないことがままたある。

「私の見立てじゃ、あの傷はそれぞれ別人につけられたものだね。腕の方は迅く、滑るような斬撃に斬り飛ばされたと見る。生まれついでのに力に依らず、修練と研鑽を絶えず積み重ねた人間の放つ技の集大成！ それも、凡百の人間にたどり着けるような域じゃない。

人の歴史を揺るがすような、時代が生んだ傑物。すべてを飲み込まんと貪欲に力を欲した人間に斬られたか？ くう、痺れるねえ！

もしもこの身に受けたらと思うと、想像するだけで身悶えするね……！

というかだ、そもそなんで私まだ五体満足なんだ!? こんなふざけた話があるか!! クソ、クソっ！ せめて指の一本くらい持っていけよバカヤロー！」

聞いてもないのに長々と語り出した勇儀は、恍惚な表情で身悶えしたり突然キレ始めたりと忙しい。パルスィは苦い顔をして勇儀からそっと離れた。

「あー……なら、顔の傷の方は？」

まさか橋姫が理由もなく橋から離れる訳にもいかないので、仕方なく勇儀に話の続きを促してやる。暴れられるくらいなら話を聞いてやったほうが俄然マシだった。

勇儀はすぐさま怒りを収め、仏師の顔に刻まれた深い刀傷を脳裏に浮かべながら、饒舌に語り始めた。

「腕の傷も見事だけどね、顔の方はもっと容赦がない。ただ、殺すこと。それだけに専心しなくちゃあ、あんな慈悲深い刀傷にはならんだろうさ。快樂とか愉悦とかっていうのかな、そういうのとは無縁の……殺したものの業を背負うような、深い悲しみを湛えた一撃だ。

私も、命を取られるならああいうのがいい」

その目に浮かべるのは、やはり羨望の感情だった。因果から、仏師は幻想郷の地底へと流れ着いた。だが、間違いなくあの時仏師は殺された。殺してもらえたのだ。尽きぬ怨嗟の炎に終わりを告げたのは、他でもない狼の慈悲だった。

「こうしちゃいられない、もっといい酒を用意しよう！」

「……はあ？ どういう風の吹き回しよ」

脈絡もなく勇儀が声を上げる。盃には、至高の大吟醸がなみなみと注がれている。追加の酒を用意する頃合いでもないだろう。酔いが回りすぎていいよよ判断力

が鈍ったかとも疑うも、鬼がその程度なら世話がない。

「仏師に振舞うのさ！ あいつの傷自慢を聞いてみたい！」

傷自慢。鬼を始めとした、人間の強さを信じる妖怪たちの間で特に好まれる話のタネだ。

どのようなとき、どのような人間に、如何なる得物で付けられた傷かを誇る。勇儀はそれを他でもない仏師の口から聞き出したいらしい。

パルスィも仏師の話に興味がないと言えば嘘になる。時が来れば、なんとしてでもご相伴に預かってやろうとは思う。

あの鬼は、明らかに篠笛の音に特別な感情を抱いている。ぜひ真相が知りたいものだ。

「よっしゃ、そうと決まれば伝手を辿らにやならないね、邪魔したよパルスィ！」
盃の残りを一息で飲み干すと、それだけ言い残して勇儀は去った。

向かった先は旧地獄街道とは逆方向、地上に繋がる縦穴の方角へと後ろ姿は消えていった。

「あいつ、どこいく気かしら……」



さとりとの会談を終えた仏師は、大きな体躯が嘘のように物音ひとつ立てずに地霊殿の出口へとそのそと歩みを進めていた。

仏師は努めて気にしないようにしているが、そのあとには、影を縫うように犬や禽獣、牛から虎まで実に多種多様な動物たちが続いている。肩には小鳥さえ乗っていた。

この動物たちがさとりと言っていたペットとやらで間違いないだろう。よく見れば一つ目であったり尾が二又に分かれたりしているので、尋常な獣ではないことは確かだ。

行きの道ではどこかに息を潜めていたようだが、帰りになってぞろぞろと顔を出し始めたらしい。しかし、仏師にこのように大行列を作るに至る理由にはまるで心当たりがなかった。

地霊殿の住人は二種類に分けることができる。すなわち、さとり妖怪とペットの二種類だ。その割合は推して知るべし。あえて言うならさとり妖怪の方の絶対値は2である。

言葉を飾らずに言うと、地霊殿のそれはもはや動物園と形容しても差し支えない様相だった。

無数に後を付けてくる大きささまざまな動物たち。その内の一匹、黒猫が駆け寄ってくる。

その黒猫は仏師としばらく並走したかと思えば、「にゃーん」とひと鳴き。すると、黒猫は瞬く間に赤いおさげの少女へと姿を変じた。

「じゃーん。お隣さん登場！」

「……ほう」

仏師は黒猫の変化に僅かに面食らいつつも、それをおくびにも出さずすぐさま辺りに目をやった。霧は満ちていない。

「幻術……では、なさそうじゃな。さしずめ、変化の術といったところか」

幻術は、常に霧と音とに密接な関係にある。霧なきは幻に非ず、音無きは幻術に

非ず。

まず霧のあるところにまぼろしが生まれ、術者がそれを音によって導くことで幻術は成り立つ。

音のない幻と見えたならば、それは亡霊である。

標高の高い葦名は、黄昏時になると急激に気温が落ちることではしばしば霧に満たされる。故に葦名は亡霊の噂の絶えない地であった。

霧のない場所ではじめて見せたのなら、それは未だ己の知らぬ異端の力である。

にしてもこの少女。猫が人に変じたか、それとも人が猫に変じていたのか。頭の猫耳を見るに、前者だと思われる。

鬼と変じた己にも備わる、あやかしの持つ妖力とやら。彼女の見事なまでの変化を見ればその力的一端が知れるというもの。

これを殺しの術に用いれば、いかような忍びの技が生まれようか。

例え身に着け研鑽を重ねようと、忍びを捨てた己には無用の長物。それが分かっているながら、考えることを止められぬ。こんな物騒な物思いにばかり耽っているから、己はいつまでたっても穏やかな顔の仏が彫れぬのだ。仏師はそう内心で自嘲し

た。

「それで、儂に何の用がある」

「さとり様がとても楽しそうにお話してたから、みんなで様子を見に来たのさ」

並び歩くお隣が嬉しそうに表情を崩して言う。お隣も他のペットたちも、随分と主人のさとりを慕っているらしい。他人との関係をこじらせるばかりの読心も、口のきけない動物が相手ならばその限りではないようだ。

「初めはなにやらおっかない鬼が来たってみんな隠れてたんだけどね。さとり様があんなに嬉しそうに話す相手なら心配ないってものさ。いやあ、ほんと杞憂だったよ。あっはっは！」

随分と人好きのする少女だ。にしても、嬉しそうに話していたとはどういうことだろうか。仏師の記憶が正しければ、さとりにはただ一方的に心を読まれて口答え一つ許されないままましくし立てられただけなのだが。

「さとり様はいつも初対面の相手には一発目にシカマスシのさ。人が一番触れられたくないようなデリケートな部分にね。大概のやつはそこで頭に血が上って逆上するか、おぞましさに耐えきれなくなって逃げ出すんだよ」

思い返せば、確かに心当たりがある。顔を合わせて一番初めに仏師は己の名の悉くを掘り返された。まことの名にしてもそうだ。忍びとして生まれ育った者にとって、まことの名は極めて特別な意味を持つ。私情を殺したただひたすらに任を果たす忍びが、誰かにまことの名を伝える相手。それは、その者にとって何物にも代えがたい貴き存在なのだろう。

誰に語ることも無い己のまことの名。それを知る相手が仏師にもかつてはいた。だが、此岸にはもういない。

さとりは記憶が辿れずまことの名までは分からなかったと口にしたが、あれは方便だ。

その気になれば知れたのを、さとりはあえて自らの好奇心に蓋をした。それは、生まれながらに心を読めるさとり妖怪にない倫理観であり、さとりなりの相手への敬意の示し方であった。

仏師もまた、それを見抜いた。

故に読心を忌諱せず己の内をさらけ出し、さとの言葉我真摯に受け止めることを選べたのだ。

これは忍びの修めるところではない。それよりもむしろ、仏を彫ること——ただひたすらに仏を彫り己の心と向き合い続けた経験が、それを可能とした。

「さとり様、色々と教えてくれただろ？ 新入りの仏師さんのために、聞かれる前にわざわざ先回りして話したんだ」

「ああ。感謝しとる」

さとりは自分から地上の話を持ち出すことで仏師に地上を意識させ、そこから仏師の知識量を心を読んで把握し必要最低限の知識を提供した。仏師が幻想郷に流れ着いたばかりで右も左もわからない境遇にあるのを慮っていたのだ。

それも、仏師が静かに仏を彫っていただけという心情を加味したうえだ。ただ何も知らなければただ好き勝手にしゃべり倒しているようにしか感じなかっただろうし、もっと他にいい方法もあっただろう。さとりは、つくづく偏屈で不器用な妖怪だった。

「あたいが一番驚いたのは妹の話をしていたことだよ」

「見つけたら、仲良くしてやれと頼まれたな」

「そう。こいし様っていうんだけどね、さとり様はいつも心配しててね、いつも探

してるんだ」

「……なにか、訳がある。そうじゃな」

「うん。こいし様はね、第三の目を閉じちゃったんだ」

第三の目はさとり妖怪の力の根幹を為す部分だ。そうやすやすと開いたり閉じたりできるような代物ではないだろう。目を閉じるとどうなるだろう。

果たして今まで読めた心が読めなくなるだけで済むのか。仏師はそうは思わなかった。

「目を閉じるとどうなる」

「それが、周りから見えなくなっちゃったんだ。さとり様は、無意識になったって言ってた」

周りから見えなくなる。無意識になる。聞けば聞くほど面妖だ。だが、道理もわかる。

忍びが潜むとき、二つのものを殺す。音と、気配だ。

だが、もしも。

もしも己の意識を、他人の意識さえも殺すことができたなら。

きつとそれは、何人たりとも捕らえられぬ隠密となるだろう。

「……さとりが、儂に妹を任せた理由がわかったわい」

きつと、さとりにも妹は見つけられないのだ。

意識のない者を見つけるのは、常人には困難を極めるだろう。

意識を読み取る第三の目も、無意識が相手では分が悪い。

——だが、忍びの嗅覚を持つ己ならどうだ。

意識を殺すとして、隠密の技術までもは修めておるまい。ならば、如何様にもなる。意識が死んだまま音がすれば、音は浮く。気配もそうだ。死線を潜りぬけ、刹那を見切る忍びの目は、一では無く全を捉える。それを以てすれば、無_レい_レ違_レ和感にはすぐに気づけるだろう。

「やっぱり仏師さんはいい鬼だ。話してみても改めてそう思ったよ」

「ふん。鬼に、良いも悪いもありゃせんわ」

己ほどのろくでなしにかけていい言葉ではない。そも、良いやつが鬼になるものか。

たとえば仏を彫って徳を積もうが、背負った業は誤魔化せない。

その身に浴びた血と、刻まれた大小の傷。重ねた死闘の証が仏師の業の深さを物語っている。

人も獣も、数えることをやめる程度には殺めてきた。

やがて、殺すことを目的に殺すようにさえた。

恩人が元の道に引き戻してくれたものの、殺めた命は帰らない。

腕を失えば、今度は腕のない身で殺す術を磨き始めた。

これをろくでなしと言わずして、なんというのか。

だが、しかし。

お隣は陽気に笑いながら、仏師を見上げて臆面もなく言った。

「ね、いっぱい殺したんでしょ？ 仏師さんからはとっても素敵な香りがする」

——どうやら、己はいい鬼らしい。少なくとも彼女の価値観にとっては。

SEKIROや東方を知らない方も読んでくださっているようなので、用語解説

です。

感想..すごくうれしい

高評価..すごくうれしい

戻りの道

SEKIROにおいて、人物が刀を抜くときにはその人の迷いが垣間見えます。主人公である隻狼と、相対する相手。どちらが淀みなく武器を構えているか見てみると面白いかもしれません。

迷えば敗れる。SEKIROを最後まで遊べば嫌というほど耳にする言葉ですが、中々含蓄があります。（前書きに書くことないから考察垂れ流すマン）

栗色と紅紫のチェックが敷き詰められた仄暗い廊下に、ステンドグラスを通して灼熱地獄の光が極彩色の影を落とす。暗鬱とした空間に散りばめらるサイケデリックな色の破片は、神秘と底気味の悪さが入り混じって超現実的な様相を示している。地底の最奥に居を構える地霊殿に相応しい景色だった。

暗い廊下には、水面を歩くような足取りの鬼と、対照的に跳ねるように楽し気に

歩を進める赤髪の少女がいた。後ろには多種多様な動物の妖怪が続いている。

仏師は、己の業を見抜いてなお朗らかに歩く化け猫を睥睨した。

「随分と、鼻が利く。ちとお前さんを甘く見ておったわ」

自分が数えることも億劫になるほどの数の生を殺めてきたことは、不変の事実である。だがそれを心を読まれたわけでも無しに見抜かれたことには驚いた。妖怪といえど所詮は猫の小娘と知らずのうちに侮っていたやも知れぬ。仏師は己の不徳を自覚し、戒めた。

無論、殺しの経験を言い当てられたとて取り繕うような真似はしない。

それは忍びとしての誇りに泥を塗るだけでなく、背負ってきた業への背徳となる。殺しを誇示することも、否定することもしない。忍びに許されるのは、ただあるがままを受け止めることのみ。

それにしても、お憐もそれを見破ったものだ。忍び技を披露したわけでも、貫くような殺気を身に浴びた訳でもあるまいに。

そんな仏師の疑問に答えるように、お憐が口を開いた。

「あたいはこう見えて火車やつてるからね、死体とか怨霊とかの声が聴けるんだ。

そういう匂いにも馴染み深いさ」

お燐が人指し指をピンと立てると、その指先に大きな青い鬼火が灯った。

火車。悪行を重ねた者の亡骸を奪い持ち去る妖怪で、老いた猫が変じるとされる。火車としての性質から、生きている人間よりもその死体や怨霊に強い興味を持っているお燐は、仏師から漂う濃厚な死の気配を嗅ぎ取っていた。

「ほう、怨霊の。あまり聴きたい類のものじゃあ、ねえだろう」

「そうでもないさ。これがなかなか癖になる」

「とんだ物好きもいたもんじゃ。儂は、二度と御免だが」

仏師は半ば独り言のように呟いた。

かつて仏師は、忍びとして殺しを重ねる内に己を見失った。

何のために技を磨き、誰のために刃を振るうのか。それすら忘れ、ただ斬る悦びに心を囚われた。

故に——修羅に飲まれた。怒りの炎に魅入られたのだ。

その仏師を再び人の道に引き上げたのが、国盗り戦の葦名一心その人である。左腕はその時斬り飛ばされた。人へと返る戻り駄賃だと思えば安いものだ。

例え一度は人を取り戻せども、修羅へと堕ちかけた代償は大きい。

仏師はその報いとして、渦巻く戦禍によって降り積もる怨嗟の声をその身に受け止め続けねばならなかったのだ。

怨嗟の炎はおぞましい。人を一人、鬼に変えるほどには。

力を求めるあの男は、己とは違う道を歩んだ。

すすき野原で拾った死に掛けの狼だ。彼が忍び義手の整備を請いに戻ってくる度、仏師は狼の目を見ていた。それは、いつか瞳の内に憤怒の色が燦ってしまいうのではないかと恐れていたからだ。

だが、それは要らぬ心配に過ぎなかった。あの愛想の無い狼は己と同じ轍を踏まなかった。人を殺め続けようと、決して己の目的を見失わなかったのだ。

為すべきことを為す。狼の目に宿っていたのは、最後まで曇りなき信念のみであつた。

思い返すと、まるで愛想はないが不思議と人に好かれる律儀で憎めぬ男だった。はてさて、一体誰に似たのか。

それにしても、と仏師は訝しむ。

己に降り積もった怨嗟の炎は狼が悉く斬り払ったはずだった。炎も織り成せぬほどの僅かな残滓はあれど、声を聴けばそれだけでわかるものなのか。

「ま、本当の所は声を聴くまでもなかったんだけどね。だって、こんなに良い匂い」
「む……」

鬼火を消したお燐は、仏師の灰のように青ざめた右腕に顔を寄せてその香りを存分に堪能していた。

怨霊の声を聴くまでもない。ということは怨嗟の声を汲み取ったのではなく、漂う死臭から察したという事か。

仏師は己の纏う死臭を忌むべきものであると考えていた。これは人の倫理に反する証左であり、怖気をかき立てる化生のそれだと思ったからだ。

だがそれは人間にとっての話。

人の血を啜り心を喰らう妖怪にとって、その価値観は反転する。鬼の身体で人の理性を抱える仏師は、このときようやくそれを理解した。

誰も彼も人の姿をしている為に勘違いしがちだが、人間と妖怪は根幹的に異なる存在である。

妖怪が存在するのに必要なものは妖怪によって異なるが、おおよそは人間の畏怖である。

人を喰らう妖怪も、そもそも人間に手っ取り早く畏れられるためにそうしていることが多い。思考するほどの知恵を持たない木っ端妖怪ですらそれは理解しており、知恵がないなりに闇雲に人間を襲っては無残に退治されている。

「お前さんの読み通りじゃ。大勢殺した。殺しすぎるほどには、殺したわい」
「うっとりしちゃうね。私みたいな妖怪は特に」

仏師には人間の恐怖がこびりついている。いつからと問われれば、きっと最初からなのだろう。暗殺を生業とする忍びとして、人斬りの修羅として、怨嗟の鬼として。仏師は姿形を変えながら、長きに渡って相対する人間に恐怖の感情をぶつけられてきた。

その残り香は、かぐわしきことこの上ない。

己に付き従うようにあとに続く無数の動物らも、きつとこの香りに誘われての事だろう。さとりとの会話から危険がないとわかり、遠慮がなくなったわけだ。

そういえば、と仏師はさとりとの会話を思い返して疑問をひとつ浮かべた。地霊

殿に住まうペットと呼ばれる魍魎魍魎には役割があると言っていたはずだ。

「さとりが怨霊の管理を任しておる者がいると言っておった。それはお前さんのことか」

「ん？ そうとも。操れるようになるまで随分苦心したんだ。うっかり地上に漏らせば一大事だし」

仏師の手から離れたお燐は、再びこれ見よがしにひと際大きな青い鬼火を灯す。冷えた炎の光は、冥々とした地霊殿の廊下を青白く照らして見せた。

よく見れば、揺らめく炎の奥に髑髏が影を作っているのがわかる。あれが怨霊の主だろう。

「見事じゃな」

「どーも」

お燐は素っ気なく答えたつもりのようなだが、頭の猫耳がぴこりと嬉しそうに跳ねていた。

話を聞くに、どうやらお燐の怨霊を操る力は先天的に備わっていたものではないらしい。後に自ら修練を重ね、怨霊を操れる術を身に着けたようだ。どのような手

段を取ったかなど想像もつかないが、怨霊を自在に操る術が決して容易に習得できる代物ではないことはわかる。

お燐は能天気な性格に見えて、これで結構な努力家らしい。そして、その努力を他人に誇示すること、またそれに驕ることせず、黙々と与えられた職務を全うする。それは、仏師から見ても実に好ましく映った。

ここで一つ、お燐ならば地底の事情にも詳しいだろうと踏んだ仏師は彼女に問いを投げることにした。地上との約定のことだ。

「お燐。なぜ怨霊は地底に封じられておる」

「ん、そりゃ怨霊は妖怪を殺すからさ。だからわざわざ上から下までせっせとかき集めて地底で管理してるんだ」

直前に褒められたが故の機嫌の良さが幸いしたか、お燐は手元の鬼火を弄びながら問いに淀みなく答えた。

妖怪の生命力は常軌を逸する。常識を逸脱すると言い換えてもいい。

心の臓を引きずり出されようが、首を切り落とされようが、妖怪は死なぬ。力ある妖怪の中には異能を振るい森羅万象を揺るがすような存在さえいる。

そうした神とも比肩、混同されるのが妖怪だ。だが、そんな妖怪にも恐れるものもある。そのうちの一つが怨霊だった。

妖怪は強靱な肉体を持つ一方で、精神的な干渉には滅法弱い。取り憑かれ意識を乗っ取られれば、それだけで容易く死に至る。

妖怪の樂園に怨霊は邪魔だった。故に、妖怪に邪魔な妖怪もろともに土の下に放り込んで蓋をしたのが地底である。それでも放り込まれた妖怪たちで新たに樂園を築いて好き勝手生きているのだから、世の中はうまく回るものだ。

「一応封印してるのは怨霊だけじゃないよ。大昔に悪さした妖怪も一緒さ」
「ほう」

地底は閉鎖的で陰鬱とした場所だ。中央に広がる鬼の巨大都市の喧騒がそれを感じさせないが、その空気が肌に合う妖怪ばかりでもないだろう。

望まずして地底に落とされたならば、地上の空を渴望する妖怪がいても何らおかしいことはない。

「血の池地獄のあたりに足を運んでごらん。ずーっと昔から地底に封印されてる奴らが馬鹿やってるから、顔を見せるといいよ。別に気の悪い連中でもないしね」

この地底には、辺りにかつて地獄として稼働していたときの名残がある。

灼熱地獄に蓋をするように被さっているこの地霊殿を始めとして、悪行を為した者を苦しめるための責め苦が点在している。

奇妙な話だが、地獄として捨てられたにも関わらず、好き好んで責め苦を受ける者もいる。贖罪の意識でもあるのかないのか、なんにせよまともな者であるまい。しかしその妖怪らも、大昔より封印され続けているというのに特段邪悪な存在という訳でもないらしい。随分と奇妙に思える話だが、翻って考えてみればただ妖怪であるというそれだけで人間には邪悪に過ぎる。古い妖怪は、往々にして力を蓄えている。顔を拝んでみるのも、また面白いかもしれない。

「あれ、もう着いちゃったね。名残惜しいなあ」

他愛の無い話をしているうちに、長い廊下は終わりを告げ、地霊殿の入り口まで戻ってきていた。お隣たちペットの見送りはここまでらしい。

「行く道でも声を掛ければよかったって後悔してるよ」

「地底におれば、また世話になることもあるじゃろう。ではな」

お隣とそれを囲む小さな百鬼夜行のようになった動物の大群に別れを告げ、惜し

むことも無く地霊殿に背を向け歩みを進める。

さて、珍しく縦穴から離れた場所まで足を運んだのだ。ひとつこれを機に軽く旧地獄を巡るのも悪くない。今までは単に縦穴に籠って仏を彫ることに没頭していれば良いとばかり思っていたが、仏師も勇儀やさとりと顔を合わせて話したことで少し考えを改めた。

過去に嚴重に札を貼られた荒れ寺で仏を彫り続けていたのには、怨嗟の封印という意味が強かった。しかし、その甲斐もなく鬼へと変じた己には、言ってしまうばうに仏を彫る必要は失われているのだ。

それでも彫るのは、自らの心の貌を知りたいが為。誰に言われたわけでもなく、ひたすらに仏を彫るのに没頭するのは、ひとえに仏師の望みである。

だが、郷に入って郷に従うべきだ。誰にも憚らず、やりたいことだけをやっていてはさとの顔も立たない。であれば、通すべき筋を通すことを優先するべきだと思っただ。

すなわち、顔を繋ぐことである。知られていないということは罪である。忍びとしてのがり方を否定しているようでもあるが、疎かにしては不幸を生む。闇夜に紛

れるうちに、味方であるはずの者に刀を向けられたことも少なくない。

鬼の己も、この地底ではどうやら目の敵にされるわけではないらしい。加えてこの幻想郷という閉ざされた箱庭は、横のつながりが強い。手を取り合って仲良しこよし……とまではいかないまでも、ある程度の交流は必要だと判断した。

それにしても……と、地霊殿で律儀に見送りを果たしてくれた住人たちを思い出す。

さとりとの会話から危機がないことを察したとはいうものの、本当によく懷かれたものだ。お憐を始めとしたペットたちとは地霊殿の外でも顔を合わせる機会が多だろう。彼らとの良好な関係を築けたのは僥倖だった。

地底の役割である怨霊の管理は、お憐を筆頭として彼らに委ねられている。

それは本来は地底に住まう者たちの義務とも呼べるものだったはずだ。それを彼らが肩代わりしてくれている。

その恩恵を授かっている以上、己も何らかの形で報いるべきだ。機会があれば力を貸すことも吝かではない。口に出して告げることはしなかったが、仏師は内心でそう決めていた。

だが、忍びの牙を置き、仏を彫る他に能のない己だ。できることもそう多くない。修めた殺しの術を振舞う機会など、この樂園において無用の長物であろう。

だが——もしさとの妹を目にすることがあれば。

そうすれば、土産話の一つでも地霊殿に持っていくくらいは己でもできるだろう
か。

感想

ちぎれた読了感の欠片

集めて感想欄に供えたと作者の文章力が成長し

文字数と更新ペースの最大値が上昇する

封じられた妖怪

危険攻撃は漏れ出した強烈な殺意の表れ。

しかし、物語中盤で立ちほだかるボス、大忍びは危険攻撃をしてきません。
戦闘中のセリフを含めて考えるとつい勘ぐってしまいますね。

地底の辺境、街としての整備の進んでいない外れ。ごつごつとした荒々しい岩肌
に囲まれた場所に血の池地獄はあった。

繁華街で飲んだくれた鬼たちの明るい喧騒に包まれていると忘れそうになるが、
この場所は地上の裏側。辺りに無数に伸びている鍾乳石を見やれば、ここが地上の
遙か下である実感が得られる。

広い広い血の池やその周囲からは、得体の知れぬ蒸気のようなものが立ち上り、
淡い霧が満ちていた。そこに、ゆらゆらと歩みを進める巨影が映る。仏師は血の池
地獄へと足を運んでいた。

強い理由はない。ただ、話を聞くうちに興味を惹かれた。気づけば、導かれるように自然と進んでいたのだ。

自分が何をして生きていくべきなのか。仏師はそれを見失っていた。

人として生き永らえ鬼として一度死を迎えたはずが、異郷の地で目が覚めた。断ち切れぬ因果の鎖。一体どんな力で、どんな理由があった。何を為す為に己はここにいます。

仏を彫る傍らで、ずっとその意味を仏師は探していた。

血の池のほとりへ近づけば、人影が二つ……いや、池の上に更にもう一つ。全部で三人見えた。

「ぶはあっ！ どう！ 何秒だった!？」

「んー、25秒」

「ざんねん、記録更新ならず」

「かぁーっ!! 天下の村紗水蜜ともあろうこの私が、耄碌したか!？」

あれは何をしているのだろうか。血の池地獄から這い出てくる水兵の服装をした少女を、空色の髪をした尼と、空に浮いた異形の翼の少女が機械時計を見せつつ何

やら盛り上がっている。

血の池地獄は誰も浮けない溺死の責め苦。仏師も散々血は浴びてきたが流石に血に浸かった経験まではなかった。

一部始終を見ても、まるで意図が掴めない。何かの時間を測っているようだが。「お、隻腕の鬼が来てるよ。ほら、最近話題の」

訝しんでいるとそのうちの一人、真紅と群青で対となす六枚の翼を持った黒髪の少女がこちらに気づいた。背中から伸びるそれは、もはや触手といって差し支えない程で幾何学的に婉曲した奇怪な形状をしている。見れば見るほど翼としての役割を到底果たせるようには思えない。思えないが、現に黒髪の少女はふよふよと宙に浮いている。

不可解だが、あれで翼としての役割は全うできるようだ。

こちらの様子を窺う翼の少女は、こちらを品定めするような嫌な視線を送っている。

それは不吉な気配を纏っていた。仏師の背中に嫌な汗が伝う。

「それ」

翼の少女が不意にいたずらっぽい声を出した刹那、携えていた三叉の槍からけたましい音と共に紫電が放たれた。

攻撃。

そう判断した仏師は半ば反射で大地を蹴り、中空を舞う。

すかさず右肩に刺さっていた一振りの刀を引き抜き鋼の刀身で以って閃く雷撃を受け、返す刀で雷を払う。

すると、刀身に宿された雷電は一直線に翼の少女のもとへと返っていった。

「うえ嘘オ!? あばばばばば!!--!!」

秘儀、雷返し。

葦名に語り継がれる技の一つ。

古の戦にて、かつて葦名を襲ったあやかしを迎え討った葦名衆の神業である。地に足を付けず、雷が全身を巡るよりも早く雷を返す。

大地を離れ、空を駆けるが本懐の忍びには容易い技だ。

まさか放った雷が返ってくるなどとは夢にも思っていなかった翼の少女はあえなく直撃。電撃に体を痙攣させながら墜落した。

「随分な挨拶じゃな」

「や、やるじゃん……」

音無しに着地した仏師が、黒焦げになった翼の少女に声を掛ける。ぷすぷすと煙を上げつつ、少女もなんとか返事を返した。

流石の妖怪といふべきか、焦げ臭い匂いはするものの肌が火傷した様子はない。そもその紫電も加減してのものだったのだろう。

手荒い歓迎だったが、彼女らに敵対する意思があるという訳ではないようだ。翼の少女、封獣ぬえは噂を耳にしたときから仏師を侮っていた。

鬼の分際で腕を落とされ、顔に致命の一撃を貰うような負け犬に過ぎないと。故に悪戯心のままに、ひとつからかってやろうとちよっかいを掛けた。初対面ついでにどちらが上かとわからせてやろうという打算もあっただろう。

所詮、鬼など力任せしか能がないと高を括っていたのだ。それが誤算だった。故にこの様である。

しかし、鬼がこれほど芸達者な真似をするのを予想しろというのも無理な話。そもそも妖怪など生まれた種族こそが持ちうる力の大半を決める。まさか生まれ

ながらに妖怪としての格が最上位に位置する鬼が技を駆使するなど、常識の埒外だ。

「鬼に喧嘩売るやつがあるかっての」

地面に突っ伏したぬえを呆れた目で見下ろすのは、法衣の少女。こちらはぬえと違って血気盛んな方ではないらしく、敵対する様子はない。むしろ一方的に攻撃を仕掛けたぬえを責めるような口調だった。

同時に、再び血の池に沈みかけていた水兵の少女も陸へと這い上がって来る。

不可解なことに、どろどろとした血だまりから上がったばかりだというのにその衣服は未だ眩い白を保っている。周囲の物体との干渉が不自然だ。推察するに、彼女は霊的な種族なのだろう。

「すごいね今の。それに随分と水の掛け甲斐のありそうな奴」

水兵の少女は陸に錨をかけることで、それを手繰って浮上してきたようだ。

しかし水の掛け甲斐がありそう、というのは燃え盛るようにたなびく朱のたてがみを指しているのか。

水兵の少女は物怖じもせずにならずいと距離を詰め、仏師に血の注がれた柄杓を差し出した。

「やあやあ、初めましてだね。どうだい、景気付けに一杯いっとく？」

——いきなりよくわからない誘いを持ちかけられてしまった。

どうやら、この柄杓でもって頭から血を被れということだと思われる。だが、血の注がれた柄杓を頭から被ることの何がどう景気付けになるのか。仏師は理解に苦しんだ。

ひよっとすると己の知らない風習なのかもしれない。貼り付けられたような笑みを見るに、好意からの行動とみて間違いはないのだろう。しかしなぜだろうか、彼女らは明らかに異を唱えることを許さないような威圧を、やさしさの欠片もない笑顔の裏側から発している。

頭をひねっても答えは出ない。水兵の少女の笑みは深くなるばかりだった。

「相手にしなくていいよ。こいつ、舟幽霊だから。人に水被せたがるんだ」
仏師が返答を渋っているうちに、法衣の少女が助け舟を出した。

舟幽霊。法衣の少女は水兵の少女をそう呼んだ。それは渾名や比喻ではなく、一つの種族である。

船幽霊とは、人を殺す幽霊である。航行中の船を訪ねては柄杓を要求し、渡せば

その柄杓で水を汲んで船を沈め、渡さなければ逆上し嵐を呼んで船を沈めるといふ迷惑極まりないなんとも倒錯的な霊だ。

ちなみに対策は底抜けの柄杓を渡すことであるが、この村紗水蜜はそれを見越して自前で柄杓を用意するという、船幽霊のしきたりを踏みにじる身も蓋もない暴挙で以って対策している。

まさに殺意の権化のような存在だった。

だが、話の分らない霊でもない。一つ身の上話でも語ってやれば興味津々に話に乗ってくるし、幸運にも興味を惹いて雑談に花を咲かすことができる。またとない船旅の友となるだろう。

村紗も思わず熱が入って水を汲む手が加速するというものである。

目を付けた相手は誰であろうが絶対に殺す。手心は加えない。船幽霊の矜持だった。

標的となった哀れな船主には己の不幸を呪うか、身の上話でもして彼女を楽しませる以外にすることはない。

というのは、昔の話。

幸いなことにこの村紗、故あって昔よりも相当に丸くなっている。

今では突然水を掛けてくることにさえ目をつむれば特に危険のない一般少女霊だ。

そんな害悪水難系一般少女霊は、仏師との水難交渉に水を差した法衣の少女に抗議していた。

「ちよつと、人の営業邪魔しないでよ。いいでしょ別に沈めて息の根止めようってんじゃないんだし」

「鬼にちよつかいを掛けるやつがあるかいばかりだ」

どうやらこの法衣の少女、大変珍しいことに良識のある人物のようだ。だが悲しいかな、パルスィと同様に苦勞人の気も見取れる。哀れ、半端に常識を持ってしまったばかりに。

差し当たり、仏師は掲げられた柄杓を押し返した。

彼女には申し訳ないが、仏師もわざわざ好き好んで血を浴びようという気にはない。

「悪いが、血はちと浴び飽きた。遠慮させてもらう」

「えー、残念。水難が恋しくなったらいつでも言ってもいいよ」

もし仏師が是と答えていたならば、彼女は嬉々としてその小さな柄杓で鬼の巨軀に何度も何度も血の池地獄の血を注ぎ頭に被せては悦に浸っていたことだろう。

軽率に答えを出さなかったのは仏師の英断である。

「私は雲居一輪。この生きてる方の命知らずが封獣ぬえで、そっちの死んでる方の命知らずが村紗水蜜。それで……あんたは？　こんなところまで何か用かしら」

電撃、血の柄杓と続いてようやくまともな挨拶である。この幻想郷は言葉が通じる割に話を通じない輩が多い。

一輪と名乗った法衣の少女の対応は前二人と比べると淡泊で、友好的ではあるがそれほど歓迎という雰囲気でもない。お隣の語っていた、封印されているという曰くも関係しているのだろうか。

「仏師という名で通しておる。今は新参者の地獄巡りの最中よ。もっとも、ここを何をしていたのかはまるでわからなんだが」

「あ、今の？　溺死チャレンジ」

溺死チャレンジ。水兵の少女改め、村紗が即答した。

外来の横文字も耳馴染みこそないが、言葉の意味はわかる。

言葉の意味はわかるが、言っている意味はわからない。

手に入れた情報を統合して考えると、なにやら入水して死を迎えるまでの時間を計測しているようだ。

「妙なことを……」

なぜわざわざ自ら溺死に挑まんとするのか。それも死の淵にある霊体の身で。望まぬ不死の肉体を得た者が、あらゆる手立てで死を求めるようなものだろうか。しかし気さくに死に挑む様子を見るに、それとは風情が違う。

妖怪はそれぞれが独特の常識と価値観を持っている。故に自らの常識に囚われてばかりでは振り回されるばかりとなる。今一度、己の常識を捨て去らねばならないらしい。

「要は暇つぶしよ、暇つぶし。することないんだよねえ。あーあ、地上が恋しいよ」
「そろそろ封印されて千年になるんじゃない？」

「え、もうそんなに経つ？」

千年。悠久を生きる妖怪にとっても、それは決して短い時間ではないだろう。

まして地底という閉鎖的なコミュニティならば尚更だ。

「何故、封印されておる」

「大昔に人間と妖怪の共存を志した大馬鹿者がいたのよ。私らはその人と同じ夢見て——まあ色々あって、今ここにいます」

「あ、私は違うからね。悪さしてるのがバレた」

人間と妖怪の共存を志す。村紗が慕った者の語るそれは、きっと人の理解を得られなかっただろう。それどころか、傍目には一個人が妖怪という超越的な戦力を率いているようにさえ映ったに違いない。

それがどう転んだか、彼女たちは地底に封印され、大馬鹿者とやらの姿は地底には見えない。どのような結末を迎えたかは想像に難くないだろう。

それと、意外にもぬえは彼女たちと同時期に地底に来ているというだけで特別縁があるわけではないようだ。彼女の封印の理由は至って分かりやすい。仏師にしたようないたずらを、大衆を相手に楽しんでいたのだろう。

「難儀じゃの。だが、未だ諦めているようには見えん」

「まあね。姐さんには千年経っても醒めない夢を見せてもらったのよ。ここで腐る

つもりなんて毛頭ないわ」

千年という気の遠くなるような時間を経てなお志を保つ。並大抵のことではない。彼女らの慕う人物とは、それほどなのか。

未だ雌伏の時。だが、いつか。いつか必ず、成し遂げる。

それを感じさせるだけの熱を、その目から受け取った。

感想の返信は時間をみつけて少しずつ返していきます。

長編とか週一更新とかしてみたい（願望）

空から女の子が

仏師殿、放っておくと仏彫ってるだけなので話を作るのが難しいという問題があります。

目覚めたとき、正邪は自分が粗雑な藁の上に寝かされていることに気づいた。横になったまま軽く辺りを見回してみても、視界に映るのは冷たい断崖ばかり。見覚えのある景色は映らなかった。

なぜこんな場所で自分は寝ているのか。最後に何があったかうまく思い出せないが、それでも記憶を辿りながら体を起こそうとして——全身に走った激痛に止められた。

「い……ってえ……!!」

思わず声を漏らして身悶えする。

ずたずたになった衣服の切れ目からは、無数の打撲痕や裂傷の名残が覗いていた。

「目覚めたか」

その声は、こちらに背中を向けた大男から聞こえた。

正邪は内心で心臓が飛び出るほど驚愕したが、なんとか声を張り上げることだけは堪えた。

猿のように背中を丸めて座る巨大な男は、横になっている正邪からすれば一つの丘ほど大きく見える。

だというのに、そのスケール感に実感が湧かない。まるで気配の掴みどころがなく、蜃気楼を見ているかのようだった。

だが、その感覚はちらりとこちら一瞥した男の顔を見た瞬間吹き飛ぶことになる。

「お、鬼……！」

燃え滾る髑髏のような貌を見て、正邪は言葉を失った。

鬼は地上から姿を消して久しい。種族のみで語る場合、天邪鬼が最弱の妖怪であり、鬼は最強の妖怪である。

自分ほどの木っ端妖怪がお目にかかるなど、正邪は夢にも思っていなかった。

天邪鬼は弱い。故に、相對する相手は常に自分より上の存在だ。

それに食って掛かってこそ天邪鬼。相手は鬼？ それがどうした、関係ない。そう心を叱咤しても、今だけは体が怖気づいて動けなかった。

「……くく、心と体がまるでちぐはぐじゃな。別に取って喰いなどせんわ」

「ここはどこだ！ どうして私はここにいる!？」

身体は竦んで動かないが、それならせめて口先だけでもと声を上げる。

仏師の言葉から命の危険がないと分かって安堵し、付け上がっただけでもある。

仏師はそれを窘めることも無く、淡々と問いに答えた。

「ここは地底世界。地獄と呼ぶ者もおるな」

「地獄だって……?」

地獄。生前悪事を繰り返した悪人を苦しめる死後の世界。

学のない正邪にも、それくらいの知識はあった。

「じよ、冗談じゃねえぞ！ そもそも私は死んでねえ!」

地獄に落とされる身の覚えは両の手と足の指を使っても数えきれないほどあるが、生憎死んだ覚えはない。大人しく裁かれてやるつもりなどさらさら無かった。

「上を見てみるといい」

正邪は言われるがままに視線を上に向ける。

すると視界を囲むように広がる岩壁の遥か向こう側に、僅かに光を放つ小さな小さな穴が見えた。

「わ、私はあそこから落ちてきたのか……？」

「さしずめ、ヤマメの張った糸にでも引っ掛かったんだろう。でなけりゃあ、この高さだ。人の形すら保てん」

呆然と彼方にある光の点を見つめ続ける。

あまりにも——高すぎる。

平時なら空を飛べばいいだろう。だがそれはできない。

感覚でわかる。生命の維持と肉体の再生に、なけなしの妖力を全て注ぎこんでしまったのだ。

弱すぎる正邪の身体には、もはや空を飛ぶ程度の余力さえ残っていなかった。ここを出るには、自力で登らなくてはいけない。

その事実は、正邪の頭に絶望の二文字を浮かべるには充分すぎた。

「たかが二束三文の腹いせにここまでするかよ……！」

地上の光を目に焼き付けている内に、正邪は自分がここにいてる訳を思い出していた。

何のことはない。食い扶持を繋ぐために里で常習していたスリが原因だ。

その日、鬼人正邪は下手を打って悪事が里の人間に露見したのだ。

人里とは、幻想郷において唯一の人間の集落である。

人間以外の種族にも人里は解放されており、多種多様な商いが取り交わされるため幻想郷で一等の賑わいを見せる場所だ。

だが、人以外の種族に解放されているといえど、それは妖怪が無遠慮に足を踏み入れて良い場所というわけではない。

外から見てもわからぬ程度には人に化け、暮らす人々に混乱を招かない程度の配慮が必要だ。

一応獣の尻尾程度なら隠さなくとも見てみぬふりをしてくれるだろう。

正邪の繰り返し盗盗は、人里に忍び込んだ妖怪がするには些か浅ましすぎるもの

の、それでも里の人間から敵視されるのには充分すぎた。

事実里には正邪の指名手配が出回っており、その日も警備を担う者たちが目を光らせていた。

そんな折、正邪は馬脚を現した。

瞬く間に衆目を集めた正邪は里の退治屋に追われ、追跡は里の外まで続いた。

人に追われる妖怪という情けない構図には、正邪が弱すぎるという身も蓋も無い理由がある。

人の嫌がることを好み、人に嫌われることを喜ぶ。それが天邪鬼という妖怪だ。武器を持った大人一人相手に手も足も出ない程度には弱い。その癖各所で悪事を働くものだから、目の敵にされて返り討ちに合う。

今回もその一環だった。

そうして逃げ惑う内、正邪は焦りに焦って確認もせずに足元の洞に飛び込んだ。里の退治屋の実力はお世辞にも高いとは言えない。故に、活動は撃退が主で庇護の無い人里での長時間の活動は控える傾向にあった。

つまり、正邪はとくに引き返した追手を恐れて死に物狂いで走り、拳句に自ら

を更なる窮地に追い込む間抜けを晒したことになる。

全て己の浅慮が招いた結果であるが、本人がそれに気づくことはないだろう。里の退治屋は謂れもない逆恨みを買わされただけである。

「お前、さっきから何してる」

正邪はずっと仏師の手元から聞こえるがり、がり、と規則的に岩を削る音が気になっ
てしょうがなかった。

「仏を彫っている」

「は、はあ？」

「何度彫ろうと、これがどうしてままならぬのよ」

仏師は手に持った硬い鉋石で、岩に打ち付けて仏の形を削り出していた。

「地獄で仏なんて彫って何になるんだよ」

「どうにもならぬから、仏を彫っている」

「い、意味わかんねえ……」

「そら、見てみろ」

倒れ伏す正邪の傍らに、作り上げた仏像を投げ寄越す。

体をよじってそれを見ている。

「おい、これのどこが仏なんだよ。仏はこんな顔しねえ」

怒り、悔やみ、悲しみ、悼み、嘆き。全てを同時にこなそうとすれば、こんな貌になるだろうか。今まで見たこともないくらいに複雑な感情が顕れている。

超常的で、ひどく人間らしさのある仏だった。

「これは言わば鏡よ。自分のありのままの姿が映される」

「じゃあ、この仏がお前の姿なのか……？」

「いつか、穏やかな顔の仏様を彫らにゃならん」

「なんで」

正邪の疑問に答えるように、仏師は半ばから斬り落とされた左腕を正邪にまっすぐ向けた。

「見えるか」

「ッ！ お前、体の中に火が……」

息を吞んでそれを見つめる。

腕の断面には、昏い炎が走っていた。火勢こそ微弱なれど、火は仏師の内側をち

りちりと焦がしていた。

「うかうかしていると、こいつに燃やし尽くされっちまうのよ」

今は弱い。だが、いつまでも弱い保証はない。

斬り払われた怨嗟の炎は、未だ完全に潰えてはいないのだ。

また我を失ったとき、今度は誰が己を止められるだろう。樂觀はできない。

はじめはつげなくてはならない。

「お、お前が燃えようが私の知ったことじゃねえ！ それより他に地上に繋がる道はないのか!!」

「お前さん、上に戻るつもりか」

「当たり前だろ！」

何とか体を起こし、仏師に追及する。

僅かに身じろぎするだけであちこちに鋭い痛みが走る。折れた骨が再生しきっていない。

それでも身体を動かすのは、反骨精神の賜物だった。

「残念だが、他に道はねえな」

「クソ、じゃあ登るしかねえか……」

正邪の小さな呟きに仏師は僅かに瞠目した。

この矮小な小娘は、未だに地上に登ることを一寸たりとも諦めていない。

現実が見えていないのかと思ったが、どうやらそれも違う。

何か、強い激情に駆られている。強い意志がある。傷付き弱り果てた姿でなお吠える姿はなんとも滑稽で、だがそれ故に気高かった。

「何故、そこまで地上に拘る。上にはお前を虐げた連中がいるんだろう」

「——だから戻るんだろうが！」

正邪は立ち上がった。



岩壁に手を掛けてよじ登り、程なくして力尽きて落ちてくる。その拍子にまた身

体を痛め、身体を癒す為に力を浪費する。

ずっとその繰り返しだ。それを昼夜問わず繰り返している。

「あのちっこの、まだやってるの？」

仏師の傍らに、吊るされた白い糸を伝って金髪の少女が逆さまに降りてくる。

黒谷ヤマメ。仏師よりも古くからこの縦穴に住み着く妖怪で、仏師が幻想郷で共に過ごした時間が最も長い妖怪だ。

地底に落ちた正邪の命を間接的に救ったのも彼女である。

「あの様子じゃあ、死ぬまで止めんじやろう」

「愚かだね。それで命を落としちゃ世話ないでしょうに」

くると宙返りして地面に降り立ったヤマメは、嘆息しながら言う。

「弱っちいのに馬鹿なやつ」

「くく、だが上手い。登るたび、少しずつ上には進んでいる」

「いや、どうせ落ちるんだからその前に死ぬじゃん」

珍しいことに仏師は仏を彫る手を止めて懸命に壁をよじ登る正邪を眺めていた。

その表情には、僅かな笑みが見える。

「何がそんなに面白いのさ」

「ただ、昔の己に重ねているのよ。無様に谷あいを跳ねた、昔をな」

まだ忍びとして未熟な頃、仏師は片割れと共に落ち谷で忍び修行に励んだ。

がむしやらに上を向いて登り続ける正邪の姿は、青臭く懐かしいものだった。

仏を彫るばかりでは見えないものもある。正邪の愚直でひたむきな後ろ姿は、仏を彫る手を止めて見るだけの価値があった。

「へえ、聞かせてよ」

「くく、酒でも飲まにゃあ、顔が赤くなっちゃって語る気もせんわ」

「なんだよケチ」

それを聞くには、きつと羞恥で染まった顔色を誤魔化せるように、酒豪の仏師でも顔が赤くなるような特段辛い酒がいいだろう。

「儂の見立てじゃあ、次に落ちたときがあやつの最期じゃの」

「間違いないね」

仏師の忍びの視力は正邪の限界を捉えていた。疲弊した両腕は小刻みに痙攣し、

半端に癒えた切り傷が開いて鮮血を流している。落ちるたび硬い大地に打ち付けられた肉体はダメージが蓄積し、軋みながら悲鳴を上げている。

まして、あの過去一番の高さ。そこまで辿り着いたその努力は大したものだが、登り切れぬのなら意味はない。

ヤマメも同じ見解らしく、純粹な妖怪から見ても正邪が危険な状態にあることは火を見るよりも明らかだった。

「さて、ここに屍を晒されちゃあ気が散って仕方がない」

「それに、仏の前に死体があっちゃあ恰好がつかないね」

「ふ、例え鬼の彫った仏でもか？」

「誰が彫ろうが仏は仏でしょ」

仏師はヤマメとやりとりを交わしつつ、正邪の登る縦穴の高さを目測で測る。

人外の膂力を持つ仏師とて、容易に到達できる高度ではない。例え摩訶不思議な術を用いて空を飛んだとしてもある程度の時間を伴うだろう。

「ヤマメ。糸を借りたい」

「ん、どんなのがいい？」

「縄のように使う」

「ほい、一丁あがり」

ヤマメが手元で素早く指を格子状に交差させると、瞬く間に重厚に折り重なった糸がヤマメの手にとぐろを巻いて積みあがった。

糸の扱いに長ける土蜘蛛の真骨頂である。

「伸縮性抜群だけど大丈夫？」

「いや、都合がいい」

仏師はヤマメから受け取った糸の先に根本から折れた刀を括り付け、それを足を使って器用に右腕に巻き付けた。

それを振り子のように揺らしてみたり、縄の伸びの具合や握りを確認し始めた仏師を、ヤマメは怪訝な目で見つめた。

「……なにそれ」

「鉤縄——と、呼ぶにはちと不格好すぎるか。しかし不足ない」

忍びの使う忍び道具のひとつ。常人にたどり着けない高所や崖を渡るための道具。

これは鉤は粗末だが、縄は極上だ。

仏師もヤマメには散々世話になっている。裸一貫の姿だった仏師に衣類を作り、住まいを割くどころか、寝床があるだろうと言って自慢の建築力で外れに小さな社まで築き上げてもらった。

まさしく至れり尽くせり。恩の一つでも返さねば、男が廃るというものだ。

一度、ヤマメは崖を跳ぶ仏師が好きだと語った。

この程度で返せるとは露ほども思っていないが、興じさせる見世物くらいにはなるだろうか。

仏師が見上げれば、今まさに正邪が力尽き、空中に身を投げ出しているところだった。

「ヤマメよ、衣食の恩じゃ

——落ち谷の飛び猿を知るがいい」

毎週末に更新したいという気持ちがある

別れたり出会ったり

月曜日の夜一時過ぎはまだ週末です（強弁）

「どうして助けた!？」

冷たい地の底で、無造作に転がされた正邪が吠える。

「誰がお前さんの亡骸を掃除すると思っとな」

それを仏師はにべもなく返す。縦横無尽の大闊歩の後だというのに、彼に息一つ乱した様子は無い。

死体の始末は存外に面倒だ。自分で手に掛けたのなら上手くやるが、勝手に落ちて死なればそうもいかない。ここは水場も近くないので、掛かる手間は考えたくもなかった。

「私は死なねえ」

「死なずでもあるまいに、よう吠える」

死なず。あるいは蟲憑き。そう呼ばれる不死の存在を仏師は目にすることがある。身中に蟲の宿る蟲憑きは、如何なる殺しの技を以ってしても死に至らない。

首を落とされようと体内に潜む蟲が強引に生命活動を維持し、やがては修復してしまうのだ。

あれは、まさに不死身の体現である。

それと比べれば、限りある生命に必死にしがみつくこの小鬼のなんと人間らしい事か。

「使え」

仏師は腕に巻いた鉤縄を解き、正邪に寄越した。からり、と折れた刀が乾いた音を鳴らす。

正邪はそれを一瞥して、仏師を睨んだ。

「私に使えるわけないだろ」

「いや、できる」

ひたむきに挑戦を続けた正邪が零した初めての弱音を、仏師は即座に否定した。

思ってもみなかった返答に、正邪は僅かに怯む。

「どうしてそう思う。言っておくが私は弱いぞ」

「それよ」

仏師はしたりと答える。

その声に、見下したり揶揄うような色はない。

「お前さんには特別な力がない。故に、己の身と、技だけを頼りにするしかない」

「……そうだよ」

正邪は不貞腐れながらも、渋々と肯定した。言われずとも、自分自身の強さなど、他の誰より知っている。

正邪は妖怪でありながら、その力は人間とほとんど遜色がない。だからこそ、選べる手段というものもある。仏師はそう嘯いた。

「これは、言わば人の力よ。弱く矮小で、技を磨くことでしか力を養うことのできぬ、弱者の手段」

そも、妖怪であれば道具など使う意味がない。むしろ、枷になる場合の方が多いだろう。

それくらいには、妖怪という持つ力とは強大である。だが、何事にも例外というものとは存在する。悲しいかな、正邪は自身の体こそが何よりの枷だった

「腕を挽がれ老いさらばえたこの儂が空を駆けたように、修め得た力は己の宝となる。こいつばかりは、何人たりとも盗めぬのよ」

正邪は転がされた鉤縄を見やる。蜘蛛の糸と碎けた刀で構成されたのがらくたで、この隻腕の赤鬼は空を舞って見せた。

仏師の言う宝とは、鉤縄ではなく養った技術の事を指す。

弱者とは常に強者に蹂躪され、奪い尽くされる運命にある。

鉤縄を失おうと、修めた技は失われない。鉤縄は、また作ればいい。

決して奪われぬ宝。それは、常に奪われてきた正邪に甘美な響きをもたらした。

「私にもできるか」

「ああ。猿でもできる」



「あげちゃって良かったのかい」

「ああ。所詮、仏を彫るには無用じゃ」

縦穴に橋のように架けられた糸に腰かけたヤマメと言葉を交わす。

あれは、より高所へと飛ぶ為の道具である。地上を指すわけでもなく、地底に住まい仏を彫るのに没頭する仏師には必要のないものだった。

「にしても、本当にいいものが見れたよ。見事という他ないね！」

縄の伸縮と持ち前の跳躍力で縦穴を駆って見せた仏師の姿は、無事ヤマメのお氣に召したらしい。魔法でも妖術でもなく、ただ練り上げた技術で空を飛ぶ姿は、まさしく興が乗る光景だった。

「昔取った杵柄というやつよ。それよりも、見てみる。やはり上手い」

仏師の視線の向こうには、数刻前と変わらずに縦穴を登る正邪の姿がある。前と違うのはその疲労の度合いと、到達した高さだろう。

目星をつけたところに上手く投げられず試行するような拙さは見受けられるものの、使い方をよく心得ている。すいすいと飛び上がり、着実に地上へと近づいていく。

「自慢の技、盗まれたんじゃないの」

「さて、な」

ヤマメが小さな笑いを含んで言う。

盗めぬ技を見て盗む。いかにもあの天邪鬼が考えそうなことだ。あれは、ほどなくして正邪は地上へと抜けるだろう。

そう思っていた傍らで——上空に、こちらへ飛来する銀の光を見た。

それは、鋭い刃物だった。

気づいたヤマメが即座に糸を編んで仏師を守るように幕を張る。

だが、刃は風を切るように容易く糸を切り裂く。だが僅かに速度が落ちた。

仏師の脳天目がけて迫る刃。

それをすんでの所で首を逸らして避ける。

見上げれば、もう正邪の姿はない。

「とんだ置き土産じゃの」

「見事に恩を仇で返したね」

ヤマメと二人でため息を吐く。

今の一投は、疑いようもなく正邪の仕業だった。

唯一の武器を地上に上がる寸前まで秘め、自分が彼らから手の届かない場所に行く瞬間に牙を剥く。

百に一つも敵わない鬼の前に、自分の安全を保障してから傷跡を残さんと高所から投擲された短刀は、落下と共に加速し、恐るべき殺傷能力を伴った。

疑いようもなく致命の一撃を狙ったそれは、天邪鬼の歪な感謝の形だろうか。

「とんだじゃじゃ馬よ」

短刀は、背後にあった小ぶりの仏像に被せられた帽子もろとも貫いて深く突き刺さっていた。

引き抜けば、銀の刃が光を受けて煌めく。刀身には『多々良』の銘が刻まれていた。

長い間ろくに手入れも施されていないようだが、未だその切れ味に陰りは無い。「ありがたかったです」

腕利きの刀匠の品と思われるが、恐らくは盗品だろう。だが道具に罪はない。

加えて、鍰のない匕首は仏を彫るのにも都合が良かった。

ここでふと、仏師は違和感を感じた。

——この帽子は、何だ。いつからあった？

最初からあったかもしれない。気にしたことも無かった。きっと刃が帽子に刺さらなかったのなら、今も気づいていなかっただろう。

心当たりは、一つある。

「無意識の妙。これが、か」

これがさとの妹なる者の能力。これほど接近されて、その痕跡にすら意識を向けることができないとは。

忍びの目と嗅覚ならば容易に捉えられる。そう考えていた。だが、現実にはこの体たらく。仏師は己を恥じた。

どうやら、知らずに驕っていたらしい。

「だが掴んだぞ」

「わあっ！」

すぐ足元、己の傍らの少女に手元の帽子をぽふりと被せてやる。

よもや気づかれるとは思っていなかったようで、少女は大きな声で驚いた。

それが気づきとなり、こいしの無意識が解かれ、始めからそうであったようにその姿が露わになる。

淡い緑の混じったセミロングに、黄色い衣服。その意匠は姉のさとのものとよく類似している。

「なんでわかったの!？」

「二度も出し抜かれる儂ではないわ」

存在の察知は困難だった。だが、帽子に残された温かみから、まだ周囲にいることはわかった。

注視しようとする和不自然に意識が霧散する場所があったのだ。常人にはまるで気づけないような無意識のうちの意志の誘導。そこに隠密のからくりがあると仏師は看破した。

故に、意識をできずともその居場所にあたりを付けることができたのだ。

「おお、こいし様だ。顔を見るのは久しぶりだね」

「あ、うん。私はそうでもないんだけどね」

ヤマメの声に、こいしはふにやりと笑ってみせた。その笑みには微かに哀愁があ

る。

気づかれなかったというだけで、きっと仏師がここに来る以前にも何度かこいしはこの縦穴に立ち寄っていたのだろう。

「ね、ね、それよりさ！　なんで私を見つけられたのか教えてよ！」

「目が良い。それだけよ」

こいしの興味はわかりやすく仏師へと向いていた。対照に、仏師は短く返答する。

「なんで目が良いの？」

「鍛えた」

「鍛えたって、なんで？　何に必要だったの？」

「儂の生きる道には、それが必要だったのよ」

「それってどんな生き方？」

「どうして？」

「何で？」

「理由は？」

こいしが追及し、仏師が端的に答える。

延々とそのような問答が何度も続いた。興味津々に目を輝かせるこいしを相手に、仏師はどうしようもなく押されていた。一方のヤマメはそれを生暖かい目で眺めている。

これがどこの誰とも知れないような馬の骨ならいざしらず、彼女はさとの妹だった。しかも、以前よりさとりから直々に妹を頼むと言い含められている。一体どうして邪険にできようか。

仏師も過去に一人童女を育ててやった経験もあったが、今思えばあれは聡い子だった。このように質問攻めにされた覚えはない。

そうして、何度も何度も問いに答えていくうち、不意にこいしの質問の毛色が変わった。

「ねえ、仏師さん。仏師さんなら、次も私を見つけられる？」

それは、期待を込めた問いだった。この質問はきつと特別な意味を持つ。

仏師を見上げて素朴に訪ねるその姿は、とても小さく見えた。

だが、仏師の答えは一つだ。ただ、問いに愚直に答える。

「是、と答えよう」

「試してみよっか」

先ほどの短刀を手を取ったこいしの姿が、霞のようにかき消える。こいしは再び能力を発動させた。

それを仏師は風のように落ち着き払った心持ちで観察する。

彼女は姿も音も、気配すらも隠していない。周囲の人間はもちろんそれを認識することが出来る。だが、意識することだけができない。目に映っていないがら、見つけることができないのだ。

かつて仏師の記した忍び技の技法書の中に、『忍びの目』という項がある。

戦いの中にあつて恐怖の心に囚われず、一つに絞らず、全を見渡す。

激しい剣戟の最中にあつてなお、剣先を注視せず、相手の一挙手一投足を視界に収める。

一では無く、全。立ち合いながらも、茂る草木の上を歩む虫にさえ気を払う。さすれば、見えぬものさえ見える。

「――すいこ」

目を丸くして、半ば呆けるように驚くこいしの姿が出現した。

仏師は側面からの頸椎を狙って突き出された一撃を、大きな二本指で挟んで防いでいた。

「儂は是と答えた」

得意気な顔ひとつせずに、仏師は憮然と語る。

二言はない。見つけられて当たり前。そんな仏師の様子を見て、こいしの顔は喜色に満たされた。

「お姉ちゃんに自慢してくる!!」

こいしはそれだけ言い残すと、脇目も振らず地霊殿の方角へ飛んで行ってしまった。

誰に知覚されることもない生活を想像したことがあるだろうか。もしも自分が透明人間になったら、自分の声が、姿が誰にも届かなくなったら。

自分の前に人がいるのに、存在しないものとして扱われる。自分の登場しない劇場で、自分がいないまま成り立つ物語をぼんやりと傍観するだけの立場。

こいしの世界はそれだった。望んで瞳を閉じたとして、そこはろくなものではない。だが瞳を開けば待っているのは姉のように誰も彼もに目の敵にされる日々。

どのみち居場所がないのは同じ。それなら、皆に指を指されて暮らすくらいなら、私は皆に見えなくていい。

こいしは枯れた諦観を抱きながら日々を過ごし続け、だが今日それを手放した。人に見向きもされない寂しい生活は、一匹の鬼によって終わりを告げたのだ。

その日、地霊殿でさとり妖怪の姉妹は久方ぶりの再会を果たす。

一方で、地上では天邪鬼の吹聴するほら話が幻想郷で小さな話題を呼び始めていた。

曰く、地獄に落とされたものの、奇跡的に一命をとりとめやがて仏に見守られながら蜘蛛の糸を辿って地上に出た。

木っ端妖怪が考えたにしては、よくできた笑い話だ。

安定の難産。

誤字報告に感謝

地獄鴉

プロットが一ミリも無いので常に話の終着点に怯えている作者です

毎週更新を追っていると週末が楽しみになるのでこの作品もそれになりたい

冷たい奈落の底で、今日も今日とてこつこつと、仏を削る音が静かに響く。

分厚く反りの無い短刀は仏師の手に収まり、よく馴染んでいた。

「それ、人を傷つける為の道具じゃないの？」

仏師の側の小ぶりな止まり木に止まった一羽の鴉が、さも当然のように人語で語りかける。

張りのある明朗とした声は本来の鴉の濁ったような鳴き声とは似ても似つかないが、しかしどこか知恵の足りなさそうな雰囲気も感じる。きっと本人の気質だろう。

頭部に結ばれた深緑の大きなリボンがよく目立つこの鴉もまた、お燐と同様にさ

とりのペットだった。

名を靈鳥路空。れいうじうつば お空の名で親しまれる彼女は死霊を苛む灼熱地獄の高熱を平然と

耐える地獄鴉である。

尋常の鴉との分かりやすい差異として、お空の瑞々しい濡れ羽色の翼の表面にはガーネットを溶かしたような昏い紅色が、流れるように艶めいている。

地獄の業火に照らされて彗星のように煌めく地獄鴉は、灼熱地獄の代名詞だった。前に仏師が地霊殿へ訪れた際には、さとり灼熱地獄の温度調節を任されている為か姿を現さなかったが、噂に興味を持った彼女が過去に一度自発的に仏師の元にやってきたことがあった。

以来、彼女は何を気に入ったのか度々訪れる常連となっている。

彼女の止まり木も、来るたび所在なさげにバサバサと飛び回る空を見かねて仏師が作ってやったものだ。

細い倒木を加工して作った止まり木は程よく軽いので、気に入ったお空が毎回くちばしで啜えて仏師の様子を眺めるのに都合のいい場所に運んでいた。

「ああ。こいつはよく切れる、よい道具じゃ。だからこそ、人を相手に使うには……

ちと勿体ない。仏を彫るのに使うくらいで、丁度いいのよ」

「んー。でも、仏さまを彫るための道具じゃないよ」

「道具も技術も、所詮は扱う者次第よ。今まさに儂が血に塗れた右腕で、人切り包丁を握って仏を彫っておるようにな」

「ふーん」

お空は納得がいったのかいつていないのか、気の抜けた返事を一言寄越すと黙りこくってしまった。

お空が口を開かないので、仏師も自然と仏を彫るのに没頭する。

お空が無邪気な問いを投げかけて、仏師がそれに答える。するとお空がじっと黙考して、仏師の岩を削る音だけが静かに響く。

これは、お空がここを訪れたときの決まった流れだった。

「……あれ、なんの話してたんだっけ」

「さてな」

されど、地獄鴉とて所詮は鳥頭。含蓄のある仏師の言葉を頭の中でかみ砕き、自分の価値観と照らし合わせて見識を深めようとはするものの、自らの智慧とする前

に綺麗さっぱり忘れ去ってしまう。

忘れるところまで含めての、いつもの流れだった。

仏師もそれがよくわかっていているから、適当にはぐらかしてしまうのだ。

「ねえ、もっと色々話してよ」

「話したってすぐに忘れちまうだろう」

「そんなことないよ」

お空はやや感情的になって反論する。

「思い出せないだけで、忘れたわけじゃないもん」

「そうかい」

一見すると詭弁のように感じるが、事実その通りだった。お空は来るたび記憶を失っているのかというくらいの様子を毎回見せているのだが、それでも不思議と一度話した内容については前に聞いたことがあると明瞭に答える。

記憶を箱にいれた宝物に例えたならば、きっとお空は箱の開け方が分からないだけなのだろう。

開かない箱の中にある宝物は、果たして存在しないのと同じだろうか。答えは千

差万別だろう。

「例え私が忘れても、相手は覚えてるから」

しかし、開かずとも人から授かり大切に仕舞いこんだそれは確かに彼女の宝だ。自力で開くことが叶わなくとも、宝物はそこにある。ならば、開け方を知っている者に開けてもらえばいい。

それがお空の答えだった。

おあつらえ向きに、地霊殿にはそれを完璧にこなす人物がいる。

それこそ、彼女の主人である古明地さとりのことだ。

「道理じゃな。お前さんらがさとりを慕うのもよう分かる」

心を読まれるのを厭う者がほとんどを占める中で、反対にそれを求める者もいる。記憶とは、まさに謳歌した生の足跡である。だが、誰しもが自在にそれを振り返ることができるわけではない。

なんの歯車が噛み合ったか妖怪に成って半端な知恵を付けてしまったばかりに、思い悩まされる動物たちがいる。

自分はどこから来て、どこへ行くのか。誰の生を糧にして、今日ここにいいのか。

何も知らぬ一介の獣畜生であれば、そんなことは考えずに済んだかもしれない。だが、長く生きれば少しずつ記憶は欠けていく。

忘れたことさえ忘れてしまえば、一体何が己を己たらしめるのか。

自分がいつから自分なのかさえわからないのに、徐々に自分を失う恐怖に包まれている。

そういった者たちにとってさとりは一種の救済だった。

尤も、それに当てはめるにはお空は樂觀が過ぎるかもしれないが。

「それに、本当に大切なことは覚えてるし」

「ほう。例えば」

お空の強気な発言に、仏師が試すような問いを寄越す。

「えーっと、さとり様のこととか親友のお隣のこととか、お仕事の事とか。ここに来れば仏師さんに会えるのも忘れてないよ」

お空は僅かに思案を挟んだものの、その後はすらすらと答えた。

不定期ではあるものの、お空はしばしばこの縦穴に立ち寄っている。覚えているというのも本当なのだろう。

だが、それが仏師には解せなかった。

「儂に会う事なんぞよりも、もっと覚えるべきことがあるだろう」

「そうかなあ」

お空が、まるでそれ以外に重要なことなどないと言わんばかりに小さなその頭を傾げる。

しかし、お空は唐突に思い出したと快活に声を上げて仏師の方に向き直った。

「神様とお話したんだった」

「ほう、神と」

お空らしい脈絡のない話の飛び方だったが、興味のもそられる話題だった。

仏を彫る手は止めずに、お空の話に耳を傾ける。

神との対話など平時なら一笑に付すところだが、ここは幻想郷である。即座にたちの悪い妄想だと斬り捨てる訳にもいかなかった。

それに、神仏の加護としか思えないような奇跡的な経験も数えるほどだが記憶にある。

「色々と教えてもらったんだ」

「神からの啓蒙。興味深い。何を教わった」

それが神を騙る何者かなのか、本当に神なのか。騙されやすいお空のことだからきっと相手は前者だろうが、それはそれで話は聞きたい。仏師はお空が極端に道を外しそうな内容であれば、それとなく押し戻してやるかきとりに声を掛けるつもりだった。

「まず分裂連鎖反応による格子欠陥構造上の原子配列の乱れに由来する脆化とそのフラクタルについてなんだけど」

「待て」

「うにゅ？」

さしもの仏師も流石に仏を彫る手を止めた。

想定していた話の流れのおおよそ斜め上に行くお空の発言をそのままにする訳にはいかなかったのだ。

神からの薫陶を受けたと言えど、まさかお空の口からこれほど難解で専門的な単語が流暢に飛び出すとは誰も思うまい。

肝心のお空は何がおかしかったのかまるで理解しておらずきよんとした表情を

している。

「何があった」

「うんとね、足をもらったの。三本の足を」

話がまるで読めない。だが、お空自身は全てを確かに理解しているようだった。先ほどの専門用語の羅列も、表面だけの暗記ではなく意味と意図を理解した暗唱に思える。

追及してもきつと埒は開かないだろうが、聞かないわけにもいかなかった。

「三本の足とは、なんだ」

「えーっと……じゃあ、着替えるからあっち向いてて」

「心得た」

とつくに己の理解の及ぶ次元に話の終着点はないのだろうと仏師は察していた。そして、お空が事態の異常性をまるで把握していないことも。

これは明らかに異様なことだ。軽い与太話と思って聞いた神との邂逅は、嫌らしいまでに真実味を帯び始めていた。

「ん。もういいよ」

「……見違えたな」

振り返って見た空の姿は、既に鴉の形をしていなかった。

両の足で大地を踏みしめる姿は、人間の少女と何ら遜色がない。だが、異様だった。

右腕は半ばから橙の多角柱に変わり、右足は溶けた鉛の様な鉄塊が纏わりついている。左足にも見慣れない青色の光子が円周している。

胸元に大きく埋めこまれているのは、巨大な瞳のような緋色のブローチ。

彼女を包み込むように広がる、銀河を映した外套。

もはや彼女に靈鳥路空としての名残を感じられるのは、かつてと同じように漆黒の中に深紅を覗かせる長髪と背中の大きな翼のみだった。

「ほんとはずっとこの格好じゃないといけないらしいんだけど。仏師さんに見せるのは恥ずかしかったんだ」

「そうか」

無骨な柱と化した右腕を優しく撫でながら、お空が言う。

三本の足とは、右腕と右足と左足のことを指すのだろう。その三つからは明らか

に強い力を感じる。儀式的な意味以上に、明確な機能がある。そういった造形だ。
「神様に教えてもらったんだ。私は八咫鳥なんだって」

「……」

八咫鳥。火の神、太陽の化身。

無論、お空はそんな上等な存在ではない。彼女は一介の地獄鴉だったはずだ。

だが、今の彼女は明らかにそれを逸脱している。騙されたか思いこまされたか、彼女は自分を八咫鳥と思い込み、だが真実八咫鳥へと変貌していた。

仏師はこれに酷似した一つの術法に心当たりがあった。

「御霊降ろし。いや、もはや御神降ろしか。これほどまでに完全なものは、初めて見る」

御霊降ろしは、金剛山の仙峰寺に起こり広まった術である。

構えを取り、御霊を自らに降ろすことでその加護に授かるというものだ。

御霊降ろしに構えをとるように、彼女の仮装じみた服装も、降ろすべきものを模しているのだろう。

きつとそれは、星海に浮かぶ太陽だ。

だが、御霊降ろしでさえも、人の身には余る術。使用時には術者に絶大な負荷が掛かるため、飴を噛みしめてそれに堪えるというのが通常である。

己の自我に執着せず、己の身を御霊に委ねることは決して容易ではない。

御霊降ろしとはそれほどに困難なものである。例え妖怪であってもそれは同じはずだ。

だが、彼女は神霊と呼べるそれを降ろしてあっけらかんとしている。

これは、彼女自身の才覚に依るものだろう。

「これは力。原初の炎。太陽の核熱」

お空が指先を天に向けると、そこから黒い太陽が生まれる。

かつて怨嗟の炎に巻かれた仏師だから分かる。これは、強すぎる。

火でも炎でもなく、日。

恐らく、自分でもまだ加減が分かっていない。びりびりと肌を焼く熱の強さは、きつと相手が仏師でなければ既に焼き焦がしてしまっただろう。

頭上に張り巡らされたヤマメの糸などは、低い位置にあるものはほとんどが熱で溶解していた。

「本当は仏師さんにこの話をするつもりでここ来たんだ。まあ、忘れちゃってただけど。私は、この力で地上も灼熱地獄にする。地上に進出するんだ」

「お空、お前さん……」

力に吞まれたか。そう続けようとして、止めた。彼女は頭が弱い。恐らく、力を手に入れて調子に乗っているに過ぎないのだろう。だが、それ故に短絡的で、危なっかしい。

仏師はお空に静かに語りかけた。

「お空、儂の話を覚えてるか」

「……なんだっけ？」

「道具は扱う者次第という話よ」

「あ、うん。思い出した」

仏師が言葉を紡ぎ出すと、空は黒い太陽を消して正座し、話を聴く体勢に映った。お空のこの素直さは美徳である。

「道具の中でも、一等級扱いに気を付けなきゃならねえものがある。それが火よ」

「うん」

「火は、畏れなくちゃならん」

「うん」

「理由は、わかるか」

「わかんない」

清々しいまでの即答だった。熱に鈍い体質故に仕方のないことかもしれないが、彼女は火に対して畏怖というものが無かった。

「誰しも、火には魅入られる。手にすれば、自分を見失う。今のお前さんがそうだ」
「そうなの？」

お空はきょとんと首を傾げた。

「お空よ。お前さんは、その力で何を為す」

「地上への進出！ 大地を焼き払う！ 失われた灼熱地獄の復活！」

「何の為に？」

「――」

一度目の質問に自信満々に声を張り上げたお空は、二度目の質問に閉口してしまった。

「目的と手段が逆転しておるのよ。力を振るう為の名分に、目的をでっち上げていく。そして、それにさえ気づいておらんのだ」

「……あれー？」

「一度、頭を冷やすと良い。儂の警句、ゆめゆめ忘れぬことじゃな」

「はあい」

一通り話を聞き終えたお空は、そのまま地霊殿の方へと姿を消した。

「……地霊殿に着くまでに忘れないといいが」

程なくして、地上の博麗神社の側で間欠泉が噴き出す。

それは、地霊異変の萌芽だった

チェルノブイリ原発事故の象の足には何故だかとてもなくおぞましい何かを感じてますよね。ただの金属の塊のはずなのに。

興味があれば `elephant foot Chernobyl` で検索してみてください

だ
さ
い

神さま仏さま

異変前にもう一話だけ挟むんじゃ

お空が地霊殿に戻ってから数日。近ごろ、灼熱地獄の火力が不安定だ。

突然狂ったように急激に温度を跳ね上げたと思えば、思い出したかのように元の状態へと落ち着く。

不定期に吹き上げる熱風は地上に地熱をもたらし、繰り返すうちに温められた水脈はとうとう地上に間欠泉を生むに至った。

お空の暴走がさとの怒りを買うのではと危惧したお燐は、他でもない親友のお空の為、間欠泉の水流に救援を求める狼煙を乗せた。

それは、地底に封じられた怨霊だった。

怨霊が地上に蔓延れば、聡い者はそれを危惧して調査に乗り出すだろう。お隣の狙いはそこにある。

増長したお空がさとりに罰せられる前に、地上の有力者へと助けを求めたのだ。やがて怨霊の溢れだすこの事態を異変と見なした巫女が、重い腰を上げて解決に乗り出すだろう。

しかし今日は、それよりも少し早くこの地底の入り口に一人の客人が訪れていた。「見事だね。敬虔な信者の姿には、やはり心に響くものがある」

その声は、仏師が断崖を削り出して彫っていた仏から聴こえた。

鈴のように鳴る柔らかい少女の声は、厳めしい仏が出すには似合わない。

「何者じゃ」

神秘的な現象に怯まず、仏師が素性を問いたです。

まさか、本当に仏に心が宿って語りかけてきたわけでもあるまい。

仏師の声に応えるようにするりと壁面をすり抜けて姿を現したのは、稲穂のような金色の髪を揺らす少女だった。

「……お前さん、人間じゃあねえな」

「あなたは神を信じますか？」

目玉のついた広く背の高い帽子を被った少女は、開口一番に無邪気な笑みで言った。

滑らかに紡がれる宣教師のような口上を一蹴するのは容易いが、仏師はそうしなかった。壁から現れる非常識さもそうだが、彼女から得体の知れぬ不気味な気配を感じたからだ。

「触らぬ神に祟りなし、という言葉がある」

「自分から寄ってくる祟り神とかいるかもよ？」

無邪気な笑みが意地悪な笑みにすり替わったのを確認した仏師は、そこで己がまた厄介な手合いに絡まれたことを自覚した。

「私は洩矢諏訪子。上で土着神の頂点とかやってる者さ」

「空の言う神とは、お前さんのことだったか」

「もう一柱いるけどね。言わせてもらえば、あの地獄鴉に何か吹き込んだのもお前だろう」

吹き込んだ……というよりはほとんど説教のようなものだったが。

お空は素直で聡いが、それ以上に愚かだ。ただの地獄鴉でも危なかつしいのに、太陽の力など手にすればどうなるか見当もつかない。

まだ彼女は、自分の持つ力の恐ろしささえ理解していない。起きる異変とその結末は、彼女にそれを知らしめるだろう。

そもそも持ちうる力の恐ろしさなど、人に言われて理解できるものでもない。他でもない本人が力を振るうことでしか、真の理解には至らないのだ。

だから仏師は、彼女には使い方を誤るなどだけ言い含めた。

「身に余る大力を手に入ればすぐに増長すると思ったんだけど、これがどうして、中々に弁えている」

「生憎、言いつけた警句もすぐに忘れちゃったようじゃがな」

「お陰さまでちょっと予定が狂ったけどね。でも面白いものが見れた」

目の前の少女は辺りの仏像をぐるりと見回したあと、最後に仏師と視線を合わせた。

諏訪子は楽し気な表情をしているが、一方の仏師は対照的に苦虫を噛みつぶしたような渋い顔をしていた。

仏師にはこれからろくでもない事が始まるという確信めいた予感があつた。それゆえにこの表情である。

「神が地の底に何の用がある」

「幻想郷の裏側には仏がいるという噂話を聞き付けたのさ。とんだ眉唾だけど、競合他社としては見過ごせないよね」

誰もが一度きりの話の種として終わらせた正邪の与太話も、信仰が存在意義に関わる神にとっては到底聞き流せる話ではなかった。

信仰の形は無数にあれど、仏とされる存在が幻想郷にいれば民衆の信仰心を根こそぎ持っていかれる恐れがあつた。

まして諏訪子ら山の神は幻想郷に越してきたばかりのごく弱い勢力。神自ら敵情視察に向かうフットワークの軽さも、彼女らの置かれた境遇を鑑みれば必然だった。

「もつとも、居たのは仏じゃなくて鬼だったけどね」

「そうか。満足したら上に戻りな。蜘蛛の糸も必要あるまい」

「こらこら、神を邪険にしないの。どう、仏を信じるついでに神とか信じてみない？」

気さくに語り掛ける諏訪子だが、冗談らしい雰囲気でもない。だからこそ、厄介だった。

「自分で自分を宣教する神がいるか。お前さんにや悪いが、僕は神も仏も間に合つとる」

「えー、いいじゃん神を信じるくらい。減るもんじゃないんだしさ」

諏訪子が小さな口を尖らせてなおも言い及ぶ。軽薄な物言いだが、それでいて中々に諦めが悪い。とつと諦めて地上に戻ってくればいいものを、諏訪子は完全に居座って、仏師が首を縦に振るまで宗教勧誘を続行する気だった。

「信ずる者が鬼じゃあ、神としても恰好がつかんじやろうて」

「むしろ誉れじゃない？ 鬼さえ信仰する神なんて。よし決めた。お前私を信じろ」まさか、神の方から直々に私を信仰しろなどと要求される日が来るとは思うまい。しかも神の肩書に恥じぬ傲岸不遜っぷりを遺憾なく発しているのだからたまらない。

諏訪子は仏師に屈託の無い微笑みを向けて、かわいらしく告げた。

「——さもないと崇っちゃうぞ？」

瘴気が満ちる。

小さく佇む童女を中心に大気がギリギリと軋み、たちまち辺りの空気がどろりと淀む。重苦しい空気が粘っこく喉に絡みつき、呼吸もままならなくなる。

まるで己の内を巡る血液が全て水銀に変わったような、おぞましい寒気。全ての生物が怖気づき、逃げ惑うような恐怖の感覚。

これが、崇り神の放つ瘴気。

これが神のやることか。仏師はそう口から出掛けた言葉を飲み込む。

恐ろしい崇り神は、得てしてその崇りの矛先を向けないことを報酬に信仰を集めるものだ。

民衆は崇り神を丁寧に祀って奉り、崇りから逃れる。崇り神は民衆に護りの恩恵を授けることで信仰に報いる。

だがそれは、民衆が神の機嫌を損ねないことが大前提にあるひどく理不尽で不条理な仕組みだ。

信ずる者には利益を、そうでないものには崇りを。どの道ろくでもないから、そもそも関わるべきではないのだ。

しかし今回はわざわざ向こうから寄ってきた拳句有無を言わさず崇りをプレゼントしてくるという、タチの悪すぎる崇り神が相手だった。

あこぎな商売を繰り返す河童でさえ思わず閉口するほどの悪徳商法である。

最低最悪な神に目を付けられるという空前絶後の不運を前に、仏師は過去さとり
に言われた言葉を思い出した。

※厄介な連中の興味を惹くから、地上に出るのは勧めない。※

それはおおよそこんな内容だったが、確かにこんな連中に目を付けられてしまう
なら、地上などまっぴら御免だ。

この頭の先まで沼に浸かったような倦怠感にひとつため息を吐いて、仏師は目の
前の邪悪な神に声を掛けた。

「像の一つでも彫ってやるから、このけったいな瘴気を止めてくれんか。古傷が痒
くて敵わんわい」

「いよっしゃ信者ゲットォ！言質取ったからね！」

諏訪子の快心と同時に、満ちていた瘴気が一瞬で霧散する。

嬉しそうに飛び跳ねる現金な崇り神を見て、仏師はもう一度深くため息を吐いた。

「それで、儂はどんなのを彫ればいい」

「ぶっちゃけ私たち神に偶像崇拜は必要ないんだよね。だから分社を一つここに建ててくれればそれでいいかな。意匠も好きにしてい。お前の思う私をあしらった像を祀ってもいいし祀らなくてもいい」

「随分といい加減じゃな」

「神様ってわりとそんなもんだよ」

石や草木など、何にでも神は宿る。決まった形などはないのだ。

一応、目の前の鬼の彫刻士としての実力は辺りに並ぶ大きな仏像群が身を以って保証してくれている。諏訪子も仏師が自分の似姿を彫るというのであれば、それはそれで客かではなかった。

仏師も仏を彫り続けるうちに、ものを削って何かを象る技術は養ってある。仏以外も彫ることは出来るのだ。過去にはねだる小娘を相手に独楽などの玩具を作ったこともあった。

「……お前さん、白蛇に縁はあるか」

「無いことも無いかな。私が統括する土着神にそういうのもいる」

諏訪子が手を翳すと、黒い瘴氣と共に赤い瞳の白蛇が大地を割いて姿を現した。白い靄で構成された白蛇は実体を持っておらず、これは諏訪子の呼びだした神靈のようなものなのだろう。

だがその白蛇の姿に、仏師はよくよく見覚えがあった。

「これも因果かの」

かつての修行の地、落ち谷には山をも絞め殺さんとする威容の白き大蛇が潜んでいた。

落ち谷衆の信仰を集める白蛇はまさしく土地神と呼ぶに相応しく、仏師もその恐ろしさをまざまざと味わったこともある。

けれども、目の前の白蛇には人一人を丸呑みできる程度の大きさしかない。

仏師も薄々と感づいているが、この幻想郷と葦名は別の世界ではない。

違うのは時間軸だ。葦名と同じ日本という国のどこかにこの幻想郷は在る。ただ、ここは戦国の世にあった葦名の時代よりもずっと先の時代。

葦名に住まう白蛇の肉体は当の昔に朽ち、信仰さえも失って久しい。彼らのような力ない辺境の土着神たちは洩矢諏訪子という寄る辺に身を寄せ合う事で、か細い

ながらも生き永らえていたのだ。

今や同じく土着神であるミシャグジと融合を果たし、崇りを振りまく白い大蛇として姿を変えている。

神の形は、信ずるもの次第で如何様にも移り変わる。

こうした複数の神の同一視による融合もまた、神々にはよくあることだった。神秘の失われた現代で生きる神達の、健気な生存戦略である。

今にも忘れ去られんとする、哀れな神の姿。

それは、かつての神格を知る仏師に痛ましく映った。

同じく葦名からこの幻想郷に至った者のよしみだ、ひとかけらの同情心をもってやるくらい、罰は当たらないだろう。

「儂はここで神の像を彫ろう。出来上がったら、どこへなりとも持ち出すといい」「おっけい。分社はできるだけ早く建ててね、それを伝えて飛んでくるから」

「……あいわかった」

それはつまり、分社を建ててしまうとこの崇り神がまたここに唐突に現れるということだろうか。

仏師としては一度ここで形に残る信仰を作り出してしまえばあとはもうこの凶悪な神とは無縁でいられると考えていたのだが、当てが外れてしまった。

むしろ、分社を建ててしまうことで一層顔を合わせる機会が増える可能性の方が高い。

「これは、ちとしくじったか」

「おっと、今更約束を反故にするのは無しだからね。さっきやったやつ、結構無理したんだから」

「神を前に二言はない。崇りが怖いからな」

「ならばよろしい」

諏訪子が大仰に頷く。土着神の力は、縁故のある地から離れれば離れるほど力が弱まる。

信者のいない幻想郷など、諏訪子が力を振るうには最悪の環境だった。

だが、だからこそその強引な宗教勧誘である。

半ば博打だが、保険はあった。

彼女には、揺るぎない敬虔な信者が一人だけいる。彼女さえいるならば、神秘の

色濃く残る幻想郷で存在できなくなることはないだろう。

とはいえ、もちろん信者は多ければ多いほどいい。

仏を彫るいかにも徳の高そうな信者なら尚更だ。

「そうそう、近々異変解決に巫女が動くと思うんだけど」

「巫女？」

「異変が起きたら、おっかない巫女が元凶をしばきに来るのさ」

「ふむ」

神と妖が入り混じる混沌としたこの幻想郷だ、確かに調停者が必要なのもわかる。今回のお空の件に関しては、仏師もこれ以上首を突っ込む気はない。この縦穴にいれば顔を合わせてしまうだろうから、どこか別の場所に姿を隠すべきだろう。

そう考えていたところ、諏訪子が言った。

「巫女は私たちの商売敵だから、私の像とか彫ってたら恨まれるかも」

「何？」

「じゃあよろしく！」

最後にそれだけ言い残し、諏訪子は湖に沈むように地に身体を落として消えた。

もう影も形もない。まさに神出鬼没である。

「……もはや疫病神じゃな」

小さく呟いた仏師の言葉を聞いてくれるのは、彼の彫った仏像だけだった。

ケロちゃんに宗教勧誘されたいだけの人生だった

異変のあと

これはクリスマスプレゼントのようなもの

「この地底もすっかり賑やかになってしまいました」

迷惑そうにぼやくのは、地霊殿にいるはずのさとりのものだった。

ひっきりなしに続く来客に嫌気が差したか、居城を離れわざわざ仏師のいる縦穴まで避難していた。

異変解決に訪れた巫女たちの騒動から、もう何日も経った日の事である。

この地底世界は、異変をきっかけに大きな変化を迎えた。今回の異変の解決を皮切りに、結ばれた約定の大幅な緩和が認められたのだ。

まず手始めに山の神主導のもと、地底と地上を繋ぐ昇降機が河童の革新的な技術力と鬼の埒外の建設力を惜しみなく振るって施工された。妖怪の山のふもとで饒舌

に蒸気を吹き上げる様子は実にハイカラで、大地の上下を問わず大衆の興味を大いに惹き、地霊異変に関心が無かった者たちをも集めた。

今や地底は幻想郷の観光名所の様な扱いである。決まった面子で同じ温度の喧騒が繰り返されていた地底は、新しい風によって大いに盛り上がっている。

幸いにもこの縦穴は旧地獄街道を抜けた更に奥に位置するので、灼熱地獄跡に直結する昇降機からは距離がある。そのため、この場所はまだほとんど衆目に触れていない。

よって縦穴だけは今まで通り、いや以前にも増して閑散としていた。

「岩の裏側で静かに暮らすダンゴムシを強引に太陽の下に晒すが如き所業ですよこれ」

「お前さんの監督不届きが招いた事態じゃろう」

聞けば事の発端となったお空の八咫鳥の力は、異変の佳境まで誰も知らなかったという。お燐の暗躍など事情はあったにせよ、どうしても責任はさとの元に帰結する。

悲しきかな、主というものはいつだって世知辛いものだ。

「小言はやめてくださいよ、気が滅入ります」

さとりが第三の目ともども明後日の方向を遠く見つめる。

どうやら仏師に言われるまでもなくそれを実感しているらしい。

あるいは、既に他の誰かに追及されたか。どちらにせよ、このようにしなびたさ
とりの姿は仏師には新鮮に映った。

仏師のさとの印象といえ、口元に嫌らしい笑みを湛えたまま滔々とこちらの
思考を読み上げる楽し気なものだ。

けれど、今のさとりにその面影はない。連日訪れる来客がよほど堪えたに見える。
第三の目も今は仏師から視線を外し、読心は行われていないようだ。

「容赦のない巫女でした」

「妖どもの抑止には、あれくらいでなければ務まらんのじゃろう」

あの紅白装束の巫女は、ひどく横暴で好戦的だった。まさしく問答無用といった
具合で襲い掛かってきたのは仏師の記憶に新しい。

最終的には声だけの存在が仲裁することによって場は収まったものの、あれはい
よいよ退治も辞さないという強固な姿勢だった。

さて、その声だけの存在はそのとき『伊吹萃香』と名乗った。同時に、かつての山の四天王だとも。

恐らくは、勇儀の旧友。

結局その場合は巫女が先を急いでいたので、その声との話はそこで終わってしまったが、きっと彼女とはまた別の縁があるだろう。というか、多分向こうから押しかけてくる。

彼女のことは、またその時に考えればいいだろう。

どうやら一端の鬼であるらしいので、きっとそのときは上質の茶も一緒だ。

「後ろのそれは？」

「ああ、ほんの流れ弾でな」

さとりが興味を持ったのは、未完成のままの山の神の像だった。その首は破砕され見る影もない。完成を迎える前に戦闘の余波で破壊されてしまったのだ。

大岩を削り出して彫られた緻密な像は、首無しで姿で放置されていた。

今となっては像の従える大蛇が面影を残すのみである。貌の無い偶像では、信仰の対象足りえないだろう。

一応、大きな陰陽玉が直撃した際にはさしもの巫女もやらかしたという風の表情を浮かべていたので故意ではないようだが、それでもまるで氣負った風はなかった。相応に図太い神経をしているらしい。

いかにも失われた神といった有り様の像だが、奇妙なことにこれはこれで分社としての機能は維持できている。

「だとしても手荒すぎると思うんですけど」

「容赦が無いから巫女が務まるんだろうよ。お前さんも一端の妖怪なら、甘んじて受けることじゃな」

「悟り妖怪はひ弱なので今度からは例外ってことになりませんかね」

「そういうのは天邪鬼なんぞに譲ってやれ」

「流石に天邪鬼には負けてられませんか……」

さとりも天邪鬼と比べられるのは心外だったか、ひと際深いため息を吐いた。一応、妖怪として誇りのようなものはあるらしい。妖怪の価値観からしても、天邪鬼とはそういう扱いということだった。

「そういえば、こいしがお世話になったそうですね」

「そんなこともあったな」

古明地こいし。物憂げな顔をして現れ、しかし最後には爛漫な表情で去った少女だ。あれ以来姿を見せていないがああ的好奇心の強い気質だ、嬉々として地上に赴いたのだろう。

「いよいよ地上が解放されたことで、以前にも増して放浪するようになってしまいました。姉としては心配で心配で」

「あやつはあれで、地上でも上手くやるだろう」

「根拠を要求します」

「信じてやれぬか」

「それとこれとは話が別なので」

なおも言い募るさとりを見て、仏師は静かに笑みを浮かべる。どうにも掴みどころのない人物だとばかり思っていたが、少なくとも一人の姉ではあるらしい。加えて、清々しいまでの妹煩惱だ。

「まあ、あの子は私と違って世渡り上手だとは思いますが」

「お前さん、自分の性格に難があることは自覚があったのか」

「前言撤回します」

そしてこの意地っ張りである。

「姉としての威厳が泣くぞ」

「むむむ」

「何がむむむだ」

さとりはどうも、心を読まなければそれほど弁舌の立つ方ではないらしい。

とはいえ常に相手の思考が筒抜けのまま言葉を交わすのが当たり前ともなれば、さとりでなくても遠からずそうなるのが自然だろう。

「今日のお前さんは瞳が足りんで気楽で助かる」

「私はやりづらくて仕方がありませんけどね。でももうしばらく第三の目は休ませたいんです」

「どういう風の吹き回しじゃ」

「いや、ドライアイ気味で」

見ればさとの第三の目は充血し、おおきな涙の粒を浮かべていた。わんさと訪

れる客の対応のため、短い期間に立て続けに読心を繰り返したのだろう。この様子では、相当酷使されたようだ。

「一つ目が多いというのも、考え物じゃな」

「まあ、多くの生物は進化の過程で二つで十分と考えたようですから。私は違ひますけどね」

「なまじ目が良いと、見たくねえものまで見えちまうだろう」

「ですが、だからといって閉じるというのも、容易い選択肢ではありませんよ」
さとりが第三の目を優しく撫でる。

「肝心の瞳も、一番知りたい妹の心だけは映してくれないのだから、ままならないものです」

「お前さんにももう二つ、瞳があるだろう、それを使えばいい」

「そうだ。結局あなたはどうかやってこいしを見つけたんですか？ 心が読めなくても読めるくらい嬉しそうに自慢されたんですけど」

「目がいいだけよ。お前さんよりもずっとな」

「いや、全然納得できませんが」

しかし、きつと疲弊した第三の目に鞭を打って仏師の心を読んだとしても、見える答えは同じだろう。この男の言葉に下らない虚飾や虚栄はない。さとりも、そんなことは重々承知していた。だからこそ、釈然としないのだが。

「……今度地上に出て眼鏡でも買ってみましょう」

とりあえず視力を上げてみよう。そう決めたさとりだった。

「ところで、お空が今何をしているか知っていますか？」

「いや、知らん」

「気になりますか」

「ああ」

異変の解決を皮切りに、お空がここを訪れることはなくなった。あの血の気の多い紅白に成敗されたのかと初めは思ったが、そういうわけでもないらしい。

何にせよ、慣れ親しんだ顔が失せればそれなりのむなしさもある。

ぽつんと残された、役目の無い止まり木などを見れば尚更にそう思う。

「なにやら地上の神のところで八咫鳥の力を用いて、エネルギーを作るとかなんと

か。今の地底ではお空の力を持て余してしましますから、渡りに船といえましょう」

異変の後、お空は灼熱地獄を生み出す野望をすっぱりと諦め、人が変わったように山の神に請われ従順に彼女らの考えるエネルギー黎明に協力していた。お空なりに身の程を弁えたか、それとも巫女がよほど恐ろしかったか。ともあれ、以前のような降って湧いた力に増長した傲慢な態度は鳴りを潜めていた。

太陽の力を利用した大胆不敵な攻勢を予感していた山の神らにとっては些か拍子抜けだっただろうが、そう悪い話でもあるまい。

彼女はきつと、今も平和に妖怪の山の間欠泉地下センターで炉心の温度管理に精を出している事だろう。

「地上を灼くのには懲りたか」

「ああ、それについてはお空が面白いことを言っていましたよ」

「聞かせてくれ」

その様子を思い浮かべたか、さとりがおかしそうに笑う

『『万物を焼き尽くす灼熱は、お湯を沸かすのに使うくらいで丁度いい』ですって。

いつからそんな殊勝なことを言うようになったのかしら」

「ほう」

思わず、仏師から小さな笑みがこぼれた。

仏を彫る傍らで手慰みに話してやった与太話だが、どうやらお空の中で彼女なりの考えのもと根づいているらしい。曲解されているような気がしなくてもないが、彼女の場合は覚えていてだけで御の字だろう。

地底の隅に籠って仏を彫るだけの己も、随分と過ちの多い生を送ってきた。そんな身でも、己の話が誰かの教訓の一つにでもなれば、これほど幸いなことはない。今回、お空は大きな力を振るった異変の首謀者となった。どんな沙汰が下されるか一端の心配もあったが、お空はお空でどうやら上手くやっている。仏師は、それがわかっただけで十分だった。

「しかし、大層な仏を彫りましたね。他人の記憶を通して見るより実物の方が迫力があるように思えます」

かつてはのっぺりとした絶壁の広がるばかりだった縦穴も、今や上から下まで大小さまざまな仏が並び連なっている。古今東西、宗派を問わずに様々な様式でもっ

て作り上げられた仏像が立ち並ぶその光景はまさに絶景と呼ぶに相応しい。

「これほど壮観な光景は、幻想郷でもそう多くはないでしょう。何かきっかけでもあれば人が集まるのでは？」

さとりがそう言い終えるのが先か、縦穴に突風が巻き起こった。

それは馴染みのある縦に吹き抜けるものではなく、横合いからぶつけるような神風だった。

「——あやややや！これは隠れた名スポットを発見！」

疾風と共に現れた黒い翼の妖怪は、手ごろな場所にあった止まり木の上に着地した。

止まり木の新たな主は、どうやら次も鴉であるらしい。

身を包む山伏の装束は、天狗の象徴だ。

「素晴らしい！鬼に怯えず地底に飛び込んだ甲斐がありました！明日の新聞の見出しは『地獄に仏』で決まりですね！」

当然のように地霊異変が飛ばされているのも、作者が気まぐれでしか更新しないのも、ぜんぶぜんぶ嫦娥ってやつが悪いんだ……！

天狗

あけおめ更新

「ふむ」

現れた黒髪の女は止まり木の上で器用に片足を膝に乗せた姿勢で肘をつき、縦穴を望んでいた。

仏像の完成度をじろじろと確かめると、今度は首からさげる大きな写真機を手に取り仏像を見上げる構図で写真を撮影し始めた。

先の口調といい、この妖怪は諜報を目的に行動しているのだと予想できる。今も手元の手帳に目まぐるしく何か書き残しているのが良い証拠だ。

「おおっとお？そこにおわすのは地霊殿の主ではありませんか」

妖怪は目の前の光景に満足がいったようで、くるりと振り返ってわざとらしい声

を上げた。さとりを捉えた深紅の瞳は、好奇心によって輝いている。

「違います」

「嘘おっしゃい」

露骨な面倒事の気配を察知して臆面もなく言い放ったさとりの嘘は、残念ながら即座に看破された。

「地霊殿の主が悟り妖怪であるという調べはついています。あなたが古明地さとりで間違ひありませんね。これみよがしに第三の目を構えておきながら、何をおっしゃいますやらですよ」

「めんどくさ」

「まあまあ、そう邪険になさらずに」

額に手をやって重苦しいため息を吐くさとりの前に、黒い少女がにこにことした表情で飛び降りる。二人の機嫌の温度差は歴然だった。

「知り合いか」

「まさか。こういう手合いが面倒でここに来たんです」

仏師の問いに、さとりは人一人呪えそうな声色で答える。

ろくに会話も交わしていないというのに、さとりは既に心底辟易とした表情をしていた。どうやら相当うんざりしているらしい。

休ませていた第三の目も、今は前の妖怪を確かに射抜いている。

「お初にお目にかかります、鴉天狗の射命丸文と申します。どうぞよしなに」

「嫌です」

「どうぞ、よしなに！」

全身全霊で拒絶するさとりには負けじと、射命丸も笑顔の押し売りを続行する。敬つた言葉使いではあるものの、射命丸は引き下がるつもりなど毛頭ないようだ。

「天狗は思考のスピードが速くて疲れるんです。それで、新聞を書くための取材？協力したくありません、帰ってください」

「それは無理な相談ですね」

天狗の思考回路は人間とは大きく異なり、またその思考速度も人間より数倍早い。そういえば、さとの十八番の思考を先読みした会話とも呼べぬ会話の調子が出ていない。第三の目の疲労もあるだろうが、種族的な相性の悪さがあるのだろう。それから、新聞を書くための取材とっていたか。やはりこの妖怪は諜報、ひい

てその広報を目的としているらしい。

この地底に訪れたのも、新たに解放された地底世界の様子を世間に喧伝するのが目的ということだ。

さとりへの挨拶を済ませたと判断した射命丸は、次に仏師の方へと視線を向ける。しかし、浮かべる笑みは凍り付き、その口元は引きつっていた。

「それから、えっと。その、隣のーお方あ……なん、ですけども。あのう、スウーッ……鬼、ですよね……？」

「他の何に見える」

「ですよね、ですよね！ この射命丸、これほど大仰な鬼はお目にかかったことがないもので！ いやあお見それしちゃうなあははは！」

射命丸が萎縮して不自然な息継ぎを挟みつつ、揉み手擦り手をしながら乾いた笑い声を上げる。その頬には、一筋の冷や汗が流れていた。

妖怪の山に住まう天狗は、高度な文明社会を有し、明確な縦社会の集団を組織する妖怪である。

上司は絶対。逆らうことは許されぬ。それが全ての天狗の胸に刻まれた鉄の掟

だ。

千年を超えて生きる射命丸は、鬼の支配があつた古き時代を知る数少ない妖怪である。

かつて妖怪の山は、鬼の支配下にあつた。鬼を頂点として、その下に無数の妖怪が属していたのだ。

やがて鬼たちが地上を捨てたとき、妖怪の山の支配権はなし崩し的に当時のNo.2に当たる天狗たちへと推移していった。故に、現在の妖怪の山を牛耳るのは天狗である。

ここで間違えてはいけないのは、天狗が下剋上を果たした訳ではない、という点。天狗が鬼を敗り権力を奪つたのではなく、鬼の捨てた権威を天狗が拾つたに過ぎないのだ。故に、当時から数百年と経つてなお、天狗は未だに鬼に頭が上らない。「つまらん世辞はよせ」

わかりやすく下手に出た射命丸に、仏師は冷たく吐き捨てる。

射命丸は鬼の機嫌の損ねてはたまらぬと、慌てて言葉を重ね始めた。

「世辞だなんてとんでもない！ 私はただ強大である鬼を、ひいてはあなた様を心

から敬服しているだけで——」

「——その猿芝居、いつまで続けるつもりじゃ」

芝居は、その下手に出た態度のことではない。この射命丸という妖怪は、そもそも目の前の仏師を自らよりも上の存在などとは欠片も思っていなかった。丁寧な言葉は相手を乗せる手段に過ぎない。仏師はそれをこそ咎めていた。

「薄っぺらい言葉と振る舞いで実力を隠し、内心で見下す。これが天狗の在り方か」
仏師が厳かに呟く。

天狗は、仏師が敬服してやまない恩人、葦名一心のもう一つの顔であった。剛毅朴訥にして剣術無双、たった一代にして国を落とし、葦名を興した剣聖。

それが、葦名一心という男だった。

仏師はきっと期待していたのだろう。天狗という妖怪が、葦名一心の如き傑物であることを。

一心がどうして天狗を己の分身に選んだかは、仏師には分からない。だが、いざ見えた本当の天狗はどうだ。

高い実力を持ちながら、相手に悟られぬように適度に力を抜く。明晰に思考を張

り巡らせておきながら、何食わぬ顔で惚ける。

相手と同じレベルまで自分を落としながらも、その心の内で相手を侮蔑する。

狡猾で人の神経を逆撫でる振る舞いは、仏師の記憶にある葦名一心という男とは似ても似つかなかった。

「……これはこれは。鬼にしては、蒙昧じゃあないんですね。慧眼をお持ちでいらっしゃる」

「拔かせ、二枚舌」

仏師の発言に、低頭平身にへりくだっていた射命丸の気配が変わる。仏師の言葉に含まれた落胆の色を見抜き、それを侮辱と見なしたのだろう。

もう射命丸に先ほどのような気後れして縮こまるような素振りはない。意図的に隠蔽していたのであろう、長寿故に生まれる貫禄と威厳を遺憾なく発揮し、寧猛に仏師を射抜く瞳は猛禽の如き剣呑さを帯びていた。

「口の利き方に気を付けろよ、元人間風情——とでも言ってほしいんですか？」

「ああ、気に喰わん」

「教育が必要ですね」

目の前の射命丸の姿が、烈風と共にかき消える。現象としてはこいしの際と酷似しているが、原理は大きく異なる。これは、純粹に隔絶した速度によるものだ。

速さに秀でる天狗の中でも、鴉天狗は随一である。

実力による極端な縦社会を形成する天狗は、鬼を忌避する。それは真実だ。

だが、何事にも例外というものが存在する。

鬼は恐ろしく、比類なき妖怪である。

だが、それと同時に彼女は元人間の妖怪を、この上なく見くびっていた。

天狗は極めて高い観察力を持つ種族である。人外の視力に論理的な思考力を持ち合わせ、妖としての寿命が大量の経験則の蓄積を可能とする。

漏れ出す妖力の質か、あるいはその一挙手一投足か。根拠は不明だが、射命丸は仏師が初めから鬼として生まれた純粹な妖怪ではないことを見抜いていた。

仏師の姿が鬼以外なら、侮辱されたとして射命丸はそれを甘んじて受けていただろう。天狗にも誇りはあるが、それに固執して大局を見誤るほど愚昧ではない。

だが、仏師は鬼だった。

——鬼を己の手で下してみたい。

射命丸には、そんな魔が差した。

それは、長きに渡って鬼に顎で使われてきた天狗の境遇を思えばこそその発想でもあった。

悲しい事に射命丸は当時から不思議と鬼たちの覚えめでたく、散々辛酸を舐めさせられてきた過去がある。文句の一つでも言ってみたくとも、それができないのが天狗の性。

故に、鬼にはぶつけようのない鬱憤が溜まりに溜まっていた。

そこに現われた図体ばかり大きい、如何にも鈍臭そうな元人間の鬼。

たとえ鬼とて、所詮は隻腕の元人間。ならば恐るるに足らず。鬼となって傲慢になったその鼻を叩き折ってやろう。射命丸は、そういう腹積もりだった。

天狗は弱者とみなした相手には、好戦的に喧嘩を売る。なぜなら、相手が自分に敵わないと知っているから。

千年分の恨み、晴らさでおくべきか。

「へぶっ!？」

だが、姿を現した射命丸は、仏師の背後で顔面から勢いよくずっこけていた。

理由は単純。神速で大地を駆け回る射命丸に、仏師が足をやって転ばせたからだ。

「疾さ自慢は、たいがい初めに相手の背後を取る。狡猾な性格なら尚更にな」

「マ、マジですか……」

「おお、お見事」

呆けた声を上げる射命丸をよそに、さとりがぱちぱちと小さな拍手をする。この拍手には、初めて仏師の忍びの技術をみたことによる感動が半分、射命丸が起こした暴風によって巻き上げられた礫が肌を打つ痛みの恨みが半分込められている。

一方の地面に転がされた射命丸は驚愕の中にあった。

この射命丸は、己がこの幻想郷において最速であるという自負があった。そしてそれは誇張表現などではなく、まさしく事実である。

少なくとも射命丸の生において、その速度に比肩された試しはない。誰の目にも追えぬ速さを持つ自信があったのだ。

これは戦闘に満たない、ほんの戯れのようなものだ。無論全力で戦おうとしたわけではない。だが、速度においては妥協はなかった。

——にも関わらず、見切られた。

己の速度に絶対の自信があったが故に、その衝撃もひとしおである。

射命丸は慌てて身を起こし、すかさず仏師に頭を下げる。

「い、いやあ見事でした！ ふ、不肖この射命丸、差し出がましくもあ、あなた様のお力をお目にかかりたくって、スウィーツ、げほっ、うん ーん ーん ー！ こ、このような真似をですね、ええと、はい！ さしもの私も自慢の速さを見切られたのは前代未聞でして、ええ！ いやあ凄いなあー懂れちゃうなー！」

教育などと抜かして力を振るおうとした事など無かったかのように、また射命丸が擦り手揉み手をしながら調子の良い言葉を並びたてる。その表情はいつか見たように引き攣ったままの凍り付いた笑みで、今度は滝の様な汗を浮かべていた。

一回目と違うのは、それが演技ではないことくらいだろうか。

実をいうと、人が妖怪になるケースはままある。それは恨みであったり、倫理を外れた呪いであったり、ともかく原因は多岐に渡る。

だが、その先が鬼ともなれば話は別。

物の比喩で鬼と呼ばれることはあろうと、本当に人が鬼になるなど尋常では考えられないことだ。

鬼は最強の妖怪である。そこに特別な能力はない。鬼は強い。故に最強。Q・E

・D・

そんな知性の欠片もない証明がまかり通ってしまうほどには、鬼は荒唐無稽な存在だ。

何の議論の余地もない力の象徴こそが、鬼を鬼たらしめる。

例え元人間でも鬼は鬼。射命丸はそれを痛感した。

振りだしに戻ったように見える射命丸の態度も、その内心は異なる。それは、かつての山の支配者に向けるものと同一のものだ。裏側に嘲笑はない。

この一瞬で、射命丸の仏師に対する認識は元人間風情から、鬼へと変わっていた。それもそうだ。射命丸は今、絶対強者である鬼に「見逃された」。愚かにも鬼を相手に喧嘩を売った結果、最も信を寄せる速度という武器を完全に取り押さえられ、そのうえで足を引っかけただけで済ませてもらった……というのが射命丸の認識である。

いや、足を掛けただけではない。射命丸の速度に足を「合わせた」。順当にいけば、超越的な速度で移動していた射命丸の下半身は、衝突の際のインパクトで弾け

飛んでいたはず。

にも関わらず、受けたダメージが転倒によるものしかないのがその証拠。こんなもの、ただ鬼になっただけの凡夫に可能な芸当ではない。

ちなみに受けた鬼の足についてだが、鬼の身体はその程度で傷つくほど柔ではない。

今のが蹴りなら、張り手なら、拳なら。天狗の妖力をしてても復活がままならない程、全身が霧のように粉微塵となって絶命していただろう。

幻想郷最速のスピードで手の平を返してご機嫌を窺いに行くのも、射命丸としては当然の行動である。

「足が速ければ変わり身も早いんですね」

「何だろうと構いやせんわ。さとりの前で腹の探り合いなど、ほとほと意味が無い」
「で、では私の言葉が嘘偽りではないこともわかっていただけますよね!? 射命丸嘘つかない!」

「この天狗嘘ついてます」

「ちよつとオ!?!」

無論、この場で嘘をついているのはさとりの方である。だが、僅かでも目の前の鬼からの好感度を上げておきたい射命丸としてはたまったものではない。

射命丸は確信した。この悟り妖怪、性格が悪い。

「あまり虐めてやるな」

「私の安息を侵害したからには、これくらいの報復は許されると思うんですよ。それで取材でしたっけ？ ええ、引き受けます。引き受けましょうとも。なにせ、楽しい時間になりそうですからね」

「い、いやー……。今日はちょっと都合が悪いようですし？ お二人の時間をお邪魔してしまったようですし？ また日を改めて、特に今度はさとりさんが地霊殿でおひとりの時にお邪魔しようかなーなんて……」

「まあまあ、そう邪険になさらないで」

やっぱり鬼がいるような場所はダメだ。まして、悟り妖怪が一緒じゃ隠し事ひとつできやしない。私は地上に帰らせてもらう。もう捨て台詞だけ残してこの場から飛び去ろう。

そう思い立つも、さとりの第三の目から伸びた触手が射命丸を捕らえ、それは叶

わなくなった。

「あ、あのう。私そろそろ帰ろうかなーって……」

「まあまあそう言わずに。これからもう一人、あなたの知己の来客がありますよ」
「わ、私の？」

誰かが近寄ってくる様子は見受けられないが、さとりの能力で察知したのだろうか。

それならば、やって来るのは誰だろう。さては妖怪の山の天狗仲間だろうか。だったらそいつにこの状況を全て押し付けて帰らせてもらおう。

「ほら、上を見てみてください」

「上……？」

見上げた射命丸に映ったのは、たなびく金髪。深紅の一本角。

「ひょっとして」

射命丸の背筋を、嫌な汗が伝う。

思い出したくもないこの妖気。もしかして、もしかするののか。

次の瞬間、遙か上空から落下してきた一人の女が、轟音と共に縦穴の底に着地し

た。

「よう、仏師！ さとりも一緒か。約束通り、極上の酒を用意したぞ！」

開口一番、耳を塞ぎたくなるような大声を出した一角の女が、嬉しそうに仏師らに顔を向ける。

その肩には大きな酒樽が担がれていた。

射命丸は思わず息を吞んで、顔色を青ざめさせる。

この妖怪と射命丸が最後に顔を合わせたのは、果たして何百年前だったか。その顔を、いったいどうして忘れられよう。

妖怪の山の首魁、鬼の四天王が一人。全ての胃痛の元凶。かつての上司。

「ほ、星熊勇儀……！」

「あん？ お前——私の知り合いか？」

無数のトラウマが脳裏をちらつく恐ろしい眼光を向けられたことで思わず震えあがる射命丸だが、ここで一筋の光明を見出した。

さてはこの鬼、私を覚えていない……？ 大いにありうる話だ。基本的に鬼という妖怪は他者に興味がない。遥か昔に顔色を窺って媚びへつらっていた無数の妖怪の

一人など、覚えているほうが奇妙なくらい。ならばまさしく千載一遇のチャンス。ここはしらばっくれて赤の他人という事でこの場を逃れるしかない。射命丸はそう考えた。

「人違いです」

「いいえ、知り合いです。名を射命丸文。千年以上前、当時の妖怪の山からのお付き合いのようですね」

この悟り妖怪、絶対許さねえ。射命丸はそう心に誓おうとするも――
「やっぱりそうか。いやあ、懐かしい顔だなあ……」

——ところで、お前いま嘘を吐いたか？ 吐いたよな？ 鬼って嘘が大嫌いなんだよ。知ってるかな、知ってるよな？ なあ。ええ？ おい」

勇儀に有無を言わさぬ怪力で肩を組まされる。そのままずっと顔を寄せられ、凄まれたことで直前の思考は全て吹き飛んでしまった。

掴まれた肩は軋み、悲鳴を上げて激痛を訴えている。

もうおうち帰りたい。許してほしい。どうしてこんなことに。癒えたはずの胃にまた穴が。

射命丸にできるのは、必死に目を逸らしながら小声でうわごとのように「ちがいます」と繰り返すことだけだった。

「縁ってのは不思議だよなあ。昔、世話したやつとこう都合よく再会できるんだからさ。でも、嘘はよくないよなあ嘘は。昔の恩なんてとくに忘れちゃったかな？　おい、どうだ？」

昔世話をした？　冗談はよせ。世話を焼いてもらったの間違いだろう。私たち天狗が、当時お前ら鬼のせいでどれだけ迷惑を被ったと思ってる。どれだけ振り回されたと思ってる。

恩だって？　もらったのは山盛りの厄と不幸と仇だけだ。

そう声を大にして言えたらどれだけ楽か。どうして天狗はこんなしがらみまみれなんだろう。

射命丸は土気色の表情のまま両目に大粒の涙を浮かべて、そんなことを考えていた。

次に考えるのは、辞世の句の内容だ。

「その辺で許してやれ」

それは、救済の声だった。

仏師が勇儀を制止しようとしてくれたのだ。鬼が耳を貸すのは、基本的に同じ鬼の言葉だけだ。射命丸もまさか仏師が己の身を庇うような発言をしてくれるとは思ってもみなかった。

だがそれでも、勇儀は納得がいていないようだった。

「そうは言うけどね、私にだって気に喰わないこともあるんだ」

「まあ聞け。その天狗の服が、なぜ土に汚れていると思う」

「うん？ 確かに妙だ。天狗が転ぶわけもないが……。まさか、こいつが仏師に喧嘩を売ったとでも？」

「その通りです。ええ、それはそれは威勢良く」

自分でも疑うような回答を口に出した勇儀の言葉を、さとりが肯定する。

「本気かい!? 天狗が鬼に喧嘩を売ったって？ そりゃあ……傑作だ！ 何だよお前、意外と面白いやつじゃないか！」

「きよ、恐縮です……」

おかしい。なぜだか助かった気がしない。勇儀に肩を組まれたまま、一層体を縮

こまらせた射命丸は、より沼の底へと沈み始めているような錯覚さえ感じていた。

「それでどうなった!? 仏師に何をされたんだ。仏師は無傷だな? それで、お前も不思議と無傷ときた。聞かせておくれよ。丁度いい、お前もこの後の酒盛りに混ぜてやる!」

「えっ、いや、あの、私はちょっと」

「どうした?」

「今回は遠慮――」

ゴキヤ。

「いえ、何でもないです」

「よろしい」

断ろうとした瞬間、射命丸の組まれていた肩が粉碎された。

鬼に睨まれた天狗に、選択肢などあろうはずもない。

このあと滅茶苦茶酒盛りした。

主人公が鬼だと、射命丸が小物になるという気付きを得た作者でした。これを書いて射命丸が更に好きになったりなどした。かわいそうはかわいい。すなわちこれ真理である。

秘伝

新成人のみなさまおめでとうございます更新

初めに勇儀が全員に酒を注いだ杯を配り、最後に仏師が酒樽をそのまま傾けて浴びるように酒を飲む。

仏師は口を満たす酒を飲み下すと、同時にどんと大きな音を立てて酒樽を地面に降ろす。

震える大地と一緒に、怯えた射命丸の肩が跳ねた。

「……プハァ。極上。その言葉に偽りはないか」

「応とも。手に入れるのに苦労したんだ」

「地上の酒か」

「少し違うな。地上に紛れた知り合いの鬼の秘蔵を強請った」

続いて他の面々も酒を呷り、その味に舌を唸らせていた。

鬼ほどではないにせよ、酒好きで知られる天狗の射命丸などは一時鬼の恐怖を忘れ、鬼秘蔵の酒にありつけた幸運に分かりやすく目を輝かせていた。

仏師も多様な酒を嗜んだが故にわかる。この酒は、そう易々とお目に掛かれる品ではない。

「そうか。そうか……」

仏師は酒を口の中で堪能するさながら、勇儀の素振りを思い返し、自分で思っている以上に彼女の興味を惹いていたことを自覚した。

勇儀は、人間との戦いを神聖視している。それは旧地獄の橋の上で勇儀と初めて言葉を交わした時から感じている事だった。

恐るべき鬼と、それに立ち向かう勇敢な人間。勇儀はそんなおとぎ話じみた光景に強い憧れを抱いていた。傲慢な妖怪を相手に、知恵を絞り力を鍛え、恐怖に抗って心を奮い立たせた人間が、見事鬼退治を果たす。

そんな、人と鬼の双方が一度は願う夢物語。

鬼は強力で、人間は脆弱だ。

この二つの種族の力の差は、想像を絶する。

——それでも、人間はその力関係を覆せる。

人間には、可能性がある。不可能を可能とする力がある。

たゆまぬ鍛錬を積んだ人間が、いつか鬼と人との間に横たわる大きな壁を打ち砕いてくれるに違いない。

勇儀は心の底からそう信じ続け——ついぞその日は訪れなかった。

待ち続けるうち、時代は移ろった。人間は変わった。

……変わってしまった。

こいつになら、首をくれてやってもいい。そう思える人間がいなくなったのはいつからだっただろう。鬼に挑む人間はいなくなっていた。人は鬼と争う事をやめてしまった。

仕組まれた不条理。強者が弱者を蹂躪する理不尽。人ならざる、不可解な存在。人間がそれらに真っ向から立ち向かった時代は、確かにあったのだ。

親か、友か、あるいは故郷か。鬼が蹂躪したすべての復讐の為、怒りに燃ゆる生き残りの男の決死の勝負を真っ向から受けて立つのが好きだった。

鬼の積み上げた屍の向こう側に光る、憎悪を灯したあの力強い瞳が好きだった。背負った遺志に背中を押されて、鬼の前に踏み出す一步が好きだった。

憤怒、悲哀、絶望。それらを全て飲み下し、築き上げられた人間の力の粋で以つて、鬼を討つ。

鬼もまた、遺された者特有の悲痛な決意に全身全霊で応える。

そんな時間が、大好きだった。

ああ、けれど。

鬼は、強すぎた。

なぜ、鬼が最強と呼ばれると思う？

——誰も敵わなかったからだ。

最も強かったから、最強の名を欲しいがままにしているのだ。

そんな当たり前のことを、人間は理解した。

理解した人間は、鬼を諦めた。それが道理と言わんばかりに。

人間が鬼の元へと足を運ぶことは、なくなった。

鬼は来もしない勇者を待ちぼうけて、寂しく酒を飲むばかりの日々を送るようになった。

待てど暮らせど、ゞ鬼退治ゞは始まらない。

——人と鬼の関係は、知らず終わっていた。

変わりゆく人間に、鬼たちは取り残された。

偶に来る来客に心を躍らせ迎えても、やって来るのは生贄にと差し出された口減らしと毒の仕込まれた酒。

やがて、おのずと理解した。

我らは、人間に見限られた。いつかのあの日、どこかのあの場所で、殺されるべきだった。

鬼は、人間に諦められた。その事實は、鬼たちの心に深い絶望を落とした。

いつしか、鬼も同様に人間に見切りを付け始める。

一匹、また一匹と、鬼が姿を消し始める。少しずつ、けれど確実に鬼はその数を減らしていき。

地上には、最強の名だけが残った。

この星熊勇儀という一匹の鬼もまた、その一人だ。

人間を諦め、人間に諦められた悲しい怪物。

——それでも。

それでも、手前が勝手に見限っておきながら、未練がましく夢想せずにはいられないのだ。

だって、あの頃の人間たちはそれほどまでに輝かしかった。

鬼は、どうしたって鬼。心の根っこの部分はどれだけ時を経ようと、あの時代から変わらない。

勇儀はずっと、恋に焦がれる乙女のように、血沸き肉躍る人間との戦を求めている。

瞳の奥で、鬼さえ斃しかねない強い人間の幻を追わずにいられなかった。

……だというのに、それが目の前の深紅の鬼ときたら。

——顔を割る巨大で深い刀傷。

——滑らかに斬り落とされた左腕。

どこからどう見ても、明らかに類まれなる強者と死闘を繰り広げた痕跡があるではないか！

で、あるならば。

この鬼ならば、ずっと信じてやまなかった人間の強さを知っているのではないかいや、絶対に知っている。

勇儀が胸の底から焦がれて止まないあの憧憬を、この鬼は。

ならば、せめてこの仏師が戦いの中で感じたものを聞いて、見果てぬ夢を思い描きたい。

そう思う事の何がおかしいだろう。

この寡黙で思わせぶりの言動の鬼の口を割らせるためなら、出し惜しみなどして
いる場合ではない。

持ち込まれた上等な酒は、つまりそういうことだ。

これでつまらん話をしたら承知しないぞ。腕を組んだまま仏師に視線を寄越す勇儀の目は、言外にそう語っていた。

しかし仏師はそんな勇儀の視線など気にも留めていないようで、酒気によって滾

る血潮を堪能しつつ、気兼ねなく口を開く。

「……一人の、人間の話をしよう」

「それは、どんな人間かね」

「儂の左腕を落とした男じゃ」

「き、聞きたい！」

果たして、仏師の語り口の切り出しは大変に興味を惹くものだった。

仏師の言葉には勇儀だけでなく射命丸も食い付き、さとりに至っては休ませたがっていた第三の目を露骨に仏師へと向け、一人だけ心を読んで先を見ようとしていた。

「……ぷはあ！ やはり、いい酒は染みる……」

だが、あくまでも仏師は自分のペースで酒を嗜む。仏師の心の焦点が酒へと移ったことで、さとのり読心は不発に終わった。仏師の振る舞いにやきもきしつつも、誰も話の先を急かさずにじっと言葉の先を待った。

「……名を、葦名一心。戦乱の世にて、国を盗んだ怪傑よ」

もつとも、この幻想郷にその名が伝わっているかどうか。仏師はそう続けた。

「あの覇氣、咆哮、劍圧。……今でも偶に夢に見る」

酒氣に浮かされて熱っぽく語る仏師。葦名一心は仏師の生涯で相對した劍俠において、間違いない頂点に位置する実力者だった。

「死闘。そう形容する他にない戦いじゃった。繰り出される全てが必殺の一撃。儂はそれを、いなし、弾き、耐え続けることで致命の一撃を狙う隙を窺い続けた」
手段を選ばぬのが忍びの常。どんな外道にも手を染めよう。

打たせずして打つ。斬らせずして斬る。その強みを何一つとして發揮させぬまま殺す。

忍びは勝利を何よりも重んじ、正道を外れた絡め手の助けも厭わない。
尋常な戦い、武士道精神、名誉ある勝負。そんなものは犬にでも食わせておけばいい。

死んで晒す屍に、いったい何の名誉があらうか。

けれど、それが出来る相手ばかりでもない。

強者との戦いともなれば、また戦いのやり方も変わってくる。

仏師の語る戦法は、不意を突いた暗殺以外の場での忍びの戦闘の定石だった。

攻撃は硬く受けとめるのでは無く、柔らかに受け流す。連撃の合間に生まれる小さな隙に斬撃を挟み、裂傷にて流血を強いることで体力を奪う。

失血によって回復力が低下する中、攻撃を弾かれ続けることによって蓄積した疲労がピークに達したとき、体幹が崩れる。

そうして晒された大きな隙に、忍殺を叩き込む。

それが忍びの戦術だった。

忍殺は、忍びの殺しの美学だ。

ただ殺すだけなら、剣を打ち合わずに避けて斬り続け、そのまま殺してしまえばよい。

だが、それでは駄目なのだ。

忍びが忍びである限り、己の事情でたった一つの尊い命を付け狙う畜生である限り、それでは駄目なのだ。

殺しが忍びの業なれど、そこに一握りの慈悲を忘れてはならぬ。

苦しませず、痛みもなく、一息で命の灯火を吹き消す。戦いの興奮も冷めやらぬままに。

それが忍びにできる、せめてもの葬送だ。

「一心さまは、あらゆる剣術のあらゆる流派を貪欲に修めておった。嵐の様な激しい剣かと思えば、次の瞬間には糸を手繰るような繊細で流麗な太刀筋になる。変幻自在、千変万化。儂もそのすべてを防ぐことはできなんだ」

仏師はもう一度酒を呷ってから、続きを切り出す。他の面々もそれに連れられ、手元の極上の酒の存在を思い出し、口に含んだ。

「ぶはあ。……だが、それでも追い詰めた。互いが死地に追いやられた。そして、あと一撃。あと一撃防げば、殺せる。その確信があった」

仏師は右の手のひらに視線を落とし、当時の記憶を振り返っていた。酒が回っていても、仏師の脳裏に当時の情景は鮮明に浮かび上がっていた。

「じゃが……最後の一撃。一心さまは奥義を放ち、儂は敗れた」

「……奥義を防げなかったのか」

「ああ。僅かでも一心さまの刀に儂の得物を掠らせることができれば、それで体勢を崩させ、勝者は儂であつたろう。じゃが、それすらできなんだ」

淀みなく答える仏師に、重ねて勇儀が質問を投げかける。

「何をされた？」

「儂の斧を一刀にて弾き、返す刀で腕を落とされた……恐らくは、じゃがな。その軌跡はこの儂の目でさえ捉えられなんだ」

「——葦名十文字。それが、その奥義の名ですね？」

熱心に仏師の話を聞いて手元の手帳に何かを書き残していた射命丸が、仏師より先んじて言葉を発した。

「知っておるのか」

「どんな技だ」

「いわゆる居合術に当たります。ただ、速きこと。それのみを一意に極めた技です」
射命丸が葦名流の技の名を知っていたこと、そして更にその奥義の概要までも把握していたことに仏師は驚いた。

「葦名流。戦に勝つという一点のみに傾倒した剣術流派。その実践的な教えは広く世に知られています。というのも、幻想郷が創られるよりも前に、妖怪の山に葦名流の武士が訪れたことがあります」

葦名流は、葦名一心を起源とする剣術流派である。壮年の葦名一心が死闘を重ね

ることで修めた剣技をより洗練し、葦名衆の為にと束ねたものである。

剣術流派は得てしてその中に儀礼的であったり、形式的なものが混ざることがあるが、葦名流はまさしく葦名一心の戦いの歴史そのものであり、その記述の全てがただ勝利すること一点に収束していた。

「武士の残した葦名流の伝書は、剣を扱う哨戒天狗などに特に好意的に受け止められ、修めているものも多いと聞きます。これははっきり言って異常なことですよ」「確かに異常だ。天狗がまさか人間の剣術を修めるなんてねえ」

異常と語る二人の言葉は、天狗という妖怪の排他的な性質をよく知る故だ。そもそも妖怪の山は外から来るものを排斥する傾向にあるし、まして見下している人間の編み出した剣術など、鼻で笑って相手にもしないだろう。

だが、そうはならなかった。

哨戒天狗に傲慢な者が少ないというのもあるが、何より葦名流は合理に則していた。日々剣を打ち合い戦闘技術を磨く哨戒天狗たちにとって、無数の修羅場を潜り抜けた経験から生まれた剣技を記す戦闘技術書には、驕りと偏見を捨ててでも一見する価値があった。

「……あれ？」

ここで、仏師と射命丸の心象を読み取っていたさとりが不意に声を上げた。というのも、二人とも同じ葦名十文字という技を連想し、その動きを脳内に浮かべているはずなのに、その形に差異があったからだ。

「……あれは、葦名十文字ではなかった」

「しかし、葦名流の伝書は葦名十文字という奥義で締めくくられていたはず……」
「葦名十文字には、先がある」

その答えを、仏師が話し始めた。

「確かに儂を斬ったあの奥義は『葦名十文字』ではあった。じゃが、死線の際にて研ぎ澄まされた刀が、奥義を新たな領域へと押し上げた。葦名十文字の延長線上にありながら、明らかにその技の形を逸脱していたが故に、のちにその名は改められた。」

——奥義の名は、『一心』

「自らの名を冠した奥義か……！」

勇儀が感慨深く呟く。編み出した技に、自分の名をつける。つまりそれは、その

奥義こそがまさしくその人物の剣の道における集大成という意味に他ならない。

「射命丸、といったな。なぜ儂がお前の速さを見切れたと思う。それより速い斬撃が、ずっと儂の脳裏に焼き付いておるからよ」

そもそも例え忍びの目を持つとて、音の壁さえ越える射命丸の速さを見切るなど不可能だ。

だが、仏師は見切って見せた。

一番最初に背後を取りに来るという予想から、軌道の予測を立てられたというものもあるかもしれない。しかしそれ以上に、仏師の目は、速さに慣れていた。

「儂は剣の軌跡を目で追えなかったと言ったが。あれは、少し語弊がある。儂は腕が斬り飛ばされたあと、遅れてその十文字の残銀を見た」

「それって……」

「居合の速さが極まるあまり、光さえも置き去りにしちまったのよ」

「お、おいおい……」

「信じられぬか？」

いくらなんでも話を盛っているんじゃないか。そう思った勇儀が、半信半疑に怪

訝な声を上げる。勇儀のそれは、至って普通の反応だ。いくらなんでも人の放つ剣閃が光を超えるなど、荒唐無稽に過ぎる。だが、仏師の声色は真剣そのものだった。そんな勇儀の様子を見て、仏師が最後に酒樽の中身を全て飲み干し始める。

「……プハァーッ！……丁度いい。酒の礼じや、芸の一つでも披露しよう」

「おおっ！」

酒の匂いのする息を吐いた仏師が、あぐらを解いて立ち上がる。

何が始まるかはわからずとも、勇儀は期待を込めて歓声を上げた。始めるのは、きつと先ほどの奥義に関わる何かだ。

「さて。儂は、その目で見た技を模倣することができる」

そう言いながら、仏師は縦穴の底のはずれに落ちていた刀を一本拾い上げた。恐らくは、地上からうち捨てられたもの。刃の潰れたなまぐらで、人斬りはおろか、刃物としての使用さえ堪えないだろう。

「射命丸や。お前さんは確か鴉だったな」

「え、あ、はい。そうです……？」

射命丸は刀を片手に持った仏師から突然素性を問いただされたことに疑問を抱き

つつも、とりあえず肯定を返した。はて、この質問にいったいどんな意味があるのだろうか。

ここで射命丸は何かを察したさとりから向けられる憐みの視線に気づいた。その視線の意味は何だ。

止まない悪寒の正体は、何だ。

「見事な翼よ。黒く艶やかで」

「ええっと、ありがとうございます……？」

「儂が手入れをしてやろう」

「——え？」

この話の流れで？

射命丸は努めて冷静さを保ちながら、仏師の発言を時系列順に辿ってみることにした。

まず腕を斬られた『一心』という、凄まじい奥義の話。そして、仏師は目で見た技を再現できるという話。

おかしい。どう考えてもこの流れで仏師が射命丸の翼を手入れしようという形に

落ち着くはずがない。

だが、この感覚には身に覚えがある。太古に酔っぱらった山の鬼に絡まれる前など、こういう会話の流れだったような気がする。

その手に持った刀は何に使うんですか？などと、怖くて聞けなかった。

なので、射命丸は代わりにさとりに聞いてみることにした。

「ご愁傷さまです」

「えっ」

聞く前に答えが返ってきた。諦めを誘うようなその言葉は、射命丸の不安を一層と煽る。そんな射命丸に、仏師が安心させるように声を掛けた。

「死にはせん」

「いったい何が始まるんですか!？」

「剣を極めし男、葦名一心が奥義。その片鱗を味わうといい」

「え、ちょ、あの、また今度で——」

「動くな。手元が狂う」

「はい」

そんなことを言われてしまったては、射命丸も逃げ出すことができない。

これは邪推だが、ひょっとしてこれは先ほどに喧嘩を売ったことによる報復なのではないか。金縛りにあったように身を凍らせながら、射命丸はそんなことを考えていた。

上司は絶対。逆らうことは許されぬ。なぜなら、逆らうとこんな目に合うから。射命丸は助けを求めに他の二人を見やって、すぐにそれを諦めた。さとりはこういうときに制止してくれそうにないし、勇儀に関しては何しろ止めようとする誰かがいたら殴り飛ばしそうだ。

「諦めるのが一番いいと思います」

「そんな……」

さとりはそう言った。確かにそうかもしれない。もしここで逃げお世話として、絶対にこの星熊勇儀の反感を買う。俗にいう詰みという状況だった。

仏師が射命丸の正面で地面に刀を突きたてて、そのまま力を加えることで鞘の代わりとする。ギリギリと抵抗を掛けられた刀身が、軋み声を上げる。

仏師の手にあるそれは、何も特徴のないただの刀。何の異名も無く、何の特別な力も無い。刃は毀れ、刀身は錆びて朽ちている。そんな刀。

高速飛行を日頃から行っている射命丸の優れた動体視力は、不幸にもピンと張った力の蓄積が限界に達し、大地から切っ先が離れる刹那を捉えて悲鳴を上げた。

「ぴい！」

その斬撃に、音は無かった。

その斬撃に、風は無かった。

その斬撃に、光はなかった。

「……あれ？」

仏師は刀を振り抜いており、射命丸もまた明らかに刀の届く範囲に入っている。にも関わらず射命丸に何の外傷もない。まるで、刀が射命丸の身体をすり抜けたかのように。斬撃など、初めから放たれなかったかのように。

射命丸はこの事態を、仏師が自分を脅かすための小芝居だと認識して納得した。

「い、いやあ仏師さんも人が悪い——」

「動くな」

その直後。空間が捻じ切れるような轟音と共に、銀の光に化けた二つの斬撃が遅れて殺到した。

「ひ、ひええええええええ！」

「見事！」

「う、うわあ……」

光さえ、いや現実さえも追い抜く剣術の最奥『秘伝・一心』。まさに神業。

いざそれを目にした勇儀は素直に称賛の声を上げた。妖怪が考える、人の届く限界。それを遥かに越えるであろう技は、勇儀が人間という存在に惚れ直すには充分すぎた。

一方の人智を超越した奥義の餌食となつた射命丸は、目に涙を浮かべ、情けない悲鳴を上げながら、たととその場で座り込んでいた。

放たれた斬撃は射命丸の身体を蛇のように巧みにすり抜け、大きな翼の羽先だけを切り裂いている。確かにこれは、射命丸が僅かでも身じろぎしていれば惨事を引き起こしただろう。

さとりなどはうっかり恐怖の真ただ中にある射命丸の心を読んでしまい、思わ

ず同情した。

射命丸は今回の件で鬼の恐ろしさを再三味わい、今後どんなことがあると鬼には関わらないことを胸に誓った。

「僕には二撃が限界。じゃが、齢を重ね一層洗練された一心さまの斬撃は、十を優に超えよう」

あの葦名一心が、たった二撃のみ光を置き去りにした程度で満足するはずがない。二撃ができるなら、次は三。三の次は四。葦名一心はそう考える男だ。今となつては二十近いのではないか。仏師は老境の葦名一心と立ち合ったことはないが、仏師には不思議とそういう確信があった。

「いいなあ、いいなあ……！」

勇儀は何よりも、そんな人間と真っ向から戦えたことに羨望の念を向けていた。稀有な強者と出会えるだけでまず奇跡。そして、その強者が戦いに応じてくれるかどうかともまた奇跡。人間は脆い。病などに縛られその実力を発揮できぬことも多い。

けれど、信じることができた。

こんな人間が、こんな技を編み出すほどに人間離れした人間がいる。

まだまだ、星熊勇儀は夢を見ることが出来る。仏師はそれを証明した。

そのことが、無性に嬉しかった。

仏師はそんな勇儀を一瞥したあと、腰を抜かして慄く射命丸に声を掛けた。

「そう泣くな、射命丸。何もいたずらにお前さんを斬りつけたわけではない。ひとつ、試しにその翼で羽ばたいてみる」

「え、ええ……？」

流した涙を指ですくいつつ、とりあえず言われるがままに翼をばさりと大きく羽ばたかせた。

すると、射命丸の姿が水に溶けるようにかき消える。

「え……ええ!? なんですかこれ！」

少しすれば、消えていた射命丸が霧に色を塗ったように再び姿を現わす。

目の前の現象に目を剥く勇儀とさとりだったが、一番驚いているのは間違いない。射命丸本人である。

「お前さんの羽を、霧がらすという鴉と同じ形に整えた。そら、手入れをしてやる

といったじやろう」

「た、確かにそう仰っていましたけど……」

霧がらすは葦名から北に離れた薄井の森という地に住まう鴉の一種。霧深き薄井の森には正体の掴めぬ不可思議な猛禽が棲息しており、いずれも幻のように姿を眩ますのが特徴であった。

霧がらすを捕まえたものは誰一人として存在しない。例え掴んだとて、不思議と羽だけを残して姿を消してしまうのだ。

仏師にはかつて狼がその霧がらすの羽を持ち込み、それを義手忍具として加工した経験があった。

鬼は嘘を嫌い、虚言を吐くことはないとされる。鬼と付き合いの長い射命丸は承知していたつもりだったが、頼んでもいない羽の手入れでまさかこれほどの副産物が得られるとは思ひもなかった。

姿をくらし、実体さえも誤魔化す霧がらすの羽は、公明正大な一人の記者として（あるいはパパラッチとして）幻想郷中を駆け回る射命丸には、大変ありがたいものだった。

なにせ、この稼業はよく恨みを買う。決定的瞬間をカメラに収めた次の瞬間に射命丸本人ごと証拠を隠滅せんと殺伐とした弾幕に襲われることも珍しくない。

仏師には散々ひどい目に合わされた射命丸だったが、これには無邪氣に大喜び。



この後は、射命丸が姿を消すことへのからくりを問い詰めたり、射命丸が仏師に売った喧嘩の内容などを勇儀が聞き出し、大笑いするなどして、大いに盛り上がった。

しかし、肝心の酒を切らしているので、酒宴は、ほどなくしてお開きとなる。

勇儀は仏師から聞いた話を何度も思い返し、それを旧地獄街道のパルスィに自慢しようとして、逆にパルスィから相伴に預かれなかった恨み言を聞かされ続けることになる。

腰を抜かしたままの射命丸は高速思考によって全力でさとり of 良心に訴えかけ、なんとか肩を借りて地霊殿まで送ってもらおう運びとなった。

更に射命丸はそのまま地霊殿に居座り、そこで本来の目的であったさとりへの取

材も果たしたというのだから、恐るべきはジャーナリスト精神の強かさである。

さて、余談だが射命丸は地上に戻ったあと同僚や部下、取材相手に霧がらすの羽を自慢して回りそれはそれはウザがられていたのだが、あくまでも所詮は羽。

時間と共に霧がらすの羽根は抜けて、生え変わってしまう。

まさか他にそんな加工ができる人物に心当たりなどないので、射命丸は霧がらすの羽を散らすたび、怖いのを我慢して仏師の下へ翼の手入れを請いに来るようになった。

もちろん、酒と自慢の新聞も一緒に持っていく。

射命丸かわいそう。でもこれかわいいのがわるいんだからね……。

それはさておき、仏師から手渡される忍びの技術書には、なぜか梟の奥義である大忍び刺しが記されているんですね。書いてあるからには仏師も使えるんですよ

うけど、まさか奥義を赤の他人に伝授するとも思えません。私はここから仏師には見た技を模倣する能力があると捏造しました。

梟は仏師を猩々と呼び、忍び義手を得物とすることを知っているので、仏師と梟が過去に戦闘したことがあり、その際に梟の大忍び刺しを見て習得したのではないかなあと考察・妄想しました。寄鷹斬りとか習得してるしいけるって。

バックドア

センター試験がんばれ更新

それは、仏師が射命丸の持ち込む新聞を読んでいた時のことだった。

彼女の新聞で使っている文字や文体は時代の移りからか馴染みのないものもあるが、大部分は理解できる。

そうして読み進めていけば、地上の勢力図や地理情報なども断片的にはあるが手に入る。もちろん、情報の供給源をたった一つの媒体に依存することの危険性を理解していない仏師ではないが、それでも仏師は射命丸の書いた新聞はある程度の信はおけると判断していた。

というのも、前に射命丸が直々に他の天狗の新聞を見せにきたことがあったが、それはそれは酷い内容のものだった。内輪受けだけを狙った大げさなテーマに、一目で虚飾と捏造まみれとわかる内容。眉唾の娯楽にすらならない、紙の無駄という

のが仏師の感想だった。一応、それでも前年度の妖怪の山の新聞大会の優勝紙らしい。

翻って考えてみれば、射命丸の書く新聞は上質だ。

そもそも、射命丸の新聞に対するスタンス自体が妖怪の山において異端である。社会性のある天狗という妖怪だからこそ普及した新聞という文化は、元来妖怪の山の内側だけで完結する。なにせ、排他的な天狗たちにとって山の外側の事情など興味もないし、知ったところで何をするものでもない。

それを鑑みれば幻想郷中を駆け回って積極的に取材を繰り返し、裏付けを伴った事実のみを記載する射命丸の文々。新聞はむしろ異質なのだろう。

だが、その異質こそが山の外側では需要を招いていた。このあたりには射命丸自身にもこだわりがあるらしい。わざわざ聞き出そうとは思わないが。

紙面に目を落としていた中で、特に興味を惹いたのはいつの間にか新たに地上で起きていた異変についての記事。

異界に封じられていた恩人を救うため、地底の妖怪が先の間欠泉異変に乗じて地上へと抜けて復活の為に奔走し、それは空を泳ぐ宝船という形で人々の前に姿を現

した。

博麗の巫女らが異変解決に向かうが、その傍らでなんとなく集めていた正体不明の欠片こそが封印を解く術であったという。そうして封印されていた聖人『聖白蓮』は見事復活。白蓮は博麗の巫女との交戦の末、和解。星を連れる船は姿を変え、人里の外れに命蓮寺を建設し、人妖の共存への一助となった。

これがこたびの異変のあらましである。

それを読んだ仏師の感想は、『やはりやってのけたか』というものだ。

かつて一輪らと血の池地獄にて出会ったとき、その瞳の奥に静かに燃ゆる決意の光を見た。故に、必ず彼女たちは目的を果たさだろうという確信があったのだ。しかしまさかこれほど早いとは仏師も思っていなかったが。

それに関してはお空の巻き起こした間欠泉異変を機と見て即座に地上に抜けた彼女たちの英断を褒めるべきだろう。

そういえば、今回の異変の象徴であった空を飛ぶ船は、村紗の所持する聖輦船という名の船舶であり、元来は自在に姿を変える倉らしい。誰もが空飛ぶ船を新鮮な気持ちで追いかけたというから、必然的にその船は地底にあったということだ。

きっと船は村紗と共に千年もの間、地底に封じられていたのだろう。だが、宝船が地底にあればこの上なく目立つはず。しかし思い返してもそんな大きな船を見た記憶は仏師にはない。地底で他の誰かに聞いても、恐らく皆首を横に振るだろう。だが、仏師にはその船の行方に心当たりがあった。

すなわち、血の池地獄である。まさしく村紗はその船を秘密とし、血の池の水底に隠していた。

棄てられた旧地獄、何人も泳ぐことの叶わない赤く濁る池の湖底にある船など、船幽霊である彼女以外の誰が見つけられるだろう。

ともすれば、同じ場所に居合わせていたぬえと一輪もその真実を知らなかったのではないだろうか。

なぜ隠していたのかと考えれば、そんなもの、他の妖怪たちの興味を惹くに決まっている。何より地底は力あるものが全ての世界。頂点に立つ勇儀の統治によって極端な悪行は為されていないが、例えば他の鬼に船を奪われるようなことがあれば、もはや一介の舟幽霊が鬼に敵う道理もない。泣き寝入りするしかなくなってしまうだろう。

そうでなくとも、空を飛ぶ船だ。地底の脱出を目論んでいると見做されて没収、最悪破壊されるおそれもあった。

考えれば考えるほど、村紗の行動が理に適っている事がわかる。

仏師がそれを突き止められた鍵は、彼女の繰り返していたあの意味不明な溺死タイムアタックとやらにある。あの不可解な行動の目的は、他の誰にも気づかれないままに船の調整や維持管理をすること。自分の発言や行動が他人にどう映るかを把握し、己の人柄なら怪しまれないと分かった上での巧みな嘘だった。

事実、偶然に通りがかった仏師にも隠蔽は完璧に行われ、優れた洞察力を持つ仏師を相手に血の池にある船の存在の影も形も掴まなかった。

鬼という種族が一般的に嘘を嫌うことなど、地底で長く暮らす村紗が知らないはずがない。それでも顔色一つ変えずに隠し通したのだから、大した胆力だ。白蓮に救われた彼女もまた、不屈の気概を構えていたのだろう。

一輪と比べて能天気で享樂的に見えた村紗水蜜という妖怪は、脇目も振らず目的の為に手を尽くす、とんだ食わせ者だった。

彼女らとの会話を振り返りながらも新聞を読み進めていけば、命蓮寺を背景に長

髪の尼がインタビューに答えている写真が目に入った。背後には撮影者である射命丸に柄杓で水を掛けようとする村紗と、それを羽交い絞めで抑える一輪が映っている。

肩の荷が下りて柔らかく笑う二人には、青空がよく似合う。この鬱屈とした地底の世界は、彼女たちには少し窮屈だったろう。

そんなことを柄にもなく考えていた時だった。

——その思念の数は、いかに多きかな。

無人の縦穴に、朗々とした声が響いた。人ならざる者の気配。ぞわりと肌が粟立つような悪寒が走る。その感覚の源は仏師の背後からだった。

——我、これを数えんとすれどもその数は沙よりも多し。

振り返ってみれば、扉や障子、襖などが幾重にも重なった状態で忽然と姿を現している。

前触れなく虚空に出現した多層の戸口に目を剥く暇もなく、重なった扉は次々とひとりでに開門していく。

「――生死の去来するは、棚頭の傀儡たり、一線断ゆる時、落落磊磊」

戸の向こうから現れたのは、車椅子に腰かけた七星文様の導師服の女だった。

季節外れな蟬時雨が聞こえる。扉から粉雪を乗せた凍てつく風が吹き抜け、こがね色のイチヨウがこちら側へと運ばれてきた。

「是は、生死に輪廻する人間の有様をたとへ也――」

背後の扉は木漏れ日の差す鬱蒼とした森林へと繋がっていた。重なる奥の扉の先には秋めく紅葉の絨毯や、処女雪の降り積もった白銀の世界、綿のような雲が浮かぶ青空に、茜色の夕焼けに照らされた木造家屋の並びなど、扉を一つ隔てるたびに位置も時節も超越した景色が広がっていた。

長く伸ばされた山吹色の髪が、四季の風を受けてふわりと広がる。

「ただし仏師、テーマはダメだ」

導師は仏師を指差して声高々に宣言した。



「さて。我こそは摩多羅またら隱岐奈。秘められたる神ぞ」

名乗りを上げた不遜な導師は、小さな笑みを口元に湛えて車椅子の肘掛けに体重を預けた。

たちまち、周囲に莊嚴で思わず口を慎んで祈りを捧げたくなるような気配が醸し出される。

彼女が纏うこの何物にも例えようのない神秘的な空気感は、いつぞやに洩矢諏訪子と対峙したときにも感じたものだった。

「……その秘められたる神とやらが、こんな僻地に何の用じゃ」

「うん。私はお前に会いに来た。遠路はるばる後ろ戸の国から出張してきたんだぞ。手厚く迎えろ」

「ほう、儂に。じゃが、生憎とここは大地の裏側でな。悪いが茶の一つも出せん」
「えー？ 摩多羅そういうのちょっとどうかと思うな。甘味とかないの？」

「……神さんに供えられるようなものはない」

「そんなあ」

隱岐奈は傲岸とした態度を崩し、威嚴ある神らしからぬ気の抜けた返事を寄越

す。辺りに満ちていた緊張感も、同時に霧散してしまった。

「むう……。仕方ない、許そう。なにせこの摩多羅、懐の深さには定評がある。この程度でご機嫌斜めにはならんのだ」

先触れのない唐突な来訪だったが、どうやら奉じられる供物には期待を大にしていたらしい。隠岐奈は登場時と比べて露骨にテンションが下がっていた。

諏訪子の時にも思ったことだが、神というのは意外にも堅苦しい態度を崩してフランクに接してくることがある。二面性があると言えいいのか、相對する者としては対応に困る部分でもあった。

「大層な神とお見受けする。繰り返すが、儂に何の用じゃ。見ての通り、儂は両手を合わせて拝むこともできん身の上じゃが」

「構わん。拝むだけが信仰の在り方ではないからな」

隠岐奈は縦穴に丹念に彫り込まれた仏像を一瞥した。

摩多羅隠岐奈は神であり、他者の関心の向き方も実に神らしいものである。すなわち、自らを敬うものには懐が深く、そうではない者に対しては容赦がない。

仏師は仏像を彫り続けているが、仏教の信徒という訳ではなかった。経のひとつ

も諳んじることとはできないし、教典の教えが何を意味するかを学んだことも無い。それでも仏を彫るのは、慈悲を感じるその姿に怨嗟からの救いを見出したからだった。

教えは知らずとも、仏師は神仏に対しては分け隔てなく信心深い。特に良いのは仏師が特別に一つの神にこだわっているわけではないという点。それを理解する隠岐奈は、多少恭しさに欠ける仏師の言葉遣いにも気を悪くすることはなかった。

言葉遣いは人と人が誤解なく意思を疎通するのに重要な要素ではあるが、神がその裏側にある信仰に気づけぬのでは話にならない。

少なくとも、言葉だけに頼らずとも仏師の信心深さを証明するものはそこ中に形になって彫られている。信仰の形は数あれど、雑念のないひたむきな信仰を向けられて悪い気のする神などいようはずもない。

「しかし何の用かと聞かれれば、本当に顔を見に来たというだけなんだが」

隠岐奈は、首をひねりながら言葉を探していた。理由は既に決まっているものの、如何にそれを伝えようかを迷っている様子だった。

「……まあ、言葉を飾る意味もないか。私も一端の管理者でな、うん。投げっぱな

しというのは性に合わんのだ」

何か吹っ切れたのか、隠岐奈はパンと両手を叩いたのを拍子に考えるのをやめ、仏師に向き直った。合わせた隠岐奈の瞳は、暁の様な色をしていた。

「この摩多羅が告げよう。お前を幻想郷に招いたのはこの私だ」

それは、威風堂々たる宣言だった。

突拍子こそないが、決して聞き流せる言葉ではない。

「それは……」

「ちゃんと説明してやる。要するに——殺りすぎたんだ、お前はな」

これはつまり、隠岐奈がこの場に現われる際に告げた文言の要約だった。

「たったいっぺん死んだ程度でチャラになるほど、お前に降り積もった怨嗟の炎は甘っちょろくないんだよ。たった一人の人間の怨念が千年を越えて影響を及ぼす時さえあるというのに、お前は数百幾千の人間の怨みを一身に受け続けた。そうだな？」

人が死ねば、それまで積み上げたものは無に帰す。背負った罪を地獄で濯ぎ、再びまっさらな魂として生を繰り返す。それが命あるものが本来辿るべき道だ。

だが仏師にそうはならなかった。修羅としての一面と降り積もった怨嗟の炎が命の導を歪め、生命のあるべき形から外れてしまったのだ。

「だから葦名には後々まで器を失い行き場のなくした強烈な怨念がふらついていた。まったく物騒なことこの上ない。だが、捨てる神あれば拾う神ありとも言いうろう？」

「……つまり、儂はお前さんに拾われたと」

「そうなる。言っておくが、ここ最近でこの摩多羅ダントツの大仕事だったからな。感謝しろよ」

「身に覚えはないが……。じゃが、世話になったのは確からしい。礼は言わせてもらおう」

狼に見事殺されたはずが、知らぬうちに幻想郷の地底にて目が覚めていた。いくら考えようと答えの見つからない謎だったが故に、気にすることもなく過ごしていたが、まさかその主犯から直接答えを得ようとは。

要因は数あれど、仏師が幻想郷にいる理由の大部分は目の前の神が占めているようだった。

「まあ放っておいたってここに迷い込んだとは思うがな。でもどうせなら自分で面倒を見た方が心配がないじゃん？」

隠岐奈は周到で抜け目なく、最後の詰めを怠ることのない人物である。脅威を過小評価せず、重要度を見誤らない慧眼は本物だった。

「怨念だけ引きはがして別の妖怪にしても良かったが、いたずらに力を振り撒き始めたらと思うと始末が面倒くさい。だったら、初めからお前に手綱を握らせたほうが百倍早いしマシだろう。そういう訳で火の面倒はお前に任せた。まあ、星の巡り合わせが悪かったと思って諦めてくれ」

「もとより儂の背負った因果よ。今更泣き言など吐きはせん」

「結構。実をいうと、恨み言のひとつくらいは覚悟していたんだがな」

「そんな真似は到底できん。顔向けできなくなる」

誰に——とは、隠岐奈は聞かなかった。構わず、話を進める。

「そもそも私が出張ったのも表の管理人が寝坊助なのが悪い。今は冬眠の時期なんだ。しかし部下に任すにしても、うちのも向こうのもまだまだ危なっかしくてねえ。結界をダメにされたら手間だから、仕方なくこの摩多羅が直々に手引きした」

「お前さんは、幻想郷の管理人なのか」

「裏の、と頭に付くがね。ついでに言うところの幻想を創り上げた賢者の一人でもある」

口ぶりからしてかなり位の高い人物ではあると思っていたが、まさか幻想郷の歴史の核心に迫るほどの大物だとは仏師も想像していなかった。

隔絶された秘境を作るのに、どれほどの力が必要なのか想像もつかない。だが、会話の端々にその力の片鱗が垣間見える。時空を超越した扉の構築もそうだが、怨念を別の妖怪に変えるという発言もあった。人の領域を超えた権能を気軽に振るまう姿を見ると、この神はひょっとしたら何でもできてしまうのではという、力の果てを見通せぬがゆえの恐れさえ仏師は抱いていた。

そういえば幻想郷の管理人については、僅かながらも過去にさとの口から聞いたことがあった。といっても、それは何やら胡散臭いらしいということや、大変頭が切れるといった実に断片的な情報しかないもの。そして、どうやら冬眠をするらしいという情報も追加された。

隠岐奈の言う裏というのは、きつと能力を駆使して人知れず暗躍するその働きぶ

りを指しての事だろう。

「なんなら普通はこんな風に姿を現さないんだぞ。レアキャラだ、レアキャラ。せつかくだから崇めておくといい」

「ああ。この出会いは僥倖じゃった」

「おや」

これ見よがしに両手を大に広げて見せる隠岐奈に、仏師は首肯した。

自分でやっておきながら本当に崇められると思っていなかった隠岐奈は、素直に感謝の念を伝える仏師の姿に一層気を良くした様子だった。

仏師は何も隠岐奈の太鼓持ちをしている訳ではない。全ての言動は本心から来るものだ。

彼女の手にならず怨嗟の声が別の形で具現していれば、ひょっとすると怨嗟の炎がこの地を襲っていたかもしれない。そんな仮定は、隠岐奈の言動を鑑みるにきつと杞憂にしか過ぎないのだろう。彼女の力を以てすれば、怨嗟の暴走程度、鎧袖一触に違いない。

だがやはり、自分の宿痾が他人の生を脅かすなどあってはならないこと。己の業

はやはり己で決着を着けるべきだ。

一度は狼に委ねた火の始末。今度は己で果たさねばなるまい。

隠岐奈に自身の身の上を聞かされた上で決意を新たにする仏師だったが、隠岐奈はそれを知ってか知らずか、上機嫌なのも相まってマイペースさに磨きがかかっていた。

彼女の秘神としての性質を鑑みれば、きっと人前に姿を現すのも久方ぶりだったのだろう。

「お前とは良い縁が結べそうだ。親しみを込めて特別に私をおっきーと呼んでもいいぞ☆」

「……」

「なんか言えよ」

そんなご機嫌な隠岐奈から送られたあざとくも可愛らしい渾身のウィンクを、仏師は無慈悲にもスルーした。

「まったくもう、この摩多羅の言葉を無視するとは見た目に違わず不遜なやつ。相手が寛容という言葉に脊髄と脳が癒着して這いずり回っているような存在であると

ころのこの摩多羅だからよかったものの、他の神が相手なら一発アウトだからな？」

隠岐奈はそう言っているが、浮かべた笑みに一切の曇りはない。今の隠岐奈は無敵だった。

近ごろ不思議と神と縁が繋がることが多いが、仏師から神との邂逅を望んだことなどない。常に向こうから勝手に出現して好き勝手にいくだけだった。

この摩多羅隠岐奈という神は厳かで力ある神を演出しつつも、天真爛漫な童子の如き一面も覗かせる。振舞いが二転三転するので仏師は着いていくだけでも一苦劳だった。

「惜しいなあ。部下にしたいくらいなんだが、いかんせんデカイ。もしお前を部下にしたらと思うと戸を開くとき絶対面倒くさいぞ」

「……そうか」

自身の体躯の大きさが初めて役に立った瞬間だった。この神の部下など、どう転んでも気苦労が絶えないであろう。まして、幻想郷の管理者という重要な役職でもある。忙殺されるのが目に見えていた。仏師が望むのは、ただ仏を彫ることに没頭

できる日々である。

「うん？ おいおい、随分素敵なものがあるじゃないか」

不意にそう言った隠岐奈は、山の神の片割れを象った首の無い像を見つけたように、椅子の車輪を回してすいすいと近づいていった。車椅子は当然のようにひとりでに車輪が回っている。

「いいねいいね、何がいいって首がない」

隠岐奈はその像を上から下までじろじろと眺め、満足そうにそう言った。

彼女の言う通り、その像は博麗の巫女との戦闘で首から上が大破していた。神を祀る像としては、かなり問題のある姿である。

「ちよいと失礼」

隠岐奈はそう言いながら像に手を翳し、衣服にあたる部分に七つに連なる星を刻んだ。

像から少し離れ、改めて全貌を確認した隠岐奈は、それを見てうんうんと頷き、ご満悦といった風の表情を浮かべた。

「これでこの像は山の神かもしれないし、摩多羅神かもしれない像になった」

一見すると意味の分からない発言のようだが、言われてみれば確かにその通りである。今までこれが洩矢諏訪子の像であると認識できていたのは、ひとえに製作者である仏師がそう作ったからである。

だが今、別の存在によって手が加えられ、新しいモチーフが追加された。

他に諏訪子を知るものが見れば、すぐに諏訪子を象ったものと分かるだろうが、胸に刻まれた七星を目にしたとき確信を持てなくなって首を傾げるだろう。

「するとどうなると思う？ 摩多羅隠岐奈は、山の神かもしれないと、そうなるわけだ。この像を見るに、ひょっとしたら蛇を従えるかもしれない？」

そう告げれば、かつて諏訪子がそうしたようにたちまち白蛇が地中を割いて姿を現し、そのこうべを隠岐奈へと垂れた。

「……驚いたな」

「習合はこの摩多羅の独壇場故な。なに、信仰と権能を奪ったわけではないよ。この像は紛れもなく山の神の像であるからな。ただ、その姿にこの摩多羅の影が重なったというだけの話」

眉睡な理屈だが、実際にそれがまかり通っている。神というのは、人とも妖怪と

も異なる不可思議な理屈で存在しているらしい。それを強く感じる出来事であった。

頭を差し出す白蛇の額を隠岐奈が優しく撫でると、瞬く間に蛇の体表の色が毒々しい斑点模様に変わる。

隠岐奈はその大蛇を自身の身体に絡めるように這わせ、真剣な面持ちで仏師の方を向いて言った。

「じゃーん。まだら模様のまたら」

「……」

「笑えよ。ウィットに富んだ秘神ジョークだぞ」

「……お前さん、ひょっとして冗句の才能が無いんじゃないか」

そんな下らない冗句の為にまだら模様にされてしまった蛇が憐れで仕方がない仏師だった。服を着た理不尽とはこの隠岐奈のことである。

「なんでそんなひどい事言うの。摩多羅べつに神だからとか関係なく本気で泣くよ？」

「泣きたいのはお前さんに塗り替えられたその蛇じゃろうて」

見れば蛇は隠岐奈に責めるような視線を送っていた。しょうもない一発ジョークをする為に純白の体表を奇怪な警戒色に変えられたのだから当然の権利でもある。そんな蛇のつぶらな瞳と目の合ってしまった隠岐奈は、気まずそうにさっと目を逸らした。

「ま、マタラコトバワカラナイ」

「……………ハア」

旗色が悪いと見るや否や子供じみた雑な方法で乗り切る隠岐奈に、仏師は突っ込む気にもなれず深い深いため息をついた。この神と付き合っていると本当に気が疲れて仕方がない。

そんな仏師を見て隠岐奈は拳を後頭部に当て、ぺろりと舌を出していた。お茶目な一面でも演出しているつもりなのだろうか。仏師は重ねてため息をついた。

「お前さんほどの強力な神が、今更こんな辺境の小さな像に頼らねばならないようには思えんが」

「摩多羅も神だからな。秘められていようと存在証明は必要なのさ。よくわからない神がいる。それでいい」

「……結局、お前さんは何の神なんじゃ」

それは、初めて出会った時から抱いていた疑問だった。諏訪子はわかりやすく崇り神であったが、この隠岐奈に関してはとんと見当がつかない。初めに秘められた神とは名乗っていたが、それだけでは何のヒントにもならなかった。

「何の神かと問われれば、そうさな。後ろ戸の神、障碍の神、能楽の神、地母神、星の神、被差別民の神、あとなんだっけ……まあ、いろいろだよ」

「……多いな」

「まあね」

司る領域が多岐に渡る神はいる。だが、隠岐奈の語るそれはあまりにも節操がなく、共通点がなかった。果たして、一人の神がこれほど多面的な要素を司ることなどあるのだろうか。

「覆い隠された神秘が、お前さんのルーツということか」

「それは違う。別にこの摩多羅は初めから何も隠しちゃあいないのさ。ただ、秘密を暴けば暴くほどより多くの謎が明らかになる。不思議を知れば知るほどに、新たな未知が芽を出す。そうして深まり続ける朦朧な空漠こそが、この摩多羅の本質よ。」

だから我が正体は誰も知らない。我が身は汲めど尽きせぬ未知の泉ゆえな」

摩多羅隱岐奈は、その正体を見ることも聞くことも許されない、究極の絶対秘神である。だが、それは隠れている事と同義ではない。誰も知らない神は、神でいられなくなってしまふ。神というものは集まる信仰心、ひいてはその知名度が力の強さを決定するといっても過言ではない。隠岐奈は誰も知らないながらに力を集める稀有な神であった。

摩多羅隱岐奈は、常にすべてを見せている神だった。何も飾らないありのままの姿は、習合した神々の混沌そのもの。力の秘密はそこにあるだろう。気づきは常に手の届くところにある。しかし混沌は深く、迂闊に知れば智慧が溶けてしまうかもしれない。だからこそその秘神である。

「さて、顔を見るだけのはずがつい長居してしまったな。私はここいらでお暇しよう」

「そうか」

「別れをもっと惜しめ。それ秘神ジャッジだともう落第点だからな」

「そうか」

望むところだった。氣に入られる分には構わないが、それが高じて部下にされてしまつてはたまつたものではない。程よい距離感を保つべきだ。

その会話を最後に、摩多羅が視線を外して虚空へと向かう。その先には、出迎えるように再び重層の扉が出現した。仏師に背を向けたまま車椅子を進める隠岐奈が、振り返ることもなく口を開く。

「鏡を看よといふは、反省を促すの語也。されどまことに反省し得るもの、幾人ぞ。人は鏡の前に、自ら恃み、自ら負ふことありとも、遂に反省することなかるべし。鏡は悟りの具ならず、迷いの具なり」

既に隠岐奈の纏う雰囲気は変わっていた。放たれる神威は、謂れある神に相応しいものだ。

「お前、その仏を鏡に見立てているだろう。鏡じゃあ悟りには至らん。仏を彫る意味、ゆめゆめ考え直すことだね」

隠岐奈の言葉は、今の仏師にはまさしく凶星であった。

神から授けられたありがたいお言葉である。仏師は素直に受け取り咀嚼すること

にした。

重なる扉が、誰の手を借りることも無く次々と開かれてゆく。

隠岐奈は仏師を一瞥することもなく、木枯らしに揺れる桜吹雪を受けながら扉の奥に車椅子を進めていった。隠岐奈の通った戸はやがて扉がゆっくりと閉じてゆく――が、その動きは半端な位置で止まった。

仏師が戸の様子を怪訝に思うと同時に、僅かに開いたままの戸の隙間からひょこりと隠岐奈が顔を覗かせた。

「次まではちゃんとなんかおいしいやつ用意しておくんだぞ」

それだけ言い残すと、隠岐奈は今度こそ戸の向こう側に姿を消し、後を追うように閉じた扉は色を失って無くなった。

「……次があるのか」

誰もいなくなった縦穴の底。ひとり、仏師はそうぼやいた。

後日、酒の代わりに茶菓子を持ってきてくれと頼まれた射命丸が驚くのは、また別の話。

星蓮船の話かと思っただか？ おつきーなだよ！

東方は星蓮船と神靈廟でいったん離れた人が多い印象なので、隠岐奈を知らないという方もいたかもしれませんが、可愛いので信仰しましょうね（宣教師）

ところで周りのみんなが白蓮復活の為に奔走するなか、通りすがっただけで巫女にボコボコにされた傘の付喪神がいるらしい。

そしてこれは本編とは何ら関わりの無いアンケート

地底の花

SEKIROのサントラ発売記念の更新です

妖怪の山、天狗の集落、その片隅に射命丸の住まいがある。

その一室、執筆部屋にしては広すぎるこの場合は、もとは修練の為に設計された空間だった。だが今や部屋はインクの匂いに満ち、印刷設備がところ狭しと並び床一面には没原稿が床を埋め尽くすように散乱するありさま。

悲しいかな、家主の趣向ゆえ本来の用途で使われることのない部屋だ。

射命丸は、これから妖怪の山、天狗としての務めがある。

服装もそれに合わせ、取材活動に赴くときは異なる形式だったものを纏っていた。

しかし、交代の時間までもう少しある。そんな暇を持て余す隙間の時間の使い道

を考えているときに、ふと部屋の隅の丸めたポスターなどと一緒くたに立てられた刀が目に入った。

それを無造作に引き抜けば、埃が煙のように舞い上がった。

何十年そこにあつたのか、鞘に施された流麗な装飾は隅々まで錆びついており、本来の輝きはもはや見る影もない。

「刀なんていづりかしら」

はて、最後に握ったのはいつだったか。思い出せぬほどには遠い日のことだ。

射命丸は戦闘の手段を、風を操る能力と、それを助けとした体術に頼っている。刀を使うことはまずなかった。

しかし使えないかといえば、そうでもない。

むしろその技量は高位のものと断じてよいだろう。刀一本あれば、毎日せっせと鍛錬に励む哨戒天狗などたやすくあしらえる領域にある。

無論、そんなことを人に教える射命丸ではない。別に刀などなくともよいのだ、理由も無いので、今日の様な気まぐれでもない限り、射命丸に刀を握る機会はずっと訪れなかった。

射命丸が鞘から刀を僅かに抜けば、水に濡れたように艶やかな白い刀身が垣間見える。天狗の刀は妖怪の打った妖刀。手入れは施されずとも、その切れ味に濁りはない。

脳裏に描くのは、かの鬼が放った奥義。

この世が束の間、剣を振るわれた事実を認識できないほどの太刀。

速さを追い求めれば人はあそこまで辿り着く。射命丸もまた、鬼の語った人の幻想に魅せられていた。

壁際に転がしておいた丸太を部屋の中央に立てる。丸太は何らかの修行の為にこの部屋にずっとあったものだ。部屋が広いことでこれ幸いと端に追いやったまま処分することもなく放置していた。的にするには都合良いだろう。

射命丸が、丸太の前で刀を居合の型に構える。

腰を落として余分な力を全て抜く。じっと目を瞑り黙考。

瞑想だ。斬る前に、己と向き合う。

雑念を捨てる。迷いを捨てる。

ただ斬ること。心を、そのみに置く。

刀の一本を傍らに国をも平らげた。その男の名は。

「一心」

抜刀。剣閃。納刀。

それら全てが、瞬き一つの内に完遂される。

丸太の幹には白銀の十文字が開花していた。床に敷き詰められた原稿用紙が、嵐に遭ったように遅れて巻き上がる。

鴉天狗の誇る速度に、更に風を上乗せした超高速の葦名十文字。

風の衣を纏った斬撃は刃渡りを超えて届き、大黒柱のように太い丸太を四等分に割った。

たとえ防いだとて、この斬撃は如何なる防御をも貫くだろう。躲すことも防ぐことも敵わない。まさに必殺の技と呼ぶにふさわしい代物だった。

「ぜんぜんダメね」

だが、及ばない。

あの鬼が披露したような、剣に生きた生涯を余すことなく体现する技の足元にも及んでいない。

かの奥義は速き事を限りなく追い求め、飽くなき執心の果てこの世の理を一つ突き抜けた。

振るわれた太刀が現在という時間軸を超え、ミ未来にあるミのだ。

刀を振ったのち幾許の時を経ることで、時の向こう側で待ち受けていた斬撃がようやくと姿を現す。

それがあの奥義の真相。

そも、剣の残像が残っているようでは話にならない。

天狗の臂力を用いて妖刀に風を乗せてもなお届かない。

かの鬼は柔らかい土を鞘に見立て、腕の一本だった。使った刀も豆腐を斬れるかさえ怪しい、刃物と呼ぶのもおこがましいもの。

「やめやめ。柄じゃないわ」

つまり、あれは特別な能力に起因するものではなく、狂気に身を浸したような妄執の末にたどり着いた純然たる奥義ということだ。

こんな遊び半分で真似たところで、その影すら踏めないのが当たり前。

丸太を寝かせ、刀ともども部屋の隅に放り出す。

まあ、丁度いい暇つぶしくらいにはなっただろう。射命丸がそう思ったあたりで、部屋に風を感じた。

妙だ。戸は閉じてあったはず。怪訝に思って風の流れてきた方へ視線をやると

――部下と目が合った。

「今の、葦名流ですよね」

犬走栞。無愛想な白狼天狗。彼女は、射命丸を瞬きひとつせずに見ていた。

「……も、栞？　いつからそこに？」

「先ほど。今の、葦名流の技ですよね」

「連絡のためとはいえ、上司の家に断りも無く上がるなんて――」

「教えてください」

だめだ。まるで聞く耳を持っていない。

物音ひとつ立てずに部屋へと踏み入り、ずずいと距離を詰めてくる。

まるで、ずしりと重い地蔵に詰め寄せられたような圧迫感。

栞は物静かではあるものの、その内面は控えめなとは言いがたく、行動にも物言いに実直で太い芯が通っている。このちっとも面白みがない天狗が射命丸は苦手

だった。

「葦名十文字とは違いますよね。よく似ているけれど、別のもの。誰に習ったんですか。伝書には記されていませんでしたか」

葦名十文字は居合切りの形から最速最短の軌道で切っ先を振り戻して二の撃を見舞う剣技。対する射命丸の先ほどの剣は正十字を描いたものだった。

「技なんて立派なものじゃないわよ。ただの戯れ……」

「いえ、明らかに葦名流の流れを汲んだ技でした。そして、誰かの剣の影を追っている」

剣に関わることで、この剣術バカの間をこまかすことは出来ないか。射命丸は内心で歯噛みする。

犬走栞は、初めに葦名流の伝書を読み解いた天狗だった。

彼女はかつて剣と盾とを持っていたが、葦名流の伝書を読んだ日その盾を置いた。戦に勝つ。そのために盾は必要のないものだった。左腕は右手と共に剣を握るためにあるべきだ。彼女はそう結論付け、今は分厚い大刃の片手剣のみを得物としている。

椛の剣は片手で使うことを前提としたものではあるが、両手で扱うことに不都合はない。

斬る。思考をそれ一色に染めた彼女は純粹に強く、葦名流の教えは自然と他の天狗にも広がっていった。

情報は宝だ。無闇に人に話すようなことはしたくないが、規則に厳格な椛が半ば礼を失してまで先輩の家に踏み入っているほどだ。こうなった椛はもう梃子でも動かないだろう。射命丸は観念して口を開いた。

「往年の葦名一心と立ち合ったって奴と話したのよ」

「……」

椛の瞳が静かに揺れる。

「葦名流はあくまで葦名一心が葦名衆の為に洗練した教え。一心本人の剣技は葦名流とは別のところにあるって話」

相槌も感嘆の声も上げない。ただ、続きを促すような力強い視線が送られる。

「葦名無心流っていうのがあるそうよ」

「葦名、無心流……」

「中身はさっぱりだけどね。当然伝書の在り処も不明。失われたと考えるのが妥当でしょうね」

となれば、もはやその書を読むことは当然叶わない。

それでもその全貌を知るものがあるとすれば、それは生きた一心と切り結んだ者のみに限られるだろう。

そして、そうした人物が地底に一人いる。

「その方は、どちらに」

「地底に仏を彫ってる偏屈な鬼がいるわ。命が惜しくなけりゃ行ってみれば？」

「ありがとうございます」

頭を下げた椀が、淀みの無い動作で部屋を出る。あの様子では、その足でそのまま地底に赴くつもりだろう。

さて。あのへそ曲がりの鬼が、馬鹿正直に教えてと請うだけで口を割るだろうか。射命丸はそうは思わなかった。



ずっと暗い縦穴の底に、一輪の花が咲いた。

遙か高くから差し込む僅かな地上の光を、僅かでも逃すまいと懸命に花を開き、弱弱しい地上の光を余すところなく全身で受けている。

いつぞやに落ちた天邪鬼のものか、それとも天狗の風に運ばれたか、不幸にも神の後ろ戸を越えたか。因果はともあれ、この不幸な植物はその美しい姿にそぐわない僻地に根を下ろしていた。

いっそ生まれるべきではなかった。そう思えてしまうほどにこの花は過酷な生まれだった。

「かすかな声に耳を澄ませて歩いてみれば、辛気臭いところに来てしまったわ」
そんな花の咲く縦穴の底に、柔らかな女の声が響く。

冷たい地底にふわりと降り立ったのは、日傘を携えた緑髪の女。赤いチェック柄のスカーツが鮮やかだった。

「鬼って実在したのね」

日傘の女はまず花を見て、そのあと同じく地の底に腰を下ろす鬼を捉えた。興味

深げな視線を向けられた仏師は、仏を彫る手を止めぬまま不躰に答える。

「ここにお前さんの思う鬼はおらん。儂は、ただの仏を彫るだけの妖怪じゃ」

「あら、奇遇ね。私もただの花を愛でるだけの妖怪なの」

類稀なる強者の風格。互いがそれを感じ取りながらも、交わされた言葉は拍子抜けするほどに穏便なもの。

きつと、どちらも嘘は言っていないのだろう。けれども、戦いに身を置く者には特有の雰囲気というのがある。

二人の醸し出す恐ろしく研ぎ澄まされた威風は、仏を彫るだけの妖怪と花を愛でるだけの妖怪という二つ名にはあまりに不釣り合いだった。

日傘の女の関心は、仏を彫る鬼よりも地底の花に向いている。

「ねえ、その花はあなたが？」

「いいや」

「そう。でも周りの土が柔らかいわ」

花の側に寄り、屈んで土に触れた日傘の女が言う。

何もしていいとは言えないものの、気を使っていないわけではないらしい。日傘の

女はそう察した。

仏師は振り返ることも無く、仏を彫りながら口を開く。

「無益な殺生には、もう飽いたのよ」

「例え、それが花でも？」

「命ってのは、貴いもんだ。人も花も同じにな」

「鬼が言うには、少し滑稽な台詞だと思うわ」

「仏を彫る鬼に、何をいまさら」

「それもそうね」

日傘の女は仏師との会話に興じながら、ただ懸命に生を全うせんとする花を慈しんでいた。

女は物言わず、ただ花を静かに眺め続けていた。花を愛でる妖怪という言葉に偽りはないらしい。

仏師も気兼ねることなく、仏を彫り進める。

地底には仏師が仏を彫る音だけが鳴り、吹き抜ける風が花と女の髪を揺らす。

そんな時間が、しばし続いた。

どれだけそうしていただろうか。

無窮に思える閑寂とした空気を終わらせたのは、仏師の方だった。

「そいつも運が無い。こんな場所に花を開いちまって」

それは、仏師が花がこの地底に芽出した時から思っている事だった。

日傘の女はそんな仏師の言葉に、優しく吟じるように声を返す。

「それでも咲くのが花なのよ」

「……美しい花も、見るのが鬼一匹だけではない」

仏師の美しいという言葉は、その花の見てくれだけを指してのことではない。

醜悪な鬼と、血の通わない仏像だけが立ち並ぶこの大地の底で、この花は力一杯に生命を謳歌している。

意思の無い植物なのだから、置かれた場所で咲くのは当たり前のことだ。

何の感慨もなく、ただそうした構造の生命体として、無感動に動作して絡繰りのように花を開いているだけ。

——本当にそうか？

仏を彫る傍らで、仏師はそう思った。

仏師には、この陽の届かない地底で硬く枯れた土に根を張って命を訴えるこの花が、本当にただそれだけの存在にはどうしても思えなかったのだ。

「悪い気はしないけどね」

「……何？」

「花がそう言ってるのよ」

思わず仏師が女の方に視線をやる。揶揄ったわけでも、戯けたわけでもないらしい。

女は頭の螺子の緩い手合いにも見えない。順当に考えれば、彼女は花の声を聴く力を持っているということになるか。

「貴方で良かったわ」

日傘の女が、すくりと立ち上がる。

「この花の一生を見届けるのが、貴方で良かった」

「……フン、どうだか」

「花が良いって言うてるから良いのよ」

仏師と日傘の女とはまだ、ほんの僅かにしか言葉を交わしていない。それでも日

傘の女はこのおぞましい風貌の大鬼に一定の信頼を寄せているようだった。

なぜか。聞いたからだ。

彼女はずっと耳を傾けていた。

日傘の女は、ここに来てこの鬼がどんな人となりで、どのような人当りなのかを懇切丁寧に語る花の声にずっと応えていた。

「もう行くわ。その花、大切になさい」

ふわりと、日傘の女が地から足を放す。初めにここに来た時のように身体を浮遊させていた。

「……保証はできんな」

「別に心配してないわ」

そう言い残して、日傘の女は綿毛が風に運ばれるようにあっという間に地上へと姿を消してしまった。

妖怪にもいろんな性格の者がいる。あれは強い妖怪だった。一目見るまでもなく仏師はそれを感じ取った。

強くとも、だからこそ優雅な妖怪がいる。彼女は強い妖怪であり、それとは何の

関係も無くただ花をこよなく愛する妖怪だった。

今日は、客人の多い日だ。

彼女は静かな妖怪だった。そして、力の意味を弁えている。ここに来るのもそうした妖怪ばかりであつたらまだ歓迎する気も起きようものだが……中々そうもいかないらしい。

手にある短刀を鋭く投擲しながら、仏師はそう思った。

「ッ！」

「そこで止まりな。……花が潰れちまう」

不躰な雑踏を制止する。

微に入り細を穿つ一矢は鋭くも一切の風を生まず、側に咲く花の花卉を散らすことはなかった。

日傘の女と入れ違うように訪れたのは、白い狼のような女。地獄街道の方からやってきた。山の昇降機を使ってここに來たらしい。

「葦名一心と刀を合わせた鬼とは、あなたのことですか」

「フン……」

単刀直入とはまさにこのことだ。揺らぎの無い視線や規則正しい身のこなしから感じた第一印象通り。いかにもな武人らしい実直な性格と見える。

「儂に話すことはない」

そして頑固だ。これは相当に面倒な類の輩に絡まれた。これならさとりの相手をする方がよっぽどマシだろう。さとりが聞いたら憤激しそうなことを仏師は考えていた。

「もう一度聞きます。葦名一心と刀を合わせた鬼とは、あなたのことですか」

「だったら、どうだってんだ」

言葉を返しながら、仏師が蜘蛛の糸を手繰って土に刺さった短刀を遠間から引き抜く。その滑らかな技巧に思わず瞠目しつつも白い狼の妖怪が言葉を紡ぐ。

「その剣技を、教えてください」

「知ってどうする」

「ただ、極めたいのです」

人斬りか。いや、ただ技を磨くことを至上とする手合いに見える。仏師は相手の佇まいを観察し、彼女がどういう性質の存在なのかを推察していた。

だが、どうであろうと関係ない。仏師には、わざわざ彼女の相手をしてやる義理は無かった。

「帰りな。儂は、仏を彫るのに忙しい」

「……わかりました」

意外や意外、白い狼は初めの頑固さが嘘のように仏師の言葉に首肯し、踵を返した。

……だが、本当に意外だったのは翌日もこの妖怪が姿を現したことだった。

「葦名一心の剣を教えてください」

「……出直しな」

「わかりました」

頑固で馬鹿正直であるという第一印象は、いっそ清々しいまでに的中していた。この白い狼の妖怪は来る日も来る日もこの地底に訪れ、一心の剣を教えろと宣ってくる。帰れと言え、はいわかりましたと頷いて帰っていく。ただし、明日も訪れるが。

ひょっとしなくても、この白い狼の妖怪は仏師が教えるまで性懲りも無くこの地

底まで足を運ぶ気なのだろう。

だが、仏師の気が変わることもない。例え良い酒を持ち込まれたとて同じことだ。仏師にとって一心との戦いの記憶は、自らのうちに宿る特別なもの。おいそれと人に話すものでもない。勇儀に話したのは、彼女のひたむきな鬼という種族の宿命を背負った想いに応えるため。

だからこそ、偶然に居合わせた射命丸は幸運以外の何物でもなかった。

仏師が使命も意味もない者に、一心の剣をひけらかすはずも無し。白い狼と仏師の会話はずっと平行線を辿っていた。

けれど、それはある日を境に事情が変わった。



「葦名一心の剣を教えてください」

何十と繰り返された常套句。そして、断ると言い返されて家に帰るまでが一連の流れだ。

だが、今日の仏師から返ってくる言葉は違っていた。

「そこに、一輪の花が咲いているじゃろう」

「咲いています」

椀が初めて訪れた日からそこにある花だ。いつも高潔に花卉を開いていた花だが……今日はどうか、病に罹ったように頭を垂れていた。

「そいつの面倒を、お前さんに任せる」

「……私に？」

「儂の手は、花に触れるには少し血に汚れすぎた。そいつが天寿を全うできたら、剣を教えてやってもいい」

椀に花の面倒など見たことも無い。植えたことも、水をやったことだってない。

だが、ようやく与えられた機会。棒に振るわけにもいかない。

「……やります」

『剣術バカに新たな趣味!? 盾を置いて持ったのはスコップだった!』

後日、妖怪の山で難しい顔をしてガーデニングの本を注視する犬走椀を大見出

しに写した新聞が流布された。

たまにはこんなとぼけた話でもいかがでしょう

救いの担い手

2020年10月29日のSEKIROver1.05アップデート記念更新です
(激遅)

「……」

妖怪の山から繋がる地の底への道行き。その最奥には、仏を彫る鬼がいる。そんな断片的な風聞だけを頼りに、おっかなびっくりここまでやって来た。底抜けに明るい、退廃的な旧地獄街道を抜け大橋を渡ってからしばらく。やがて辿り着いたのは閑寂とした穴の底。

そこには、屍の山に火を付けて焼いたような後ろ姿があった。

「……鼠が、もう一匹」

その背中から聴こえてくるのは、低く唸るようなしやがれ声。

思わず、じり、と一歩引き下がる。無意識のうちの行動だった。

「口を開いては生きる意味を説き、右へ左へ足を運びながら善くあれと宣いながら、その癖誰より生き汚い」

鬼は僅かに振り向いた。骸のように骨ばった体軀は灰塵のように白く、こちらを射抜く眼窩に光はない。夜より遙かに暗い闇だけがあつた。

小脇から小ねずみが慌ただしく駆け抜けていく。何かの間違いか、私より一足早くここに迷い込んだのだろう。

気に掛ける余裕など、今の私にはとてもなかった。

「儂の知る仏僧とはそういう連中よ。お前さんは、どうだかな」

「……私は、地上の命蓮寺が僧侶。聖白蓮と申します」

威容に気圧されつつも、それに負けじと毅然と名乗りを上げる。

相對するだけで肌がひりつく。声が震えなかったのは、ほんの偶然。

今まで数多のあやかしを目にしてきた。いや、目にしてきただけではない。会って話し、声を聴き、あるいは襲われた。

音に聞く大妖怪や、人の血を啜って生きる凶悪な妖怪と相對したことも何度もあつた。

私はそうした妖怪たちへ声を届けるため、幾度となく立ち向かってきた。

彼らは一様に己の悪行を声高々と並び立てたものだ。

爪の鋭利を誇り、滴る毒の悪辣さを謳い、殺めた無碍の民の最期の言葉を諳んじて、死への恐怖を呼び起こさんと私を脅してきた。

けれどどうだろう。眼前の鬼の言葉には責めるような調子も、力を誇示するような威圧もない。

ただ淡々と、静かに呟くような声色だった。

——だというのに、私は身悶えするほどの怖気を感じている。

「フン。お偉い坊さんが、わざわざ棄てられた地獄まで物見遊山か」

まるで死の具象。かつて私が心底から恐怖し忌諱した死が、ここにある。

「お前さん……どういう手品か、死を遠ざけておるな」

語ってすらいらない自らの肉体の秘密を言い当てられたことに、思わず息を呑んだ。内心の驚愕も隠せぬままに、恐る恐る問いかける。

「……わかるのですか」

「でなけりゃ、死に怯えながら鬼の前に身を晒す阿呆がどこにいる」

眼前の鬼は全てを見通しているようだった。それでも、努めて気丈に振舞う。

「貴方に問わねばならないことがある。だから私はここに来ました」

「……」

「私の言葉を、聞いていただけますか」

「聞くまでもない。」

——人も神も、儂を見れば口を揃えてこう問うのよ」

赤鬼が立ちあがり、釣られて見上げる。

崖にそびえる憤怒の形相の仏像たちが、私を見下ろしていた。

「なぜ鬼が仏を彫る、とな」



また、地底に珍妙な客人がやってきた。

笠を被った黒衣の女。らしさのある装いではないが、これで地上の和尚であるという。

死への怯えを纏わりつかせながら地底にまでやってくるとは、よほどの酔狂、あ

るいは英雄気取りの狂人か。

「人殺しの気配がよく見えとるようじゃの」

「っ！」

仏師が睨むように見下ろす。

後天的な不死者のほとんどは、その心の奥底では死を恐れている。

いつの時代でも不死の身体は容易に手に入らない。だが不死を得るにはまず、死への恐れが必要になる。

死を身近に感じ、極度の恐怖を感じとった者のうち、極一部だけが不死に辿り着くのだ。

「勘が良い。命の危険を感じ取れるとはな。確かに死なずを殺したのも、一度や二度ではない」

教えの歪んだ仙峯寺に巢食う蟲憑き、百足の這い回る死なずの求道者たち。

古く葦名に仕えていた頃には、それらを斬って捨てた過去があった。

「もっとも、今の儂にその手段はないが」

慄く尼の傍らを通り過ぎて、一つ出来上がった鬼仏を転がす。そしてまた手ごろ

な岩を手にとって仏を彫る。

死なずを殺す太刀。銘を『開門』。仙峯寺にて胎内くぐりの向こう、五重塔に安置されていた抜き身の太刀であった。

葦名一心が国盗り戦にて手にした刀もまた、これである。

仏師は遙か昔にこれを手放し、その在り処は葦名一心だけが知っているだろう。不死斬りは過去の技。現物なくして再現することは不可能であった。

「何が聞きたい。人も鬼も、仏に求めるものに変わりはねえだろう」

「……私は、仏の教えの下に、私は人と妖との共存を願ったのです」

僅かに震えるか細い声は、弱々しく矮小な、死に怯える脆弱な人間のそれ。

故に仏師は、その声に彼女の覚悟を見出した。

「……フン、なるほどな」

そうか、この尼僧が。ああ、どうりで。

その身一つで地底に潜り、まるで自らの不死性をも崩さんとする濃密な死を前に震えながらも、願いを貫き通すその姿はまさに時代の英雄に相応しい。

きつと理解のされぬ狂人であったのだろう。味方より敵の方が多かったのだろ

う。

守るはずの味方から、その背中を幾度となく襲われたのだろう。

ずっと剣と矛を向けられ、牙を爪を振るわれながら、それでも理想を語ってきたのだろう。

だからここに立っている。

「儂のことは、一輪や村紗から聞いたか」

「……はい。旧地獄から飛び出してきた彼女たちに聞きました。地底の辺境に、仏を彫る大鬼がいると」

千年を超えて忠を尽くすに値する主というものを、仏師は知っている。

ときおり現れるのだ。人に愛され、人を率い、また人を導く英傑たる人物が。

仏師の知るその人と同じ輝きを、目の前の人間は放っていた。

ちらりと、先ほど逃げ出し隅に潜んだ小ねずみを見やる。

あれはただの鼠ではない。なにか魔性の術の気配があった。

大方、単身地底まで乗り込んできた白蓮を心配した何者かが送った、地上の命蓮寺とやらの密偵だろう。

主の無鉄砲が下の者に心配をかけるのは、どこであっても変わらぬらしい。

「改めて、聞かせてください。貴方はなぜ、仏を彫るのですか」

小ねずみの視点を通じて地上から戦々恐々と事態を見守っている命蓮寺の面々の内心など露知らず。

白蓮は仏師に遮られるのではなく、自身の口でもう一度問いを投げ掛けた。

「さて、な」

それに答える厳めしい顔の鬼ははぐらかすようでいて、同時に答えに窮しているようでもあった。

「取り返しの付かなくなった何某への悔いか、あるいは詫びているのか……」

初めはただ苦しみから逃れるためだったかもしれない。自らの心の内にようやつと芽生えた罪悪感から、ただ目を逸らすためだったか。

己の業の深きを知り、どこからともなく浴びさせられる怨嗟から、仏に匿ってもらうような気でいたのか。

好き勝手殺しながら、自分の都合だけで目に付くすべてを殺しておきながら。

——なぜ鬼が仏を彫る？

「わからねえな。何のために仏を彫るのか。彫り続けるのか」

仏師が手にした無垢の岩をじっと見つめ、小さく呟く。

他ならぬ仏師もまた、その答えに悩む一人であった。

つける薬のない、愚か者だった。殺しの悦楽に我を失ったうつけ。

幾たび詫びようと許されることのない罪。悔いてなお濯がれることない自業。

それでも救われた。救っていただいた。

火はなおも燵り続けるが、他ならぬ狼の手によって確かに救いはもたらされた。

かつて腕を斬って頂いたときのように、隻狸の名を頂いたときのように。

梟が、戦場で餓えた野良犬を拾ったように。

それは確かに――

「慈悲……だったのかもしれない」

鬼が迷い一つも静かに語った言葉を聞き、白蓮が瞠目する。

「だからきつと、その恩を返さねばならん」

では、と白蓮が言葉をつづけた。

それは静かな決意を感じさせる声色であった。

「我が命蓮寺に、仏像を彫って頂けませんか」



人里の大通りからやや逸れた、人気のまばらな通りに甘味がうまいと評判の茶屋がある。

いつ顔を出しても繁盛しているのに、小腹が空いているときにちらりと覗いてみれば都合よく閑散としているような、何とも収まりのいい茶屋だった。

店の構えも至って素朴で華やかさやとは程遠いけれど、不思議と居心地が良い。人に愛される茶屋だった。

人里で人に紛れて暮らすくろ首の赤蛮奇は、この茶屋で働いていた。

赤蛮奇もここで働いていてしばらくになる。人になりすまして夜な夜な人を食うためでは無い。

ただ退屈しない程度に面白おかしく日銭を稼いで生きていけばいいと思って暮らしている。

さりとて毎日働いていれば、職場に大小なりとも不満が出るものだ。

それは同僚との人間関係であつたり、あるいは訪れる客の質であつたりするだろう。

「お酒出してよー！」

酒をだせとのたまっているのは小柄な少女。ただし、頭部から太く硬質な双角が飛び出している。

妖怪。種族、鬼。消えたはずの妖の頂点。

どういう訳か、博麗神社の方で温泉が湧いたのどうだのという噂話が聴こえてからしばらく、あたかも初めからそこにいたかのように姿を見かけるようになった。いたずらに力を振り撒くことはないが、ただ相對するだけで覆しようの無い力の差というのを感じる。

赤蛮奇のような人を驚かす程度の妖怪からしてみれば、おっかないことこの上ない。

例え客と店員という関係だとしても、腰が引けてしまうというものだ。

嘘か真か、鬼の格は角の大きさに決まるといふ。

他の鬼など数えるほど見かけていないが、それに則って考えてみればこの少女は鬼の中でもかなり上位に食い込むのではなからうか。

静かで穏やかな日々を好む赤蜜奇からしてみれば、はつきり言って一度たりとも関わりたくない手合い。

だが、客として訪れられてしまったては対応せぬわけにもいかない。

だから赤蜜奇は、こういうときはいつも同僚の脇腹を肘でつついて、代わりに行かせることにしていた。

「……茶だ」

横暴な小鬼に無愛想に茶を振舞ったこの男こそ、赤蜜奇にとって唯一の同僚。

特徴は多い。まず客商売にあるまじき愛想の無さを誇っている。喋っても一言か二言程度で、相槌も唸る程度。どう考えてもこの職に向いていない。

そして風貌。寂れた柿色の外套を羽織っており。しかも腰に刀を差し背中にも太刀を背負っている。

更に片腕が絡繰り仕掛けの義手になっている。表面は傷だらけだが、本物の手の

ように自在に動かせるとても精巧な品だ。

赤蜚奇はいつも『お前のような茶屋の店員がいるか』と心中で思っている。というか、初対面のときに一度そう突っ込んだ。

唸り声しか返ってこなかったが。

店の用心棒も兼ねているそうだが、威圧感を与えすぎなのではと当初は感じたものだ。

だが……

「私は酒をくれて言ったんだけど」

「できぬ」

「あー？」

「ここは茶屋だ」

「そう固いこと言わないでよ」

この鬼のような面倒極まりない客が相手のときは、この仏頂面の同僚が頼もしい。信じがたいことに、この人間の同僚は鬼が相手でもまったく物怖じしないのだ。初めは安全な人里の暮らしに慣れて平和ボケした間抜けかとも思っていた。

刀を持って気でも大きくなったのかと。

ただ、今日のように厄介な妖怪が出入りすることも加味して考えれば、彼のような態度をとる店員も必要なかもしれないと思ったのだ。

同じことをやれと頼まれても、赤蛭奇はまっぴらごめんだが。

けれど今日は少々風向きが悪い。

タチの悪い客が相手でもずけずけと物を言う同僚には頼りがいを感じていたが、今回は鬼が相手。

多弁とは対極にある彼の性格からして、相手の神経を逆撫でるような物言いになっってしまうこともある。

そうなれば事態を丸く収めるのは難しいだろう。

まさか鬼も人里のど真ん中で暴れたりはしないだろうが、万が一ということもある。

自分でけしかけておきながら、赤蛭奇は恐る恐る事の顛末を眺めていた。

「まあ聞いてくれよ。このあいだ、秘蔵の酒を旧友に強請られちまってさあ。土の底で飲んだくれてるような気の長いやつだから、どうせ本気にしないと思ってさ、

冗談半分に喧嘩で勝ったら酒くらいくれてやるって言ったんだよ。

したら、あんにやる手加減なしでぶん殴ってきやがった。一等いい酒を持っていたよ」

「……何が言いたい」

「機嫌が悪いんだ。ここでやけ酒させてくれよ」

「許さぬ」

横暴な態度だ。客観的に見れば、正しいのは明らかに同僚の言い分。

弱みを見せない毅然とした態度も必要だと思う。

ただやっぱり今日ばかりは相手が悪いんじゃないかと、赤蛭奇はそう思うのだ。
「ふうん。人間風情が、鬼を前に大した度胸じゃないか」

「……」

「顔の白い痣に、左腕の義手。随分と目立つなりだねえ。お前、どこから来たか言ってみな」

「……断る」

小さな茶屋に覇気が満ちる。店全体が悲鳴を上げるように軋み出す。湯飲みに注

がれた茶に波紋が広がる。

強烈な敵意。胆力の無い者であれば、とっさに武器を構えていただろう。

ただし、同僚はそれを意にも介さず、ただそこに佇んでいた。

「お前。やっぱり《本物》だろ」

鬼の眼に剣呑な光が宿る。

「どうかな。店を壊せば口を割る気にもなるかい」

これはヤバイやつだ。赤蛮奇は直感でそう思った。当事者でもないのに、頬に汗がっつたう。

思考回路はさっぱりだが、この迷惑客の頂点はこの店で暴れることを考えている。もちろん巻き込まれたらただでは済まない。

今から本気で裏口まで疾走すれば命くらいは助かるだろうか。赤蛮奇がそんなことを考えてちらりと脱出経路を目で追ったとき、小さな人影が目に入った。

「これこれ。私の茶屋で荒事はやめておくれ」

「主殿……」

厨房の方から顔を出したのは、この小さな茶屋の小さな店主。

あの会話に割って入るとは、同僚に負けず劣らず大した胆力である。

唐突の店主の出現にはさすがの同僚も面食らったらしく、珍しく慌てたような素振りを見せている。ほんのちょっぴりだが。

あわや喧嘩事という一触即発の雰囲気の中に店主が身を乗り出してきたこの状況に、どうも同僚は気が気でないらしい。

「あんたが店主？ 驚いたね、とんだ童子じゃないか」

お前が言うな、と思わず突っ込みたくなったのをギリギリで留まった赤蛭奇は自分を褒めた。

一声でも上げて注目されてでもしたら、どうなるかなど想像もしたくない。

「うちでは喧嘩はご法度でう。それにほれ、今日は閻魔様もおるでな」

「おや」

そうだ。そういえば他に客もいた。この鬼が来店して以来完全に失念していた。店主が一瞥した先には客が一人。注目を集めたことに気づいた緑髪の少女が顔を上げる。

「む、なんです？ 今日の私はオフですよ。ご期待に応えるつもりはありません」

店内に漂う緊迫した空気などどこ吹く風。頬張る団子を茶で強引に飲み干してマ
イペースに喋り始めたのは、何を隠そうこの幻想郷の閻魔である。

本来であれば三途の川を超えた先で死者を裁くのが彼女の役割だが、今日は公務
を執行する日ではないようだ。

「今はただの四季映姫ですから、どうぞお構いなく……と言いたいところですが。
このままでは、ともすれば店が倒壊するほどの荒事になりかねませんか。

ここは私の顔に免じて場を収めていただきたい」

「うむ……参ったねえ。閻魔さまの前ともなりや、鬼も悪さできないや」

酒にでも酔ってりや話は別なんだけど、なんてのたまいながら鬼をふっと力を抜
いた。

それでようやく、店中に押し掛かっていた重圧のようなものがなくなった。

見れば同僚の出した湯飲みなど、外縁に亀裂が入っている。

賠償の請求もしてやれ、同僚よ。

つまらなさそうに店を出る鬼の背後にそのような念を送っていると、突如鬼が振
り返ったので慌てて目を逸らす。

「焼けた合戦場の、伝説の鬼斬り」

「……」

「昔その噂を聞いた時から、その鬼斬りとやらがどんなヤツかずっと探してる。『俺がそうだ』と吹聴するやつは何十と見たけど……」

何かを確信したような目で、同僚のことをじっと見ていた。

「ま、今日はもう引き上げるとするさ。次は客として来る。よろしくね」

「……酒は出さぬ」

「ちえっ。仕方がない。命蓮寺の鬼が彫ったとかいう仏でも見物にいくかな……」
不服そうな素振りがあったものの、ようやくあのはた迷惑な鬼はこの店を後にした。

最後にまた来るとか言っていただろうか。頼むから二度とこないでほしい。出禁とかにできないのだろうか。

いや、出禁にしてもきつと無視するだろう。絶対そうだ。

ここ、辞めようかな。でも払いはいいんだよな。

真剣に悩む赤蛮奇の思考を遮ったのは、明快な店主の声だった。

「いやあ、助かった！ 映姫殿がいなければどうなっていたことか」

「お構いなく。いえ、その帯刀している店員の方には説教したいことが山ほどありますけれどね。」

でもオフなので。基本的に一般人だと思ってください。甘味に集中したいので「おうとも！ 堪能していつてくれ！」

いやはや見慣れぬものだ。なんとも珍しい。

他人に説教していない四季映姫の姿を見れるのは幻想郷広しと言えどこの店内だけに違いない。

それ以外の場所ではエンカウントしたらありがたい説教をぶちかまされてしまうからだ。

あの閻魔はこの茶屋ではかなりの常連にあたるが、店員として接していたら、死後の裁判が甘くなったりしないかなー、なんて邪念もあったりする。

まあそれで裁きが揺らぐくらいなら閻魔なんて到底務まらないだろうけど、期待する分には勝手だ。

なので赤蛮奇は決まって愛想よく接客している。これもまた、この店で働くこと

での大きなメリットかもしれない。

なんて、鬼に気取られていたが良い時間だ。もうすぐ忙しくなる。

そら、ぞろぞろと客がやってきた。

「こんばんわあ。狼さん、いるかしら」

「む……」

「おお、いらっしやい！ よしきた赤蛮奇どの、厨房が忙しくなるぞ！」

出た。冥界の姫だ。お淑やかなふりして超がつくほどの大食漢。

店主は朗らかに迎えているが、この後の繁忙を思うと愛想笑いがついつい引き攣ってしまう。

彼女ひとり訪れるだけでウチは大忙しだ。でもまさか客に向かってそんな食うなよなんて言えるはずもなく、給仕の私も厨房に入ってフルで店を回さないといけない。

いや厨房には男の同僚が入って、接客は華のある私ができるべきだとも思う。

思うのだが、イロモノ枠の多い当店のお客様はいかにも面白そうな同僚の方と話したがるのだ。

「ね、ね、狼さん気は変わった？ 主を変えるつもりはないかしら」

「……戯言を」

「じゃあお弟子さんとか取ってないの？ うちの妖夢ちゃんとかどうかしら」

「……断る」

「とりあえず写真だけでもどうかしら！ 本当に可愛いんだから！ きつと気が変わるわ」

「……いや」

見よ。

押されている、同僚が。

鬼にさえも一步を退かなかったあの同僚が押されている。

傍から見ても凄い圧だ。頷くまで追及を止めないという強い意志が感じられる。

実は私も口添えするように冥界の姫から頼まれているのだが、同僚を売るような真似はできない。

冥界の姫の勧誘を同僚は幾度となく撃退しているが、今回ばかりは危ういのでは

ないか。

そんな風に眺めていれば、すぐに新しい客がやってくる。

「やあやあ盟友！ 繁盛しているかい？ とところで一回でいいからさ、その義手バウらせてよ！」

「……できぬ」

「ね、いいでしょ！？ 絶対元に戻すからお願い！ 盟友のよしみでさ！」

「……断る」

「私だって技術屋の端くれ、そんなものを見せられちゃあたまらないんだ！」

「……できぬ」

妖怪の山の河童だ。彼女も常連。

同僚の義手が目に入ってからというもののすっかりうちに通っている。もはや彼にアプローチを仕掛けるついでに茶を頼んでいるような始末だ。

やはりあの義手はものを作る人間からしてみれば垂涎ものなのだろう。

こちらに関しては、同僚は常に毅然とした態度で否やを突き付けている。

だが河童だって一步も引かない。

実は私も口添えするように河童から頼まれているのだが、同僚を売るような真似はできない。

持ち掛けられる話は幾度となく斬って捨てているが、河童というのは交渉事に長けているものだ。今日こそは危ういのではないか。

そんな風に眺めていれば、すぐに新しい客がやってくる。

「こんにちは。どう、狼さん。薬水瓢箪を私に預ける決心はついたかしら」

「……しかし」

「どこからともなく薬水の湧きだす瓢箪。私はその種を明かしたいのよ」

「……だが」

「その瓢箪の水はすさまじい薬効なの。たくさんの人のためになる。何を迷うことがあるのかしら？」

「……む」

竹林の永遠亭の薬師だ。彼女もまた、常連。

ドジな狂気の兎が店先ですっこけてまあまあな怪我をした折、同僚が瓢箪の薬水を飲ませて治療したのを聞いて以来、瓢箪の調査を懇願している。

たちまち怪我を癒す薬水の力もさながら、際限なく水の湧き出てくる瓢箪の謎も気になる。

学者然とした彼女の知的好奇心をくすぐるのだろう。

同僚は迷いつつもいつも断っている。やはり大切に貴重な瓢箪なのだろう。

だが、薬師も説得を諦めない。

実は私も口添えするように薬師から頼まれているのだが、同僚を売るような真似はできない。

同僚はいつも断っているが、薬師は賢い。もっともらしい正論で絡めとられてしまっ
まうだろう。

同僚がキツパリと断れていないのがその証拠だ。

今日こそ首を縦に振らされるかもしれないがその証拠だ。

ああ、新しい客がやってきた。同僚がまた絡まれている。

今度は山の大天狗にせっつかれているようだ。

『御寄進回し』とかいう大団扇が興味を惹いてしまったらしい。

麦飯のおにぎりを材料に交渉しているが、私が思うにあれピンチだぞ。

なにせ同僚は米に目がないのだ。今回ばかりは危ういか。

ああ、この店は、眺めていてすこし面白すぎる。

やはり、辞めるのはもう少しあとにしよう。

や、やめて、石を投げないで！

私もこの主従を登場させる気は無かったんです！

でもフロムがSEKIRO発売からもうすぐ3年経つて言うのに、いつまでたっても茶屋ENDを用意してくれないから……！

Q・どのルートを経た狼ですか？

A・言えぬ。

Q・竜胤の力はどうなりましたか？

A・言えぬ。

Q・いつからどうやって幻想郷に？

A・言えぬ。

Q・仏師と出会うことはありますか？

A・言えぬ。

Q・無限茶屋編読みたい

A・わかる

さくら

桜みてたら続き思いつきました

桜、桜、桜。

二百由旬の桜吹雪。

吹きすさぶ桜の花びらのただ中で、どかりと座り込んだ老人がいた。

死装束を身にまとい、細い骨に病魔に侵され黄ばみ汚れた肌が張り付いた、老いさらばえた人影。

あぐらをかいて瞑想に耽るその小さな姿は、桜の吹雪に掻き消されそうなほどに矮小。

だが、絶対にそこに『在る』。

調和とも、圧迫とも違う。

断固として、周囲の認識を徹底的に塗り潰す存在感。

道を譲り、平伏し、膝を突かねばならない。

おのずとそう思わせるほどの、主としての輪郭がある。

何もしていなくても、老い衰えようと、たとえ死せども。

だからこそ、異常。

「幽々子さま、あの亡霊、まだあそこにいますよ」

「そうねえ」

そしてそれを遠目に眺めるのは、この地の主人とその従者であった。

「どうしましょう。冥界の霊が怖がって、みんなどこかに隠れてしまってますし」

「そうねえ」

ここは冥界。死者が閻魔の裁きを待つあいだ、ほんのひとときを過ごす世界である。

この白玉楼は、その冥界の主人、西行寺幽々子の構える大屋敷。

静かながらも四季の豊かな地であり、普段は審判の時を待つ多くの霊に囲まれている。

その白玉楼に、今は西行寺幽々子と従者の魂魄妖夢、二名の姿しかない。

その原因は、明らかにあの老爺にあった。

「行つて話しても何も喋りませんし……」

「そうねえ」

あの亡霊は、ふらりとこの地に現れた。

そして桜を眺め、座った。

たったそれだけ。

それで、冥界から霊が消えた。

「いっそ、斬りましょうか」

「そうねえ」

「斬って成仏させてしまえば、まるっと解決ですし」

妖夢が腰の刀に手をやった。

銘を白楼剣。

代々西行寺に仕える魂魄家の家宝にして、斬った霊を成仏させる霊刀である。

「やっぱり、それはやめておきましょう」

「そうですか？ 斬れと命じられれば斬りますが」

「だって、行きつけの茶屋で閻魔さまに怒られてしまうわ」

「う。それもそうですね」

幽々子の言葉を聞いて、妖夢はあっさりと刀にそえた手を離した。

白楼剣による成仏は死後の裁きの管轄を侵害しているため、みだりに使用しないよう閻魔に言い含められているのだ。

せっかくの甘味の時間に説教されてしまったものではたまったものではない。

「でも、どうでしょう」

「うーん。冥界の端っこまで押すのはどう？」

「それで霊が戻ってくるとは思えません……」

「ふふ、冗談よ。それより妖夢、お客さんみたい」

「え？」

促されて妖夢が振り返ると、そこには大きな鬼がいた。

巨大にして真紅。醜悪にして大仰。

憎悪と怨嗟と、嫌悪と虐殺の権化。

それほどの存在が、音も気配もなくそこに佇んでいた。

「――用向きは？」

妖夢は瞬時に縁側から立ち上がり、背後に幽々子を庇うように立ち塞がった。もうそこに、先ほどまでののかな雰囲気はない。

「花見じゃ」

けれど鬼は妖夢の剣呑さなどどこ吹く風。

体格に見合う巨大な徳利をちゃぷりと揺らして、妖夢に掲げて見せた。

「場所は、どこを取っても構わんか」

「あ、えー………と、はい、大丈夫です、けど……」

「そうか。厄介になる」

それだけ告げると、鬼は妖夢に背を向けて歩きだした。

その先は、件の老人のいる方向であった。

妖夢は向き直った。

「幽々子さま？」

「なあに、妖夢」

「白玉楼は花見に訪れるお客さんには、自由に開かれていますけど」

「そうねえ」

「鬼も、例外じゃないです」

「そうねえ」

「でも変ですよね!? あの鬼、あの亡霊の方に歩いていきましたよ!」

「妖夢ちゃんは元気ねえ」

あの方角は、老人の亡霊以外とくに何もない。

花見にとりわけ適しているわけでも、大仰な桜が見れるわけでもない。

要するに、わざわざ断りを入れた後、行くような場所ではないのだ。

そんな妖夢の問い詰めに、幽々子は陽気に微笑みながら、答え合わせを始めた。

「ほうら、もう春でしょう?」

「春ですけど」

「だからね、紫とお話したのよ」

「ああ、なるほど。そういえばもう、冬眠が覚める時期でしたか」

八雲紫。幻想郷の管理人して、大賢者。

そしてなにより、西行寺幽々子の親友である。

「でね。相談してみたの。冥界に風変わりなお爺さんがいるって」

「風変わりでは済まされないと思いますけど」

「とりあえず妖夢ちゃんも座ったら？ 立ちっぱなしだと疲れちゃうわ」

「……まあ、はい。そうします」

勢いよく立ち上がった妖夢も、すっかり毒気が抜かれたようで、脱力してまた縁側に腰掛けた。

そうして、二人の間には最初そうであったような、春の陽気に相応しい麗らかな雰囲気を取り戻された。

彼女たちの視線の先では、赤鬼が亡霊の隣に腰を降ろしていた。



「一心さま」

「……その声。お主、隻狸か！」

「お久しぶりに、ございます」

この地に姿を表して以来、ただの一度も口を利かなかった老爺が、鬼の声を聞くと快活に口を開いた。

一心。確かに、鬼は老爺をそう呼んだ。

そして鬼もまた、久方ぶりの隻狸という呼び名を静かに懐かしんでいた。

「カカカッ！ なんじゃあ、お主もくたばったか！ 言えいッ！ 誰に斬られた！」
「一心さま……」

「冥府でなにを今さら口ごもる！ よもや名も知れぬ相手に殺られたわけでもなからう！」

「まずは、乾杯を」

鬼がずいと徳利を差し出す。

老爺はそれを見ると、目の色を変えた。

「おおっ、竜泉！ 上物ではないか！ 生前は身体に障ると止められておってな！ なんじゃ、桜と酒があるなら、退屈な冥府も二倍楽しめよう！ カカカッ！」

「では……」

「……ぷっはぁー！ たまらん！」

「ぶはぁーっ！」

桜の木の下で、男が二匹向き合って座って、酒を酌み交わす。

赤鬼と、老爺。

歪な二人は地面に腰を落ち着け、互いの盃を同じ高さに掲げていた。

「にしても……。見違えたぞ、隻猩。よもや鬼に化けるとはな」

「儂の業が……。心のありさまが、もたらした姿です。言い訳のしようもない」

「辛気臭い話はいい！ して、誰に斬られた？」

「……いかがでしょう。当ててみては？」

鬼の言葉に、老爺はにいと齒を見せて笑った。

「言わせるか、隻狸！ お主のような修羅の如きを斬るなど、儂を除いたならば、あやつにしか出来ぬわっ！」

「儂も……。一心さまを斬るなど。もしできるとすれば、ただ一人しかいないと、そう思っていたところです」

二人は顔を見合わせ、盃の縁をこつんと交わし、二人そろってまた勢いよく酒を煽った。

「カカツ！ よもやエマに斬らせたなどと宣おうものなら、逆の手もここで斬り落としてやるつもりじゃったわ！」

「あれほど熱心に剣を仕込みながら、何を。……門弟が布を噛んで嫉妬していたでしょう」

「筋が良かったからのう！ 鬼斬りを見据えて鍛錬する輩名衆などおらぬゆえ、あれはとびきりだった」

修羅を、鬼を、斬る。

ただそれだけを見据えて、剣を学んだ少女がいた。

かつて一心が修羅をも斬ると嘯いた十文字。

それを真摯に、そして本氣にして剣を学んだ。

そして彼女は、覚悟の差だろうか。

一心に学んだ娘は、他の輩名衆でさえ至れなかった領域に踏み入れていた。

「カカツ！ あやつはのう、十文字に限っていえば、儂のそれさえ凌駕しておった。あれには流石に目を見張ったのう！」

「だとしても、斬らせるわけにはいきませんまい。あまりに、しのびない」

「抜かせ、隻狸！ お主の顔には、同じ技なら二度は通用しないと書いてあるぞ！ カカカツ！」

「……」

鬼は幾度も考え耽ったことがある。

もしも再び、一心さまと立ち会うことがあったならば、あの奥義をいかにして捌き、防ぎ、凌ぐのか。

何度も何度も試し、唸り、頭の中であらゆる対策を打ち出した。

もし、娘が自分に一心の斬撃を再現して立向かったならば、己はきっとそれを打ち果たすだろう。

鬼がそう思っていたことさえ老爺は見通して、酒を煽り、笑っていた。

「聞け、隻狸。儂は過ちを犯した」

「……」

そう語り出した老爺は、哀愁と歓喜が入り混じった奇妙な表情をしていた。

「死人帰りよ。ひとたび死におおせながら、現世へと舞い戻ったことがある」

「黒の、不死斬り。よもや、あれが振るわれたと」

「如何にも。そして……病に斃れたはずの儂は、すすき野原で斬り結び、葦名の戦をして死ねた」

それはきつと満足のいく死に様であつたのだろう。

そしてそれは、本当はあつてはいけないものだった。

だからだろう。それを正してくれた何者かに対し、老爺は深い感謝の念を抱いているようだった。

「ここは奇妙な所じゃ、隻狸。本当の冥府ではない」

「……」

「この世の理を捻じ曲げた報いかと思うてな。此度ばかりは、何に呼びかけられよ

うと黙ると決めておった」

それは、桜の吹雪の中で意識を取り戻した老爺が最初に決めたことであつた。

「なれど……儂が訪れた」

「しかも、こんな泣き顔の大猿の姿でう！ カカカッ！ 思わず決め事も忘れて返事をしてしもうたわ！」

やはりずうつとだんまりはやはり性に合わなんだと言いながら、己の膝をばんばんと叩いて老爺が愉快に笑う。

そしてひとしきり笑うと、老爺は神妙に鬼の顔を見た。

「のう。感謝するぞ、隻狸よ。儂はこの過ちの悔悟を……ずっと誰かに打ち明けたかったのかもしれない」

「一心さま。ここは、この地は。幻想郷という……忘れ去られた者どもの、流れ着く地だと」

「よさぬか、隻狸よ。……儂は死んだ。それが全てよ」

老爺はそれを告げると、最後にもう一度盃を煽った。

注がれた酒は、それでなくなつた。

「第二の生も、第三の生もない。

——葦名一心は、とうに死んだのよ」

老爺は酔いも醒めやらぬままに立ち上がった。

手には、一振りの刀を握られている。

そして、白玉楼の縁側へと向かい叫んだ。

「小娘ッ！聞いていたぞ、儂を斬って成仏させいッ！」

「は、ハアッ!? なんですか急に!？」

「しからば、参るッ！」

「ッ幽々子さま、お下がりをッ！」

轟、という音を残したとき、老爺は既に娘と斬り結び、吹き飛ばしていた。

「なんじゃあつ、他愛ないッ！」

「っ……!!」

少女は血相を変えて姿勢を立て直し、今度は自ら老爺に斬ってかかった。

「ぬるいッ！鼠にも劣るわッ！」

「な、なん、この……!!!!」

「この程度の戦では、斬られてやれぬわあっ！」

本物の殺気を伴って繰り出された少女の剣撃は、されど老爺に水のように容易く跳ねかえされていく。

「娘、名乗れいッ！」

「……、魂魄、妖夢……っ！」

「鯉が登るように打て！ 滝を下るように返せ！ 体幹がなっておらん！ 儂が忍びであれば既に首を取られておるぞ！」

「く、つ、強いっ……！」

攻めていたはずの少女が大きくよろめき、甚大な隙を晒す。

老爺はそれを咎めることなく、ただ喝をいれるに留めた。

既に老爺に少女を斬り殺す意図がない証左である。

よってこれはもう、もはや命のやりとりにも満たない何かだ。

しかし少女は必死さゆえか、それさえ気づかず再び老爺に斬りかかる。

今度は腰のもう一振り、楼観剣を抜いた二刀流。

だがそれも容易にいなされ、まるで攻めが通用しない。

「なんじゃ、この腑抜けた太刀筋はぁッ！死にぞこないの爺さえ斬れぬとは言わせぬぞッ」

「死にぞこないの、爺が、こんなに、強いわけ……ないでしょうがあ……ッ！」少女と老爺が枯山水の庭園を荒らし、桜吹雪をも押し返すように戦を繰り広げる。しかしそれは暴れる童を大人があやすような、遥かなる力量差が見て取れる児童にも等しいものだった。

そして、彼女の主はそれをゆったりと落ち着きながらそれを遠巻きに守っていた。

「あらあら。妖夢ちゃんがあんなに押されてるわ。どうしましょう」

「……一心さまが成仏するのは、いくらか先になりそうじゃな」

先ほどまでは老爺と盃を交わしていた鬼も、気づけば彼女の傍らにいた。

「もう、よいじやろう。儂はここで暇しよう」

「あら、いいの？古いお知り合いなのでしょう？」

「元より、因果の外側よ。儂もあの方も、縋りゃあ、せん」

「そう？いいのよ、幻想郷はすべてを受け入れるのだから」

唐突に傍らの空間がどろりと垂れ下がり、場所と場所との間が引き裂かれる。

そうして出来上がった、【スキマ】としかいいようのない異空間から、金髪の女性がひよいと上半身だけ姿を表した。

「あ、紫」

「こないだぶりね、幽々子」

その人こそ、幽々子の親友にして境界の大妖、八雲紫であった。

「ごめんなさいね、冥界にまでしわ寄せがいくと思っていなくて」

「不思議なお客さんがいっぱい楽しいわ」

「不思議で済ませられるのは、幻想郷広しといえど貴女だけだと思っただけだけど」
空間の狭間にもたれかかる紫の姿は、親友との談笑に興じてリラックスする貴重
な姿である。

「仏師さん。あなたもありがとうね。正直、協力してくれると思ってなかったわ」
「慈悲ってえのは、そういうもんだろう」

「本当、助かるわ。冬眠明けに摩多羅から事情を聴いたときは卒倒するかと思った
のだけれどね」

起き抜け一番に戦争の災禍と戦死者の憎悪と民間人の怨念を一身に受けて鬼に

なった戦国時代の人間幻想郷に入れておいたから、後よろしく！と言われた八雲紫は、本気で二度寝がしなくなったという。

しかし恐る恐るコンタクトを取って見たところ、いい意味で彼女の心配は裏切られた。

鬼というのに無闇に力を訴えるようなことをせず、神々とも良好な関係を築き、弾幕ルールの意義にも理解を示し自ら距離を置き。

それでいて、山の天狗を力で黙らせ首で使えるほどの実力者。

「一応聞くのだけれど、賢者の従者とかって興味ないかしら？」

「よそを当たんな。……儂は仏を彫る」

「そう……残念。困ったことがあったら呼ぶのよ。ある程度は便宜するから」

思わず従者として、たびたびスカウトしてしまうほど。

もう何度も振られてしまっているが、彼のような人物が従者であれば、どれほど心強いかな。

冷徹な精神性もさることながら、戦闘、諜報、護衛に工作。更には巨大な鬼の姿は、妖怪社会における示威効果もすさまじい。

幻想郷の勢力バランスも一気に管理しやすくなること請け合い。

あまりにも好物件すぎる。できればもう何度かコンタクトを重ねて、良好な待遇で囲いたい。

「あんまりしつこいと嫌われるからほどほどにするのよ？」

「うっ、そうね……」

という魂胆は親友にも筒抜けだったようで、紫は横腹を幽々子に突かれた。少なくとも関係悪化だけは避けたいところではある。

「とりあえず地底までは送るわ。もういいのかしら？」

紫の問いに、鬼は老爺の方をちらりと見やった。

「ああ。成仏してなけりゃあ、また酒を届けに来る」

「そう。幽々子もうっかり成仏しないように。じゃあね」

それだけ言い残すと、二匹の妖怪は閉じたスキマに飲み込まれ、白玉楼から姿を消した。

しかし、白玉楼に静寂は訪れない。

むしろ静寂とは程遠い喧騒に包まれている。

庭園では、ちょうど老爺が裂帛の気合と共に爆炎を刀に迸らせていた。

「私って、あんなレベルで成仏しないと思われているのかしら……」

ちよっと親友からの印象を考えて、悩まし気に頬に手を当てる幽々子であった。

仏師と一心は作中で会話してないので、仏師どのの口調はすべて捏造

でも敬語を使わないほうが違和感だったのでこのように落ち着きました

ゆかりんかわいいね

ゆゆさまもかわいいね

地底の仏師

著者 へか帝

発行日 2024 年 4 月 5 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/205731/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
